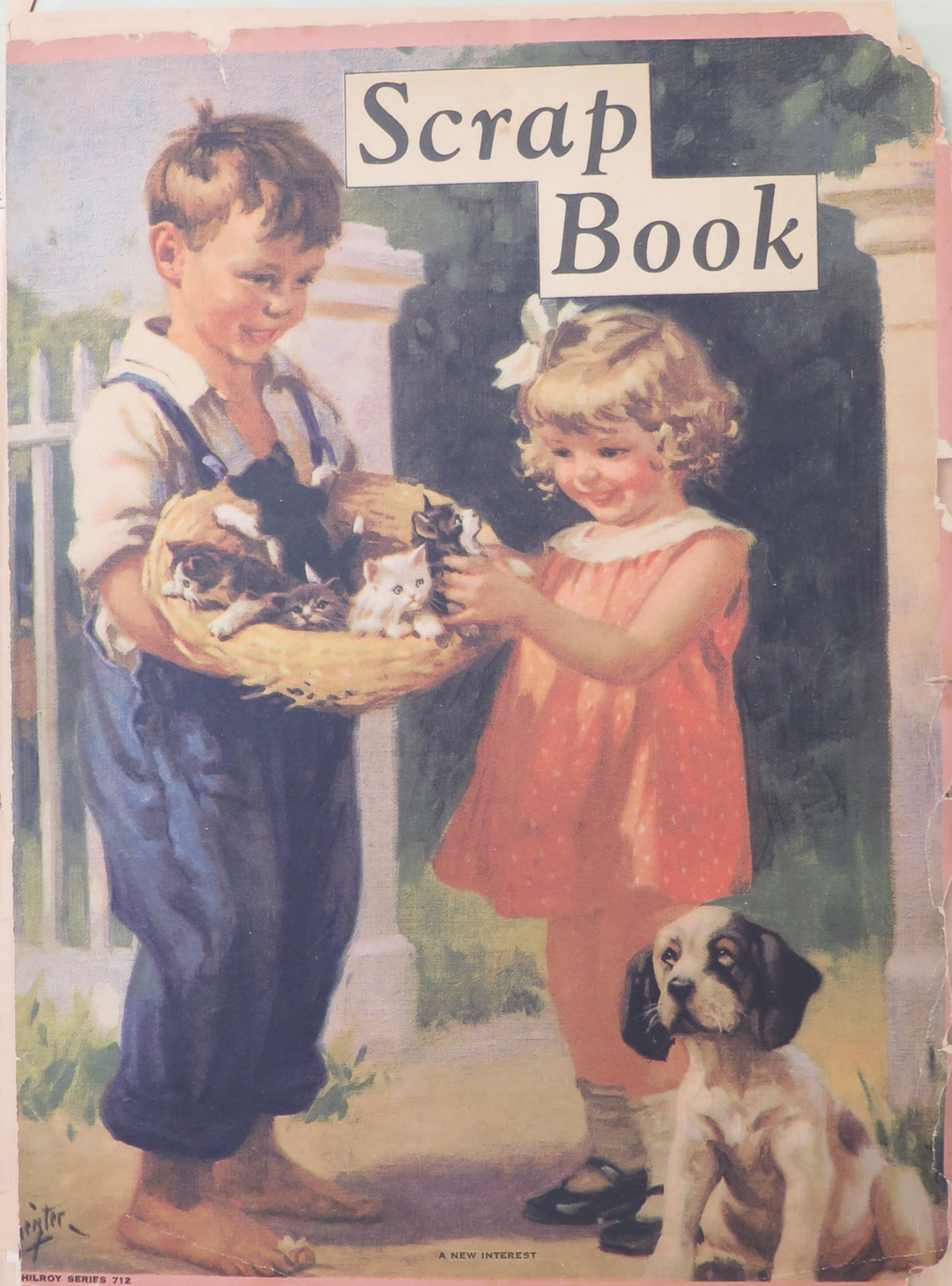
This copy has been provided by the UBC Archives [or UBC Rare Books and Special Collections] and is to be used solely for research or private study.

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.

PLEASE RETAIN
ORIGINAL ORDER

IX.C.4



YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

Nov 20/56

赤川先生を想う

清水小三郎

カナダ日系人間に満四十年間牧師として盡瘁し、五年前引退して靜かに餘生をウイニペグに送つて居られた赤川美盈先生は、過去一年餘病床にあつて令孃ルースさんの厚い看護を受けて居られたが、去る十月二十一日午后三時遂に神の御招きに應じて昇天された。

赤川牧師は青山學院神學部を卒業後東京銀座メソジスト教會の副牧師として勤めた時に、先生が卒先し日系人醫師の協力を得てストラスコーナ校舍内に特設病院を開いて惱める同胞に奉仕した。一九一九年には体育館の必要を叫び、一般同胞に呼びかけて遂にこれを完成した。又同時代に領事（浮田）や各新聞記者達と協力して「生活改善講座」を設けて同胞の啓發に努めた。教會としてはオーシャン・フォールス及びオカナガン教會の創設に力を添へ、フレザー河畔教會及びマニトバ諸教會の創立者であつた。

赤川牧師は新西院、晩香坡、フレザー河畔、マニトバの諸教會を牧されたが、「善き牧者」であつて、うせたる羊をよく尋ね求め、こ來以來在加同胞敎化のために專心し、教會史上に、また一般同胞史上に多大なる貢獻をなした。殊に先生は世に稀な創業家であつた爲に、教會の内に外に多くの企業を成して歷史を作つた人である。その二、三を擧げるならば、一九一八年、第一世界大戰の直後スパニシー河畔教會及びマニトバ教會の創立者であつた。

赤川牧師は新西院、晩香坡、フレザー河畔、マニトバの諸教會を牧されたが、特別にお世話になつた方である。ハーバード大學時代に學資が不足で困つていた時に、先生は教會内の有志から借金して送金して下さつた。筆者は後その借金は全部返却したが、その時の先生及び有志諸氏の御恩に對しては永遠に報い得ないという感謝の念を有している。

先生は逝かれたが、先生の行われた愛の業、その精神は永遠に生きて在加同胞の將來を祝福するであろう

YAMAGA YASUTARO PAPERS

忘れられた人々

ハミルトン　山家安太郎

日本の昔の或る社會統計に依ると、七人の衣、食、住が只一人の稼ぎに依存して居ると謂う。即ち女、子供、老人、不具者、病人等の七人を、一人の收入でまかなつている割合である。カナダでは、働く事のできない者の、扶養の責任を、政府と慈善團体で持つてくれる。其の財源は、言うまでもなく、稅金と只今やつている連合レッド・フエザー募金運動であり、日系人もその恩惠を蒙つている事は勿論である。保護者なき病者、不具、老人等は、その住む社會、國家の負擔である。即ち働き得る人々の負擔である。

今から四、五〇年前に、柳行季一個を提げて、單身カナダに移住し、言葉は通せず、風俗も食物も異つた國で、排日の屈辱を忍び、酷しい寒暑に耐えつつ、牛馬の如く働らき、稼ぎ拔いて家庭を營み子女を敎育して居ると謂う。即ち女、子供、老人、不具者、病人等の七人を、一人の收入でまかなつている家庭は別として、カナダ國民の一構成分子として、燦かしい日系市民社會を作り上げた一世は、今涙ぐましい美しい日常を送つている家庭を多勢育てたが邪魔扱いされ、或者はたよりに思つていた彼等が秋風にコートの襟をかき合せ乍ら、トボトボと街路樹の落葉を踏んで歩く姿を誰が心に憐れめてくれるのであろうか。

現在の日系人社會を生み出したパイオニヤーの一人だにも淋しい不安極まる晩年を送らせてよいであろうか。己に西部各所には私營救世軍の老人ホームに世話になつている者が少數ある其他に老いの身を生きんが爲に跪ぎ苦しんでいる多數のパイオニヤーが日系社會から忘れられてはしないかと何の束縛もなく、同じ境遇の友と自國語で遠慮氣兼もなく語り合い、日本食を味い乍ら現實の悲哀である。而もそれは歐洲移民の末路にも多く見られる事實である。

其の親子思想の相違を親が我慢して子に從い、子が忍んで父母の老後を勞わりして、燦かしい日系市民社會を作り上げた一世は、今涙ぐましい美しい日常を送つている家庭は別として、子女

兵庫県
社会の福祉
6月号
毎月一回一日発行　定価一部3円
発行所
神戸市生田区中山手通二丁目一一三
兵庫県社会事業会館内
兵庫県社会福祉協議会
編集発行人　小倶頼一

昭和35年6月1日発行　社会の福祉　第112号

（昭和27年4月7日第三種郵便物認可）（毎月一回一日発行）　(1)

婦人民生児童委員研修会
地域活動に民委は中核

昭和三十五年度兵庫県婦人民生児童委員研修会は去る四月二十六日より三日間洲本市において開催された。

第一日、午後一時より唐津県厚生課長の開会の辞で研修会の幕をあけ、森県民生部長、関県社協共募事務局長、松田日赤支部局長より、それぞれ行政講話、活動概況の説明があり、県社協朝倉会長の「社会の実態と社会福祉の道」と題した特別講演に耳を傾けた。夜は八時より三熊館で「六人姉妹」「たくましき母親たち」等の映画を鑑賞、吹田母子会の保健福祉地区組織活動を取扱った「たくましき母親たち」には特に強い印象を受けた。

二日目は全協議員が四部会に分れ、熱心に研究討議を行ない、三日目は午前九時より再び洲本市公会堂において総会、各部会長より部会報告がなされた。部会討議の概況次のとおり

第一部会

一、民生委員について
①婦人民生委員の選任――市町村の推せん委員会は選任の方法に反省すべき点はないか、又婦人民生委員としての特性も十分理解し適任者を遠慮なく選任しても良いたい等の意見があった。
②民協と婦人民生委員の立場――児童の問題、母子家庭の問題等その特色を生かす活動を促進するために民協と社協、婦人会等緊密な連けいを保つ必要がある

ことを強く認識した。

二、生活保護関係について
―年金の受給資格、生活保護家庭を取巻く地域社会のあり方、保護施設の不足等当面している切実な問題が提示された。

三、身障者福祉関係について
――この援護に当たっている関係機関、団体の業務に積極的に協力することなど約した。

四、売春防止問題について
――売春防止法は一面ザル法ともいわれその取締りには非常な困難をきたし、もぐり売春等が横行しているのが実状である。これら不幸な婦女子を保護するためには、地域の事情に詳しい民生委員の協力が絶対に必要であると同時に婦人相談員との緊密な連けいを保ち、転落防止の実をあげたい旨申合わせた。

第二部会

一、青少年問題について―
青少年の不良化防止と健全育成、不良マスコミからの保護について熱心な討議が行われ、①地域内に良き指導者を得ること、②社会資源を十分に調査活用すること。③家族会議を持ち家族間の人間関係を深める等の結論を得た。

二、母子福祉対策について―母子家庭の法律相談所の開設に論点が集中された。

三、児童福祉施設に収容を必要とする児童の取扱いについて―親の子供に対する愛情の不足、学校当局、地区民の非協力による点が多く見受けられるので、婦人民生委員は、子供の将来の幸福を念頭に理解をもって指導していこうと申合せた。



第一日総会場

第三部会

一、社協活動と婦人民生委員活動について―赤穂市では婦人民生委員が中心となり、被保護家庭の子女を中心とした子供会活動を活潑に行っている。又小野市社協では婦人民生委員、婦人会に働きかけ、廃品回収を行い、その収益を法外援護資金、市民会館建設資金に当てている事例の発表があり、各地区からも老人クラブ、子供会などの活動事例の紹介もあった。〝婦人〟という立場を十分いかし老人クラブ、子供会、家族計画等広く地域社会に進出し積極的に活動を推進すべきであると申合せた。

二、心配ごと相談所について―小野市、明石市、赤穂市等から活動事例が発表された。小野市では「気易い、秘密を守る、経費のいらない相談所」というスローガンのもとに、各界の代表者を相談員に依頼して、市民より好評を得ている。明石市社協では結婚相談所が今日の心配ごと相談所に発展したのであるが民間相談所としての特色がいかされ気軽に市民から利用されている。赤穂市では近時相談件数が減って来たが、これは相談事業の運営それ自体に反省すべき問題がある等それぞれ三様の事例が述べられた。共通する問題としては①相談員の中に医師、弁護士等の専門家が加わっていると一層有効な機能を発揮する、②相談員の相互の連絡会議等の機会をもつ必要がある、③面接技術の向上、④面接室の設置等が提起された。

三、世帯更生運動について―世帯更生資金という有用な制度があるが〝貸付〟に指導が伴われていないむきがあるのでこの点心員たる価値はない」と言って、全くその通りで、こうした人間関係は私たちの生活を幸福にするかしないか、住みやすくするかしないかにかかる重要な問題だと思う。

その他母子福祉資金の貸付等についても活潑に討議がなされた。

第四部会

一、社会保障制度の推進について―社会保障とはいかなることか、現行諸制度、今後の問題点、更に本県における社会保障の推進状況等について県当局より概況説明があり、次いで県が実施した「児童生活環境実態調査」の結果から学び得る諸問題、保健と福祉両関係部門の連携がとられていなかったが、民間活動はそれらに先行して両活動を取り入れた総合的な事業を推進するため、中央には両分野の団体よりなる「育成協」が昨年設立され、県においてもその連絡会が昨年十月に設置された。このような民間活動の保健、福祉両部面を一丸とした活動の先行は行政機関にも刺戟を与え漸次の綜合企画を進めようとする気運が高まりつつあることは意義深い」旨の説明があり、協議員一同、従来の福祉活動の盲点を反省した。

六、日赤運動について―日赤奉仕団の使命の理解、他関係団体との密接な連絡等を支給出来るよう配慮され、また地域配分は目標額の⅓と超過額全額が当てられているので地域社協は事業計画の資金調達と併行して進められることも良策の一つであろうと関県共募事務局長より説明がなされ協議員一同この運動を再認識した。

五、保健福祉活動について―関県社協事務局長より「貧困と疾病とは、その因果関係において表裏一体的である。その意味から社会福祉活動の中に当然保健衛生活動を取り入れて行くべきである。行政機関に於いては従来

第112号　(昭和27年4月7日第三種郵便物認可)　(毎月一回一日発行)

社協組織を再建
四十七支部社協の設立

姫路市社会福祉協議会は五月十一日理事会を開催、本年度事業計画、予算及び規約の改正など審議決定した。その主なものは二十六年以来の規約を全面的に改正し、評議員の選出範囲を拡大するとともに、七部会を新設して社協事業に関する綜合計画を立案しこれを強力に推進する機関とした。更にまた、事業計画の実効を期するため、市内を四十七地区に分け事業の実践体としての支部社協を組織化することとなった。

以下改正要点の概況を紹介してみよう。

評議員の選出区分

第一号ー第六号までとし第一号は、民生児童委員各支部代表（四七）第二号は、各社協支部長（四七）第三号は、公私社会事業施設長（一七）及び各団体長（一七）第四号は、協力機関（一三）第五号は、行政関係（一八）第六号は、学識経験者で市内のあらゆる組織代表を網羅している。

会員

評議員全員と支部社協を構成する三十団体の各代表者である（市民全体が会員であるという考え方から、その地区の住民が組織している機関、団体の代表者を構成分子としている）。

評議員、理事会部会との関係

評議員会は議決機関であり、理事会は執行機関となっている。部会は、六部会策、施設と地域との結びつきに分けられ各々の任務に従き、公衆衛生の振興、戸別って事業を立案し、理事会の承認を得てから支部活動に移す仕組になっている。

部会の任務

⊙広報調査部会ー①社会福祉に関する調査と広報②支部社協の育成と総合企画⊙民生部会ー①世帯更生運動と民生事業の連絡調整②民協と連携し民生委員の資質の向上⊙老人部会ー①老人福祉一般②老人会の育成⊙施設部会ー施設の整備充実と従事者の共励ならびに資質の向上⊙婦人部会ー①婦人福祉一般②母子家庭後援会ならびに婦人共励会事業への協力⊙共同募金部会ー①募金成果の拡大②募金意識の昂揚⊙その他本年度研究事項として市社協要覧編集、法外援護資金の造成、要保護児童生徒の対策、老人ホームの建設、乳幼児保護愛育、特殊児童対策など概ね本部社協に準じているが特に支部社協に専任職員の設置を企図している点注目できよう。また予算は、本部からの助成金と会費、寄附金、その他からなっている。

社協と共募との関係

社協の組織を全面的に改正するに当っては、共同募金運動の円満な発展が意図されている。即ち社協と共募との関係を名実共に一体的な姿とするために、本部社協に共同募金部会を設けたのである。この部会は、県共募姫路支部と緊密な連絡を図るとともに、共募姫路支部の募金に関する諸計画を、更に具体化して支部社協組織活動に乗せる役割がこの部会の主任務である。

この部会の研究課題となっているものを挙げると一、年間共同募金であるとりあえず①「香でん返し」「老人の祝事」「結婚記念」などの慶弔事に際し一般市民が進んで社会事業のために寄附するよう呼びかける。二、一般市民に対するPR活動の強力な推進について、従来この方面のPRは、県共募が募金月間中行われているものだけに依存、会は学校の協力を得て、第二、第三の課題と取組んでいるが、それ等が病気に直接間接に影響をおよぼしているので、医師の医学的処置のみではとうてい解決し得ないから、ここに医療社会事業家の必要性が生まれてくるのである。

医療社会事業研究会の発足

近畿中央病院ではこの事業を重視し、昭和三十三年より専任の医療社会事業家を置いて患者の個別助言指導技術の向上をはかることが必要であると痛感され、各方面に働きかけ又要望もあって、昭和三十三年六月よりこの研究会を設けることになった。この研究事業には、伊丹、尼崎、川西等の管内各関係者が集まり、患者の家庭事情、社会的経済的事情などを考慮の上、医療に関する問題の解決、援助をなし患者の社会復帰に役立つ最善の方法を見い出すために、多くの事例を相互に研究している。

ところが、いろいろな問題と取組んでいるうち、治療の機能を十分に発揮させ推進させるためには、それに従事する人、関係機関、病院、療養所、保健所、福祉事務所等の相互協力と指導技術の向上をはかることが必要であると痛感され、各方面に働きかけ又要望もあって、昭和三十三年六月よりこの研究会を設けることになった。この研究事業には、伊丹、尼崎、川西等の管内各関係者が集まり、患者の家庭事情、社会的経済的事情などを考慮の上、医療に関する問題の解決、援助をなし患者の社会復帰に役立つ最善の方法を見い出すために、多くの事例を相互に研究している。

一次、第二次の調査並びに審査をして優秀校小、中学校各一校と優良児男女各一名、準優良児男女各二名づつを選び町役場において関係者多数参列のもとに表彰式を行なっている。

体位向上のための方途

各学校ではそれぞれ体位向上のため具体的な方途を講じているが、昨年の調査結果では、鞍居中学校の生徒が他校に比し身長、胸囲が最低位で眼疾者は最も多い。このため委員会では、全校PTAその他父兄の集会時を利用し関係者を中心に児童福祉と保健衛生につき講演会を開催。一方中学校では、保健衛生係の教諭が学校医、歯科医、学校薬剤師並びに生徒会の厚生、保健、体育の各部と緊密に連絡協力し計画的に保健指導の徹底に努めている。

学校における具体的方策

一、体位向上の努力点

1、体重の測定ー毎月十日を体重測定日とし全校一斉に実施、また学校ー家庭ー医師との連絡を密にしている。

2、寄生虫の駆除ー全校生徒に隔月海人草、サントニンを服用せしめている。二十四年初めの検便結果では、全体の一八・七%が寄生虫保持者であったが本年三月末には七・九%に激減、その他女子のシラミ駆除対策も効を奏し皆無の状態となった。

3、肝油の服用ー身体虚弱児のため希望者に肝油を服用せしめている。服用者は虚弱児三八五名中一八七名である。

4、便所消毒ー毎日不潔な場所を消毒している。ことに夏季には職員の作成した縄のれんをつり伝染病発生予防に努めている。

5、容儀検査ー毎週木曜日にチリ紙、ハンカチの有無、ツメ、歯の手入れ等の検査、眼疾一掃のため毎月校医指導による洗眼を実施、なお家庭にも目薬を配布している。

6、体育指導ー身長、体重、胸囲等の増進のためこれに適した運動種目を選び計画的に指導している。

7、その他ー母親の料理講習、子共会プログラムの研究。以上が鞍居中学校で行なっている概況であるが、今後は学校給食の内容についても研究する。なお上郡町各学校でも同様の方途が講ぜられていることをつけくわえておく。

支部設置の単位

支部は各校区ごととし、その実情に応じて二校区を一支部としても差支えないことにしている。支部の結成は画一的な形態をさけて、地区住民や指導者の社会福祉的熱意の盛り上りを待って漸進する計画のようであるが、この間あらゆる方法でPR活動を展開することになっている。

支部結成の準則を見ると住民の日常生活に直結した身近な問題を、住民の手において解決することが支部社協の在り方としている。従って組織においても形式的なものではなく実践体に、県共募が募金月間中行われているものだけに依存、会は学校の協力を得て、第二、第三の課題と取組んでいるが、それ等が病気に直接間接に影響をおよぼしているので、医師の医学的処置のみではとうてい解決し得ないから、ここに医療社会事業家の必要性が生まれてくるのである。

医療社会事業とは

貧困や生活難は、それが原因となって病気を起こしめたり、逆に病気が人間を貧困に陥し入れたりする。即ち病気と貧困との悪循環がもたらされる。この悪循環の流れをくいとめるためになされるのが医療社会事業なのである。

病気は、身体の何処かに欠陥がある故に罹るというものだけでなく、患者は、彼の身辺や背後に存する生活環境上の問題、精神的な障害、治癒後影響をあたえると思われる問題、家庭の人間関係の不調整、病気の治療予防の方針をたてるために来院、療養所、保健所等に送り、医療社会事業家として働き相当の実績をあげている。

社会事業は病院にも
近畿中央病院の医療社会事業

戦後、専門社会事業の一分野として、医療社会事業が注視されるようになり最近では一つの流行語をつくった。事実この事業は、国民の医療面に於て実に大きな力を有し、この事業の発展によって社会福祉の増進が大きく拡大されるといわれ各方面でその必要性が呼ばれている。

この事業は、わが国に於ては、大正八年に東京の泉橋慈恵病院に婦人相談員が置かれ、大正十三年には東京の中野療養所に、同十四年全生病院に社会部を置いて相談事業を行なった。更に昭和四年、聖ロカ国際病院に社会事業部が設けられ、そこの事業が本格的に最初のものであった。この史は古いがどうしたことか一向に発展せずにいた。

戦後、社会福祉事業各分野にわたる発展とGHQ福祉部の勧告と相まって、厚生省は行政面の指導面でその発展を促進するようになった。昭和二十四年全社協が中心となって、これに従事する専門職員養成講習会を開き、今日までに約百名の修了者を第一線ー主として国立、公立の病院、民営の大病院、療養所、保健所等に送り、医療社会事業家として働き相当の実績をあげている。

医療社会事業とは

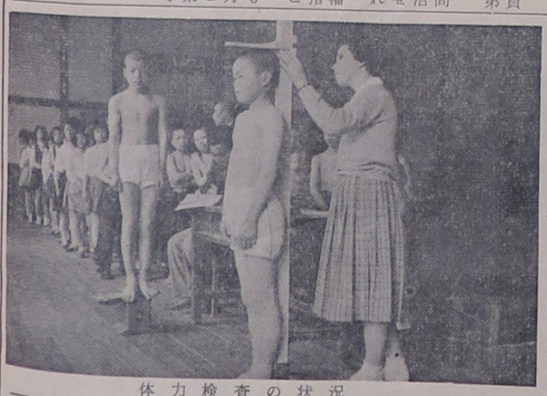
貧困や生活難は、それが原因となって病気を起こしめたり、逆に病気が人間を貧困に陥し入れたりする。即ち病気と貧困との悪循環がもたらされる。この悪循環の流れをくいとめるためになされるのが医療社会事業なのである。

病気は、身体の何処かに欠陥がある故に罹るというものだけでなく、患者は、彼の身辺や背後に存する生活環境上の問題、精神的な障害、治癒後影響をあたえると思われる問題、家庭の人間関係の不調整、病気の治療予防の方針をたてるために来院、療養所、保健所等に送り、医療社会事業家として働き相当の実績をあげている。

医療社会事業研究会の発足

近畿中央病院ではこの事業を重視し、昭和三十三年より専任の医療社会事業家を置いて患者の個別助言指導技術の向上をはかることが必要であると痛感され、各方面に働きかけ又要望もあって、昭和三十三年六月よりこの研究会を設けることになった。この研究事業には、伊丹、尼崎、川西等の管内各関係者が集まり、患者の家庭事情、社会的経済的事情などを考慮の上、医療に関する問題の解決、援助をなし患者の社会復帰に役立つ最善の方法を見い出すために、多くの事例を相互に研究している。

ところが、いろいろな問題と取組んでいるうち、治療の機能を十分に発揮させ推進させるためには、それに従事する人、関係機関、病院、療養所、保健所、福祉事務所等の相互協力と指導技術の向上をはかることが必要であると痛感され、各方面に働きかけ又要望もあって、昭和三十三年六月よりこの研究会を設けることになった。この研究事業には、伊丹、尼崎、川西等の管内各関係者が集まり、患者の家庭事情、社会的経済的事情などを考慮の上、医療に関する問題の解決、援助をなし患者の社会復帰に役立つ最善の方法を見い出すために、多くの事例を相互に研究している。



体力検査の状況

子供の幸せを念じ
活発な地域活動

こどもの体位向上地域の一体的活動

赤穂郡上郡町社協では、三十三年度から毎年町当局や学校関係者の協力のもと、小学校九、中学校五の児童生徒の健康状態を調査して体位の向上に努めている。

調査項目は身長、体重、胸囲、歯、視力、眼疾、耳疾、その他である。委員会は学校の協力を得て、第一次、第二次の調査並びに審査をして優秀校小、中学校各一校と優良児男女各一名、準優良児男女各二名づつを選び町役場において関係者多数参列のもとに表彰式を行なっている。

体位向上のための方途

各学校ではそれぞれ体位向上のため具体的な方途を講じているが、昨年の調査結果では、鞍居中学校の生徒が他校に比し身長、胸囲が最低位で眼疾者は最も多い。このため委員会では、全校PTAその他父兄の集会時を利用し関係者を中心に児童福祉と保健衛生につき講演会を開催。一方中学校では、保健衛生係の教諭が学校医、歯科医、学校薬剤師並びに生徒会の厚生、保健、体育の各部と緊密に連絡協力し計画的に保健指導の徹底に努めている。

学校における具体的方策

一、体位向上の努力点

1、体重の測定ー毎月十日を体重測定日とし全校一斉に実施、また学校ー家庭ー医師との連絡を密にしている。

2、寄生虫の駆除ー全校生徒に隔月海人草、サントニンを服用せしめている。二十四年初めの検便結果では、全体の一八・七%が寄生虫保持者であったが本年三月末には七・九%に激減、その他女子のシラミ駆除対策も効を奏し皆無の状態となった。

3、肝油の服用ー身体虚弱児のため希望者に肝油を服用せしめている。服用者は虚弱児三八五名中一八七名である。

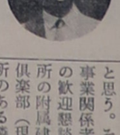
4、便所消毒ー毎日不潔な場所を消毒している。ことに夏季には職員の作成した縄のれんをつり伝染病発生予防に努めている。

5、容儀検査ー毎週木曜日にチリ紙、ハンカチの有無、ツメ、歯の手入れ等の検査、眼疾一掃のため毎月校医指導による洗眼を実施、なお家庭にも目薬を配布している。

6、体育指導ー身長、体重、胸囲等の増進のためこれに適した運動種目を選び計画的に指導している。

7、その他ー母親の料理講習、子共会プログラムの研究。以上が鞍居中学校で行なっている概況であるが、今後は学校給食の内容についても研究する。なお上郡町各学校でも同様の方途が講ぜられていることをつけくわえておく。

・筆のしずく・



北但日高町社会福祉協議会長は同町の名刹蓮生寺の住職村尾祐孝師である。昨年勲続二十五年の知事表彰を受けた県下民生委員の長老であるが、昭和十年当時県下最年少の二十八歳という若さで民生委員に推された人だけあって、今日尚県下の民生委員の平均年令五十九歳には、まだまだ達せぬ若々しさ。

その熱意と努力は同町社協を県下屈指のものに育て上げ、昨秋災害の際は、最劇甚地の一つであったに拘わらず、その直後に行われた共同募金に於いては、こんな時にこそ赤い羽根精神の啓発が必要と、卒先募金運動に挺身、いち早く目標額をはるかに突破する成績を示して県下災害地市町村募金達成の緒をつけられた。

災害対策としての世帯更生資金の貸付には、同町だけで総額金六〇万円の半ばは、出すものは出すが、取るものは取るのご趣旨。誠に尤もな次第と受取れる。

部厚い近眼鏡でにらまれると、一寸こわいような和尚さんだが、中々どうして、条理かみわけ円満なお人柄、酒は一滴もやられぬが、大にさばけたもの。葬は初段格、現つめの殿法は御り難い御前である。

新川と賀川先生



社会事業

新川地区のことを述べるからには賀川豊彦氏のことを書かなくてはなるまい。

前にも述べたように私が教所は道路に面した二階建の家であった。その入口の四、五坪の土間に説教用のテーブルと古いベンチが七八脚列べてあるだけである。ここで大晦日の説教が行なわれたのである。青年牧師の賀川氏は和服によれよれの袴を着けテーブルの上の小さなカンテラの光に照らされてじゅんじゅんと神の道を説く、聴く者は地区内のおかみさん連十数名がみすぼらしい姿ながらけいけんな態度で説教に聴き入っている。

私はこの光景を目のあたり見て非常な感激を受け説教が終ってから賀川氏と堅い握手を交わして家に帰ったのであるが、その晩の光景は今もなお眼前にほうふつたるを覚えるのである。

正月の新川

年が明けて新川にもお正月が訪づれた。二日か三日の日であったかと思うが二三知合の家へ年始廻りをした後再び新川に賀川氏を訪問すると一つ新川の正月光景を案内しましょうといわれるまま賀川氏について地区内を廻って見る。これはまた大晦日の説教所とはなんと異った光景であろう。路地という路地は到るところにゴザを布いて丁半の大賑わいである。賀川氏が通りがかりに「まだやってのかい。大概にしてもうよしたらどうだい」というと「先生あしたから飲わして買いまっか。食わして買ってたらいつでもやめますぜ」といった調子、笑いながらまたサイを振っている。殊に驚いたことには大人ばかりでなく子供までも五人、七人と集まってカケをやっている。さすがに子供をあつめて通り過ぎるのを見逃っていたかと子供たちがあつまってくるのであろう。

たしかその年の大晦日の夜であったかと思うが賀川氏の説教所を訪ねたのである。賀川氏の住居は狭い路地の棟割長屋であったが説教所は道路に面した二階建の家であった。その入口の四、五坪の土間に説教用のテーブルと古いベンチが七八脚列べてあるだけである。ここで大晦日の説教が行なわれたのである。青年牧師の賀川氏は和服によれよれの袴を着けテーブルの上の小さなカンテラの光に照らされてじゅんじゅんと神の道を説く、聴く者は地区内のおかみさん連十数名がみすぼらしい姿ながらけいけんな態度で説教に聴き入っている。

私はこの光景を目のあたり見て非常な感激を受け説教が終ってから賀川氏と堅い握手を交わして家に帰ったのであるが、その晩の光景は今もなお眼前にほうふつたるを覚えるのである。

正月の新川

年が明けて新川にもお正月が訪づれた。二日か三日の日であったかと思うが二三知合の家へ年始廻りをした後再び新川に賀川氏を訪問すると一つ新川の正月光景を案内しましょうといわれるまま賀川氏について地区内を廻って見る。これはまた大晦日の説教所とはなんと異った光景であろう。路地という路地は到るところにゴザを布いて丁半の大賑わいである。賀川氏が通りがかりに「まだやってのかい。大概にしてもうよしたらどうだい」というと「先生あしたから飲わして買いまっか。食わして買ってたらいつでもやめますぜ」といった調子、笑いながらまたサイを振っている。殊に驚いたことには大人ばかりでなく子供までも五人、七人と集まってカケをやっている。さすがに子供をあつめて通り過ぎるのを見逃っていたかと子供たちがあつまってくるのであろう。

若葉薫る五月の学園 ①
愛は、子供の人間形成に必要

々が県下各地から多数参観に来園される。一人々々の子供が「今日は」「いらっしゃいませ」と身なりにも生命を凝縮して無邪気な童

も少なく甘味も無い村里離れた丘の上で嬉々として百七十有余の児童が暮らせる唯一の校はただ先生保母先

の姿はベビー蔵前国技館とも言いたくなる。

何はともあれ鍵一つ取も塀も全ないオープンで多

揚に細心の注意を払っている。暗い過去に危険児とされ乗嫌児とされたうら若い

と人目をさけて訪れられる場所がよい。また、所謂「駆居」の高い雰囲気の場所は絶対に避けたい。裏口

若葉薫る五月の学園 ①

愛は、子供の人間形成に必要

県立明石学園にて　橋　政蔵

悪のみち

衰惜される花にくらべて世のめいわくの為に危険視されて棄て嫌らわれる子供には学校の抜け遊び、嘘言が出る。人以上に物を欲しがる。そして家の金品を持ち出し、浪費する、外泊も平気、乱費不感症、盗みも漸次巧妙になり仲間が出来る、等々とても子供の仕業とは思えぬ事も大胆に敢行するようになる。

そこに至るまでに親や親戚の注意や学校の先生やお巡りさんの説諭などが繰返されているが悉く馬耳東風で到底効果が見られない。民生児童委員や地域社会の人々の温かい抱擁からも逃避をつづけて所謂手に負えぬ子、危険な子供として世の人からも白眼視され、親兄弟親戚からも棄嫌される子に至るわけである。

明石學園とは

社会事業の発展を念じて

三光製指導員　側垣雄二

施設にとって災害程恐ろしいものはないが、カトリック少女の町の火災事件も単に一施設の問題ではなだとか、愛だとかの動機は、施設関係者は勿論、全て社会事業関係者各々の問題である。あの事件は原因不明と言われるが、それだけ原因に深さがある様に思われる。それには養護施設事業の在り方、或いは更に大きく、県全体の社会事業への在り方にまでその問題の原因がさかのぼって考えねばならないのではなかろうか。

一体何が故に、社会事業が実践されるのか、どれ程関係者に自覚されているのだろうか。この根本が何か欠けているように思えて本当に議論を交え、その仕事に自負心を持ち得る専門家になろうとつとめている人が何人いるのか。ただ建物を増築し、設備を整え、定員を増加することにのみ腐心し、その規模の大きさをきかけこそ、大きな重要な仕事であるの建設整備は必要であり重要なことではあるが、その整備への動機が社会の求めるところと、今更ながら、考えるべき問題をかかえている。素朴であるだけにまだ我慢出来るとしても、何か己れの名誉欲、事業欲にかられて、或いは宗教的な目的手段のためにとか、その対象者が手段に使われているのではないだろうか。

養護事業のみを考えて見ても、未来をもつ子供達のために、共同募金等に於て或る程度為されること合せのみが多くはないか。

子供を個人として、一人一人をみつめて、如何に為すべきかを考える事なく、ただ期限が来たら機械的に放出するが如きことが果して児童福祉といえるだろうか。過日発生の火災が、原因不明とはいうものの、そのような災害は、我々の日々の事業に対する心構えの警鐘と覚え、社会の求むるところと児童の欲するところをみつめ、児童福祉事業専門家に徹すべく、今日より覚悟を新たにしたい。災害防止に止まらず、更に積極的な事業推進のため、同労の志と誓いを新たにしたい。

近畿養老研究会

来る六月九、十の両日、京都市大宮寺において、近畿養老施設研究協議会が京都府、市社協共催で開催される。



明石学園公園での一日



神戸市立丸山学園　神戸市長田区丸山町2丁目

丸山学園は、昭和三十四年五月に開園された児童福祉法にもとづく児童福祉施設であり、小学校就学前一年から小学校低学年くらいのもので、ちえのおくれた子供たち三十名の特殊教育が行なわれている。

子供たちは毎日学園専用バスで送り迎えされその上三つの指導室で通常八時間の学習指導、生活指導がなされ、子供たちがひとりだちするために必要な生活能力や、環境に対する適応性をたかめようとしている。

心配ごと相談所

話しやすい窓口

最近社会生活の複雑化に伴い〝悩み〟を持った人々が容易でなければならぬ。

相談員

相談員は民生委員がその主体になることは勿論であるが、各界の専門家を加えることは一層有効な機能を発揮するといはれ、小野市における相談員の活動は、よくこれを立証している。相談員は地区住民の福祉に関する深い理解と強い熱意をもつ篤志家でなければならない又相談員はスタンドプレーをすることは禁物であくまでも市町村社協が、運営する相談所のメンバーとして相互の連絡会、意見交換会等を多くもって談所としてのチーム、ワークを尊重することが大切である。この際には取扱った事例について、その相談経過、社会資源の活用方法について研究協議し、互に相談事業の発展向上をはかるよう努める必要がある。

設置の場所

相談所を訪れる人は、外聞をはばかる何らかの悩みを持った人々で、こっそりと人目をさけて訪れられる場所がよい。また、所謂「敷居高い」の高い雰囲気の場所は絶対に避けたい。裏口からでもコッソリ入れるという気易さを与えるところが第一条件であろう。



開催回数

すでに相談所を開設しているところでも月に一回又は二回程度のところが多い。このことは常設的な相談所をもっていない（場所）、相談員が少い（人）等物的、人的資源の如何によることが多い。相談所を開く場合に前以ってこれらを充分整備しておく必要がある。緊急を要する問題なども受入れられる態勢を築いておかねばならない。赤穂市などは地区持廻りをやっている。この場合などは相手の身になってその開設場所を充分検討すべきである。

養護連盟総会開かる

兵庫県養護連盟は去る五月十日総会の席上次の如き申合せを行ない、今後の事業推進への覚悟を新たにした。

児童福祉法が制定されより十有余年、愈々養護事業等には社会的にも経済的にも、幾多の困難を荷なわされているが、我々はそのことのみに溺れることなく従事する事業の真の目的である児童養護に専念する態度について、今日更めて反省の要はないであろうか。過日発生の火災が、原因不明とはいうものの、そのような災害は、我々の日々の事業に対する心構えの警鐘と覚え、社会の求むるところと児童の欲するところをみつめ、児童福祉事業専門家に徹すべく、今日より覚悟を新たにしたい。災害防止に止まらず、更に積極的な事業推進のため、同労の志と誓いを新たにしたい。

近畿養老研究会

来る六月九、十の両日、京都市大宮寺において、近畿養老施設研究協議会が京都府、市社協共催で開催される。

民間社会事業職員共済組合役員会

兵庫県民間社会福祉事業職員共済組合では四月三十日社会事業会館において役員会を開催、昭和三十五年度事業計画並びに予算を審議決定した。

本組合の加入職員数は現在六一〇名に達しているが、本年度は更に加入者を倍加すること、従来の退職金、死亡弔慰金給付の外に、新たに疾病負傷見舞金、災害見舞金給付をも実施することを決定した。

県児童福祉審議会

＝推薦図書＝

中学向―中尾仁助著「秘境ブータン」三二〇円　三一五頁　毎日新聞社

小学上級向―山室静訳「グリム伝説集Ⅰ」三五〇円　三〇二頁　実業五日本社

幼児向―安井淡（絵）「ねずみのよめいり」八〇円　一六頁　小学館「童話集本七」七〇円　一四頁　トッパン

募金成績最高位
志方町社協を現地に見る

山陽本線の宝殿駅から北に五キロ神姫バスにゆられて十分にして志方町に入る。そこからはるか山麓の樹間に校舎のような建物が見える。これが「桜谷長楽園」である。長楽園は老人憩いの家であり、児童館でもある。又この施設は県下で最も早く生れたもので、おそらくこの種のものとしては全国にさきがけてつくられたものではないかと思われる。施設の建設計画は綜合グランド、児童遊園をも附設して現在の姿とすべく、昭和二十八年頃、まだ社協活動が地についていなかった頃から、この構想図が画かれていて、着々と毎年姿を変えてきたのである。

施設は山麓にある長楽寺の境内にあり附近一帯は緑にかこまれた景勝の地。春は桜に桃につつじ、秋は紅葉又遙かに瀬戸内海が眺められる。園長は長楽寺の住職釈瑞次氏で、社協が経営している。

老人憩いの家を完成したのは三十年五月で、社協（会長藤本和蔵氏）が主体となり全町民あげての奉仕活動によって造られたのである。

又昨年五月にはバックネットつきの綜合グランド（八千平方米）も完成されるにいたり名実ともに児童と老人の福祉施設として充実されて来た。

志方町のあらまし

昭和二十九年に三つの村が合併して生まれた新町で農業のほかタオル、靴下、鉄工、食肉などの産業が発達している。しかし財政的には決して富裕ではなく、町自体は多額の赤字をかかえている。人口約一万三千人二千五百世帯ほどである。

昭和二十九年に県社協は社会福祉振興地区に指定し三十年には中央共同募金会モデル地区に指定した。

又、昨年東京で開かれた全国社会福祉事業大会では優良福祉地区として全国表彰をうけている。この町は又結婚改善、老幼の福祉活動などすこぶる活発で町民の社会福祉事業に対する関心も実に深いものがある。

施設の規模

老人憩いの家長楽園は本館（二棟二六五平方米八一坪）に集会室、娯楽室、休養室、図書室、浴場、炊事室、使用人室（売店）を有し収容力最大三百名で舞台装置があり、テレビ、電蓄をはじめ室内遊具は一応整っており、児童遊園地には遊具、植栽地、ボート池、ハイキングコース、滝、遊歩路等自然がとり入れられている。グランドは両翼に三段の観覧席があり野球大会も出来る設備を整えている。毎年五月五日の子供の日には二千名からの子供会員が集まって記念行事を行い夏季には町内外の子供会や学生、ボーイスカウトなどのキャンプ場となる。

憩いの家は夏季をのぞいて偶数日毎に老人のために開放し平均一日四十名程の利用者があり、使用料は一日三十円である。奇数日は青年団や婦人会、福祉団体の会合や各種グループ活動のために利用されている。又この町の老人会はここを本部とし長楽会と名のひとり、レクリエーションを楽しみお互いがもっている悩を語り合うことによって、三人の赤ん坊が生まれ新たに二四人が入院し、一四二人が常時入院しており一九人がレントゲン検査を受け、一三〇人の職員が働いています。この表わし方はあちらのPR方法の特色です。

ホームの年間経費をみると、収入三七、四五一弗、支出三六、八四二弗である。収入の内、ホノルル市の共同募金からの配分金は六、五〇〇弗（全体収入の一八%）であり、支出の内、人件費は一八、一一八弗です。

老人部屋

このホームも日本的趣味を取り入れられており、特に老人部屋は、大部屋にベットを並べて寝るといった共同生活であるのが珍らしく、食事も全員大食堂で日系料理人の手で作られた料理をいただいておりました。

高橋理事長は、昨年十二月二十日横浜出帆、パンクーバ上陸空路カナダマントバ州ウィニペッグ市、オンタリオ州、マニトバ州、アメリカシヤトル市、ポートランド市、ハワイ、ウェーキ島を経て三月二十六日空路帰国、七〇才。

日は有志が二十人はては老人、婦人、子供達まで加わって汗と泥にまみれ入れ替り立ち替り三ヶ月に及ぶ奉仕の賜である。それで起工式のチャンスを逃してしまい整地工事が完成してから式を行なったような始末で感謝のことばも出ない。このような町全体の空気が反映して旧小学校々舎の無償提供、建築業者の奉仕サービスという明るい話題が生まれ企画にあたった一人として心から感謝している。現在の施設も十分とは思っていないが年々と整備充実してゆきたい。

明るくなった町全体

この施設ができてから人間関係、特に家族関係が大変明るくなったという。奇数日は青年団や婦人会、福祉団体の会合や各種グループ活動のために利用されている。又この町の老人会はここを本部とし長楽会と名のひとり、レクリエーションを楽しみお互いがもっている悩を語り合うことによって、三人の赤ん坊が生まれ新たに二四人が入院し、一四二人が常時入院しており一九人がレントゲン検査を受け、一三〇人の職員が働いています。この表わし方はあちらのPR方法の特色です。

ホームの年間経費をみると、収入三七、四五一弗、支出三六、八四二弗である。収入の内、ホノルル市の共同募金からの配分金は六、五〇〇弗（全体収入の一八%）であり、支出の内、人件費は一八、一一八弗です。

共同募金て町づくり

地域での社協活動の財源は何といってもその殆んどが共同募金の配分金であり、昨年の目標額だけを達成していたのではその金高はわずかである。そこで目標額を遙かに上廻る成績を挙げて得た地区福祉事業配分金を町づくりに充当しているのである。昨年の共同募金も綜合グランド建設のため志方町の共同募金目標額一七七、七〇〇円に対しその実績額は五九二、五六一円達成率三三三%という全国的にも極めて優秀な成績を収めたのである。この成績中にはタオル王の稲岡四郎氏が私財十万円を寄附せられ（緑綬褒章を授与）たのをはじめとして一人千円以上の大口寄附者は九十六名に及んでいる。以上は昨年の例であるが去る三十年度には青年団、婦人会、婦人共励会の協力を得て映画会を開いた際の収益金二十八万円もあってその年の募金成績は二九九%と驚くものがありました。

この病院では、毎日平均四、二人前の食事がつくられ、三人の赤ん坊が生まれ企画にあたった一人として心から感謝している。現在の施設も十分とは思っていないが年々と整備充実してゆきたい。



お年玉寄附金で施設づくり

神戸養老院（院長渡辺敏子氏）では住吉分院内敷地にお年玉葉書寄附金よりの配分（二八〇万円）を財源とし国及び神戸市よりの補助金を併せ鉄筋コンクリート造、延八〇二平方米の増築工事が落成したので四月二十二日関係者多数列席の上竣工式を行った。同院の収容力は、一二〇名定員となった。

桜谷長楽園年次別整備概況

年度	建設計画	経費 施設費	償還金	運営費	合計	財源 共同募金配分金	同超過募金	借入金	その他	合計
29	長楽園本館2棟児童遊園遊具	572,527	(借入金)		572,527	150,000	230,660	200,000	392	581,052
30	浴場その他	325,255	217,530	93,983	636,768	150,000	40,140	420,000	利用料 72,967	683,107
31	舞台炊事場浴場拡張	214,497	260,540	90,793	565,830	0	57,000	40,000	(町助成20万円) 267,215 (利用料) 205,455	569,670
32	グランド敷地一部購入、その他	163,382	119,000	108,784	391,166	150,000	30,000	100,000	16,382 利用料 232,060	528,442
33	建物改修備品購入	176,206	108,000	390,142	604,348	100,000	50,000	0	246,245 利用料 218,335	614,580
34	グランド建設、児童遊園整備自転車置場その他	1,029,634	102,000	128,232	1,259,866	100,000	404,930	300,000	257,424 利用料 226,000	1,288,354
	合計	2,481,501	807,070	741,934	4,030,505	650,000	812,730	1,060,000	798,325 944,150 (利用料)	4,265,205



町民の奉仕作業

カナダ アメリカの旅を終えて

神戸市大慈厚生事業会
理事長　高橋トミ



カナダの知人からの招きにより、老軀を一人氷川丸に托し、十二日間の洋上生活のすえ、本年一月二日バンクーバに到着しました。私は、英語はカップやブラシのほかは皆目知りませんでしたが、各地で日系市民や宗教団体の人々から心からの歓迎を受け意外に気楽な旅でした。（実際は不自由）渡航の目的は、現在経営しているの母子寮、保育所のほか養老院を併設するので彼の地の社会事業の様子をも知りたかったからです。

洋上の正月

氷川丸で迎えた元旦の感激は終生忘れることができません。それはあまりにも祝膳が豪華すぎたからです。お鏡餅、伊勢海老、大阪鯛浜焼、鶏の蒸焼、蛤、数の子等内地でつくる正月用祝品や煮物のほか洋皿等盛沢山の飾りつけをしたご馳走は言語に絶するものでした。

バンクーバア到着

一月二日バンクーバアに到着してからは、スケジュールに従い一望千里の原野、平野或いはロッキー山脈を空から列車から又バスから眺め、その景色の雄大さに驚きながら目的地マニトバ州ウィニペッグに落着き、ここを基点としてあちこち飛び廻りました。

社会事業の状況

オンタリオ州の施設は公・私立とも極めて大規模でどの収容施設も医療のための病院を併設しています。収容数も千名近いものばかりであり市民の社会事業に対する協力、認識度は実に徹底しており日本と比べものにならないと思いました。

慈善事業、保健衛生事業の運営費として毎年市民は共同募金を二十世帯くらいづつ輪番に集会を開き、各戸でお金を集めているという積極的な活動を行なっていることでも判ります。

この州の社会保障費

オンタリオ州は人口五百八十万で大阪府ほどの人口をもっています。

この州の昭和三十二年度厚生費予算は次の如くです（単位ドル）老人保護年金（六五才～六九才）九、四四七、四六六、盲人保護年金八二二、一六五、身障者年金三、七一五、九一四、母子家庭年金六、九八六、五八七、老人ホーム補助金二、四七八、〇四六、児童福祉四、三九〇、三五一、直接救済七、三五四、八六九、託児所補助三九四、五七六、医療保護補助三七、九九九、〇九一なお前記予算は全厚生費予算の六一・九%を州政府、一三%をカナダ領政府、一八・八%を市町村がそれぞれ負担しております。

この州には大小百十余の施設があり、ほかに託児所は千六百一七カ所もありいかに社会福祉事業が進んでいるかがうかがえます。託児所には、職場に働く母親のためのもの、母親達が共同で彼女達のために順番制で保母の手伝いをしているものもあります。

この州で施設を開設する場合、建設費の五〇%を州政府が負担するし、経営に於て赤字がでれば、赤字の七五%を政府が補助することになっています。

ニツポニヤ・ホーム

トロント市には最近、日系市民約一、〇〇〇名（小宮山理事長）の手で「ニツポニヤ・ホーム」という老人ホームが建設されました。ここの定員は二〇名で日系市民専用のものです。建物はスマートな平家建で日本庭園、農園で囲まれ、娯楽用品として囲碁、将棋、三味線、琴など備えられており、極めて日本趣味豊かな雰囲気の中で生活を楽しんでいる姿に接することができたのは大きな収獲でした。

この地で老人ホームに入ると毎月一人五五弗を州から支給され、その内一人あたり八弗の小遣い銭を支給されることになっており、日本に於ける養老院施設収容者にとってはうらやましい限りです。

アメリカの老人ホーム

ハワイ、ホノルル市に日系人専用のクアキニ病院兼老人ホームがあります。

このホームは、病院を併設し病院は患者用ベット一六〇床、老人ホームの方は四九床を有し、その設備は質素と簡潔の一言につきます。更に病院には、あらゆる近代医学の粋を集めた医

Second Section
PAGES 21-40

The Hamilton Spectator

HAMILTON CANADA MONDAY FEBRUARY 20 1961

Classified Advertising
Women's Pages



The Seikeikan Academy of Judo in Burlington has 10 women members. Instructor Bill Umetsu watches as Audry Bruce, left, tries a floating hip throw on Joan Goremans.



Members of the Seikeikan Academy of Judo wear the traditional judo garb. Presently housed in quarters at the Burlington Tennis Club, the Academy will soon move to larger quarters at Hidden Valley Park.

Sport Of Judo Takes Hold Of Devotees In Burlington

Story and Photos by GERRY ORMOND

Judo's growing popularity is reflected in Burlington where 40 men, women and young folk have joined the Seikeikan Academy of Judo and jam into the crowded quarters of the Burlington Tennis Club for lessons from instructor Bill Umetsu.

THE BURLINGTON Academy was formed last October under the sponsorship of the town's recreation and parks committee and has grown so popular more space is needed and the group will move in March to the Hidden Valley Park pavilion. This will enable the membership to double to 80.

The sport has such a following in Canada that Mr. Umetsu told The Spectator he feels a Canadian team should be entered in the 1964 Olympic Games at Tokyo where judo will be on the list of events for the first time.

The club instructor also is president of the Canadian Kodakan Black Belt Association, the ruling body of all Kodakan judo clubs in Canada. It comprises holders of the black belt which is awarded only to those attaining high proficiency in the sport.

THE MATTER of Canadian Olympic participation in judo may be discussed with Ken Farmer, Canadian Olympic Association president, during the Canadian judo championships in April.

Mr. Umetsu said Olympic competition would probably be held in several weights and he would like to see at least one Canadian competing in each



The Hamilton Spectator
HAMILTON CANADA MONDAY FEBRUARY 20 1961



watches as Audry Bruce, left, tries a floating hip throw on Joan Goremans.



Members of the Seikeikan Academy of Judo wear the traditional judo garb. Presently housed in quarters at the Burlington Tennis Club, the Academy will soon move to larger quarters at Hidden Valley Park.

Sport Of Judo Takes Hold Of Devotees In Burlington

Story and Photos by GERRY ORMOND

Judo's growing popularity is reflected in Burlington where 40 men, women and young folk have joined the Seikeikan Academy of Judo and jam into the crowded quarters of the Burlington Tennis Club for lessons from instructor Bill Umetsu.

THE BURLINGTON Academy was formed last October under the sponsorship of the town's recreation and parks committee and has grown so popular more space is needed and the group will move in March to the Hidden Valley Park pavilion. This will enable the membership to double to 80.

The sport has such a following in Canada that Mr. Umetsu told The Spectator he feels a Canadian team should be entered in the 1964 Olympic Games at Tokyo where judo will be on the list of events for the first time.

The club instructor also is president of the Canadian Kodakan Black Belt Association, the ruling body of all Kodakan judo clubs in Canada. It comprises holders of the black belt which is awarded only to those attaining high proficiency in the sport.

THE MATTER of Canadian Olympic participation in judo may be discussed with Ken Farmer, Canadian Olympic Association president, during the Canadian judo championships in April.

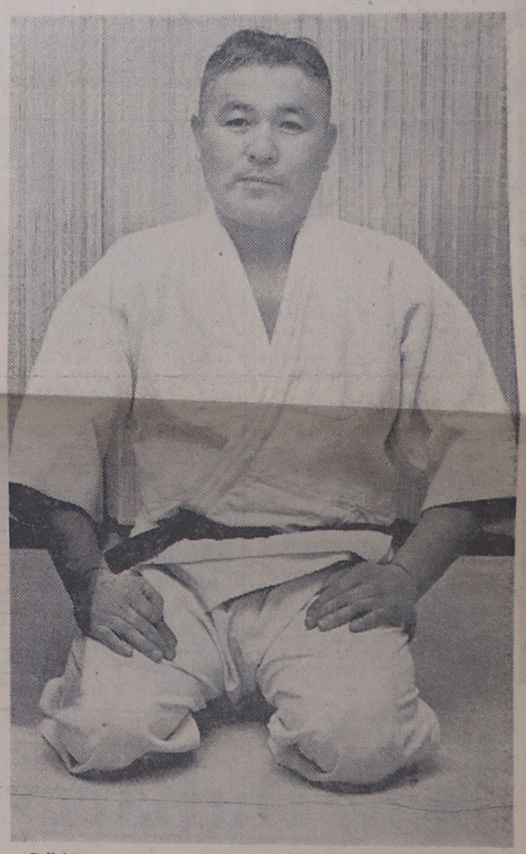
Mr. Umetsu said Olympic competition would probably be held in several weights and he would like to see at least one Canadian competing in each group. He said a Canadian team would not be disgraced in world competition.

The Canadian champion, Fred Matt, a German immigrant now living in Vancouver, has already defeated the best in North and South America and holds the Pan-American championship for Canada. Mr. Umetsu feels there are several men in eastern Canada also of international calibre.

MR. UMETSU said that Japan will no doubt win the overall Olympic judo championship. Japan has more than 200,000 black belt holders from which to choose their team. Only 250 Canadians are allowed to wear the black belt.

There are also white, yellow, orange, green, blue and brown belts, worn by those either less skilled or working their way to the top in the sport. Black belt wearers are themselves divided into 10 categories or Dans, with the tenth Dan the ultimate goal.

THE TOP-RANKING judo man is of the sixth Dan. Mr. Umetsu, a fourth Dan, although retired from active competition, is considered one of the top eight judo experts in the country.



Bill Umetsu is president of the Canadian Kodakan Black Belt Association.

ともよいさめや　きみなるエスと
かちどきあぐる　日はちかし

佛和野　ンバ　の

YAMAGA YASUTARO PAPERS

故赤川美盈先生の略歴

一九〇八年　東京青山学院神学部卒業

一九〇九年　二年間銀座教会副牧師

一九一〇年　アメリカーカナダへ渡航
サンパトレ日本人メソヂスト教会牧す

一九一二年
一四年迄　トロンドビクトリヤ大学にて神学勉強卒業後
少レクーバ　フエヤビユウ・
オーレヨレフメールスの教会創設
フルー流り猛烈を極め、ストラスコナ
公校を病院に改造し夫婦にて奉仕

一九一八年　バレクーバ教会牧師

一九二〇年迄　新西院の教会に移任

一九二五年　より フレザーヴァレー教会
の開拓行道

一九四一年　カナダ行道(満州事変迄)
ミツシヨンに新教会堂を建設
す(献堂式をリル宮本氏開戦
マニトバ・モリスに移動し後山本
ご夫に移転して・附近)の日系人を訪
問伝道と奉仕をなす。

一九五六年
十月廿一日午后三時　昇天

赤川先の愛唱せし讃歌　葬儀用

一、いくさのきみの　みむねかしこむ
まずらたけをよ　をゝしかれ
ものゝぐまとひ　たちとりはきて
いまこそおかへ　あだにしも

二、あだよやだまを　はなたばはなて
われにもかみの　楯はあり
あだよたくみを　つくさばつくせ
われにもかみの　ちえはあり

三、たゝかふまゝに　ちからはまして
あだのいくさは　いろめきぬ
ともよいさめや　きみなるエスと
かちどきあぐる　日はちかし

一九五六年十月廿一日昇天

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

3/20/41

日本人の結核大減退

ピーシー州日本人の結核死亡率大減退に關し晩市衛生局は更に次のやうな統計を知らせて來たウィルソンの惡口がいかに出鱈目であるかが判らう

	死亡	對千人率
△日本人		
一九三四年	三五	一・四五
一九三五年	二六	一・〇六
一九三六年	二五	一・〇〇
一九三七年	二六	一・〇二
一九三八年	一九	〇・七三
一九三九年	一七	〇・六四
△支那人	死亡	率
一九三四年	二八	一・〇九
一九三五年	四一	一・六五
一九三六年	三七	一・五七
一九三七年	二八	一・二六
一九三八年	三九	一・八〇
一九三九年	四二	一・九八
△白人	死亡	率
一九三四年	二九〇	〇・四五
一九三五年	三三一	〇・五〇
一九三六年	三一二	〇・四六
一九三七年	三〇九	〇・四六
一九三八年	二七四	〇・四〇
一九三九年	二九四	〇・四二

卽ち日本人は六年間に半分以上も減退し白人は六年間に變化なく支那人は二倍近く增加してゐる、なほピーシー州全體から見た率は一九三四年が〇・七九で一九三九年は〇・七一である

YAMAGA YASUTARO PAPERS
Folder No.

赤川師とレッド・リヴアー

ウ市　江波斜歩

河畔の隠居

赤川師の信徒教育は甚だ嚴格であつた。百雷の落ちるが如き怒聲は、我等の耳を聾することしばしばであつた。赤川師のこの怒聲は、應々にして信徒を逃したが、師によつて教育されたる信徒の多くは、カナダのいずこに行つても、正しき神の福音を傳へ得る者となつた。

赤川師の全人格を要約すれば、けだしこの一事に盡きるだろう。師は傳道者の卵を造つた。

赤川師は四十餘年の傳道を終わてレッド・リヴアー河畔に住んだ。「赤川師赤川に住む」で、神の妙技と言えよう。マニトバは誠に風致に乏しい國ではあるがレッド・リヴアーの流れをながめ、橋上を渡る自動車バス、トラック等々、或はシービー、シーエヌ兩鐵道の列車を見ることは、カナダの產業の隆盛を物語るテーヴイでもある。對岸に見はへネー村の二十五家族であつた。

誠意の努力

一九四二年の總移動の時南マニトバ州に散在する同胞千二百餘名、信者と否とに拘らず一軒一軒訪問されて、傳道というよりは、各自の直面せる問題の交渉に當つてくれた師は多忙であつた。廣ぼうたるマニトバ平原を走る師の古自動車は洋上に浮ぶ小蒸汽船の觀があつた。そして一カ年の總馳走哩數は一万數千マイル戰時中の四カ年これが續いたのである。元來健康体であられた師が、意外に早く引退を餘儀なくされたのはこの過勞のためであつたことは醫師の證言である。

ビーツ畑

マニトバ州へ移動の先驅あつた。『陸の海』――野中の軒家、惡水、惡道路、零下何十度の嚴寒、郵便局とストーアへ三哩を自轉車で走る等々、我等の未だ經驗せざることばかりであつた。土地の事情に全く暗く「迷へる羊」であつた。この時の師の訪問は、文字通り神の福音であつた。

それから十餘年、いわゆるニュー・ハウスに住み、ニュー・カーに乘り、電氣ストーヴ、冷藏器、オイル・バーナー等々、最新式の生活に、我等は過去の苦勞は忘れがちである。だが當時の師の『誠意の努力』を忘れることは出來ないであろう

◇寄附感謝

ニコポニア・ホーム

△百弗ト市聖公會二世倶樂部△五十弗宛高橋義夫、キヤリブー勝野千秋△四十弗ト市二世ウイメンズクラブ△廿五弗清水夫人△廿弗宛小畑トヨ、モ市竹重安定△十五弗ト市盛木千代△十弗宛ト市池端正夫、大河原エツ、堀内芳太郎、大村ジヨージ、村田新一郎、向井夫人、石キミ、ウ市清水ピクター、ハ市小柳巖、牧野元太郎△六弗ト市丸岡、常盤△五弗宛ト市寺北御夫妻、ハ市井上一平、上林フレッド、ト市山崎庄太郎、オークビル内堀御夫妻

YAMAGA YASUTARO PAPERS

獨立への第一歩

『半世紀前の一世』＝第一面の續き

さて、三ヵ月只働きで過ごした或日のこと、鐵道に働く熊本の人から、一哩先の農家でボーイを探していることを聞き、早速計畫の第一歩をすすめることが出來ると大喜びで連れて行つてもらつた。その農家の主人は熊本の人に

『お前だつたら、今急ぐから月二十五弗出すが、このボーイは体も小さいし、言葉も解らず仕事とて經驗はないのだから、月十弗しか拂わない。しかし來月は十二弗、其次は十五弗、それから先は毎月五弗宛上げ、夏までには二十五弗にするがどうか?』と言つたとのことだつた。

熊本の人は、鐵道でも月二十弗(一日一弗二十五仙)は殘るから、幾らなんでも月十弗では働らかんだろうと言われたが、私は考えた。計畫した目的への第一歩を進めるためには、金錢よりも經驗の方をとるべきではなかろうか、經驗が十弗、英會話の練習が十弗、給金が十弗、計三十弗のつもりで、即座に喜んで働くことに返事した。

初めは一日中ハウス・オーク。あまり好きな仕事ではない。それで、するだけの事を急いで濟ませると、行かなくてもよいのに外の仕事を手傳いに行つた。朝も私の仕事であるストーヴに火をたきつけテーブルをセットすると、急いでバーンに行き主人がミルクをしぼる所をじつと見ていた。

二日目の朝、主人が『しぼつてみたいか』と聞くので『イエス』と答えると、一番おとなしい牛をしぼつてみよと教えてくれるが、却々ミルクは出そうにもない。牛も下手にさわられ、時々痛いらしく動くので益出なくなる。それでも二三日續けていると、大分出る樣になり、主人が四匹しぼる時三匹位しぼれる樣になつた。そして乳しぼりは私一人の仕事となつた。午前と午後はケッチンの片付けがすむと外に出て、ヒンヅー四人が毎日來てスタンプ起しをしているのを自分から進んで手傳い、彼等にひけないで働いた。望みのある身なので、この他何んでも進んで仕事をし、秋十一月初めまでには農業仕事の大方を經驗し、賃金も三月目には二十五弗に上げてくれ、英語も日常會話は出來るようになつた。十月頃仕事がなくなつてから一寸の間、鐵道のセキション働きに出た時など通譯のようなこともしてホーマンから非常に重寶がられた時に、農家では僅か十弗で働いたが、たしかに三十弗の値打があつたと愉快に思つた。

さて、染川さんはヴィクトリアの方で百姓家に働いていたが、秋仕事が終るといよいよ、君も一月と言いたいが、二月とは續くまい』と又クロバーデールの方に來られた。少し郷里にも送金したが、殘りが二人分合せて百七、八十弗あつたので自作農を始めようかと色々あたつてみたが、いくら物の安い當時でも二百弗足らずでは到底出來そうにもない。所が或る人からクロバーデールのゼネラル・ストーアのミスター・バーが、土地を開墾すれば三年間は無賃で貸すと言つていることを聞いたので、早速故高橋金次氏を頼み交渉した結果『初め三年間は開墾代りに無償、四年目から借地料は一年一エーカー十弗、食バターと卵でストアの支拂も殆んどすませる樣になつた。縣人の人達は、あの二人が成功しなかつたら他にする人はないぞまで言つてくれたが、この見方がきれいに外れたことは殘念であつた。というのは二年三年と續けて行く內にブラクシ原であつた十二エーカーの土地も本當にきれいな畑となつた。然しこんなにきれいになつても人のものである。どうしても自分達の土地を買わねばとしみじみ思つた。然し當時エーカー三百弗もしていたので、とても手も出ない。

すると其頃、北方フォート・ジョージ方面に政府から一人に對し百六十エーカーの土地をエーカー一弗の割で讓るということを聞いた。それには市民權をとらねばならぬので歸化申請を書いていては長續きしないと思い、丁度手頃な家もあつたので、獨立第一歩を踏み出した。

一九〇八年の年も押しつまつた頃のことである。幸い近くに仕事もあつたので資金かせぎに働き乍ら開墾にはげみ、春には六、七エーカーの土地を本當にきれいな畑となつた。然しこんなにきれいになつても人のものである。どうしても自分達の土地を買わねばとしみじみ思つた。然し當時エーカー三百弗もしていたので、とても手も出ない。

すると其頃、北方フォート・ジョージ方面に政府から一人に對し百六十エーカーの土地をエーカー一弗の割で讓るということを聞いた。それには市民權をとらねばならぬので歸化申請を書く事にした。染川さんはヴイク

『そんなにラーブルに向つて書いていては長續きしないよ、君も一月と言いたいが、二月とは續くまい』と言われたが、二月たつてもやめないので染川さんもびつくりして『もう止めはせんよ』と言われた。其後二十年も日記は續けた。特に必要な箇條は赤インキで書いたので、後にこの當用日記がとても役立つた。

收穫は、初めての土地でもあり餘りよい成績ではなかつたが、それでも馬と車、農具の一部を買入れ、馬小屋も造りチキンも四、五十羽飼えるようになつた。更に翌年はチキンもふやし、ミルクの牛も數匹買入れ、

新西院の法廷に出した。一九一二年に許可となつたので愈々四年間のクロバーデールの生活を切上げ、六、七百哩北方のフォート・ジョージに移ることに定めて準備をはじめた。

馬は手飼いのがある。それに農具から食料、馬の飼料まで積込み、二頭引き車に、雨が降つてもぬれない様にカンバスをかけた。私達もカウ・ボーイの姿よろしく、自主獨立の、新らしき未來を開拓する旅路へと馬のひづめの音も高く進んで行つた。

半世紀前の一世(一)

宮内爲治

希望の第一歩を

サンフランシスコから乗船した臨時の石炭船のデッキから、刻一刻近寄るカナダの雄大な天地をじつと見つめていた。朝もやが晴れ渡ると、ノース・ヴアンクーヴアーの山、グラウス・マウンテンが高くそびえていた。波止場では、宿屋組合の人達の出迎えを受け、希望の第一歩を力強く踏み出した。波止場からシービーアールの廣い線路が、私達の希望のようにどこまでものびていた。

男兒志を立てて郷關を出す。私が十七歳の時のことだ。

この新しい國の廣い天地で思い切り働こうと、体の底から新らしい力がぐつと湧いて來た。時まさに一九〇七年四月二十五日の朝、例のクメリック號より四カ月早い日のことだつた。

一たん落着いた下宿屋ヱビス屋の柔かいベッドに別れを告げ、早速内田氏が請負つているウエストミンスター南方の鐵道路付け工事に働き始めた。バウダーかけの危險な仕事も少しも意に介せず、若さは勿論のこと新らしい人生を切り開く決意も手傳つて大人以上に働いた。

カナダに上陸以來初めてのベイに胸をおどらせて開いてみると、一日一弗二十五仙の割合で他の人達より五十仙も少い。それでも朝七時から夕方六時までの十時間の二カ月間を夢中に働いた。

其時、スタヴストン方面の鮭取のネッツマン（當時船は二人乘で、魚具を持つた人のこと）達が、パートナーを求めていたので、路付工事では給料も一人前貰えず、面白くなかつた時でもあり、渡りに船とばかりきれに應じた。ところが出漁までの一週間、鮭を取るべき身が酒を浴びるようにのみ、その後はおきまりの『ポキ』（ボーカー・ゲーム）等賭博の開帳なので、私と友人の染川さんと二人は退屈していた。

折よく近くの農家で、一日二弗五十仙の賃銀で野菜の草取働きを求めていたので毎日十時間働くことにした。初めて白人の所で働くわけで少し緊張する。染川さんが『渡米の栞』という本を讀んだが、白人は腰を下して仕事をするのを非常にいやがるというので、三日間位はかがんだままで草取りを續けた。四日目の朝主人が來て、腰を下して草取りを始めたので二人は急に尻餅をついて顔を見合せ乍ら、もう少しで腰が折れる所だつたと笑い合つた。

日本の百姓とちがつてこの國の百姓は、大きな仕事は馬と機械でするから有望の様だ、將來は共同で資金をため農家に入つて經驗をつんだ後自作農になろうと染川さんと固く誓い合つたのも、つい昨日のような氣がする。

さて鮭取りが始まつたが折惡くも不漁の年、それに經驗もなかつたせいか二カ月かかつてやつと六百尾、ネットマンの酒代を引くとパートナーの私に支拂う金はなく、路付工事よりまだ惡い、只働きになつてしまつた。しかし別な意味で大きな收穫をあげたと思う。

というのは、當時の鮭取りの人達は今とちがつて、大抵船乘り上りで、心をなぐさめる家族とてなく、氣は惡く、土曜日の朝六時、一週間の漁から歸つてくるとはじめは過ぎし一週間の出來事——風が強かつたの、スナッグが網にかかつていたとかの罪のない話だが、網の手入れが一と先づすむと、おきまりのバクチが酒を飲みながら始められ、雲行があやしくなつて、そのうちガチャンと、色々ごちそうを並べてある長いテーブルが引くり返され、後は講談そこのけの大立廻り。染川さんと二人で隅の方に小さくなつて見ていた。

私はそれをじつと見つめていたが、これは人事ではない、と鹿兒島の母のことが思出された。酒飲みの父のため何かと苦勞し、又祖母が毎晩のように、少しは禁になるからと飲ませてくれたので、酒もきらいではなく、又友達と一緒に飲みに行くこともあつたが、これはいけない、新らしい國に來て目的を實現するために、酒やバクチのために身をあやまつてはならないと、しみじみ思い、一つの決心をした。今日限り、酒もタバコも止め、バクチは勿論のこと絶對に手をつけまいと誓つた。それ以來五十年、ビールも口にせず五仙のカケもしないで來たことは、あの時の鮭以上の大きな收穫だつたと思う。

（以下第四ページに續く）



寫眞結婚で渡加して

◆＝五十二年間の生活を回顧

川本コト(六九)

全加市協歷史懸賞一等に入選した川本コトさんの一文は相當長いものであるためこれを短縮して本紙に掲載することにしました

（本紙編集記者）

寫眞結婚が流行した時分、私もおたぶんにもれず、その一人としてカナダに渡航して來ました、その頃外國行きの人數が殖えて客船にはとても乘船が出來ず、貨物船キーマン號（臨時に客船として手入れした船）に乘つて明治四十年（一九〇七年）十一月にビクトリア港に上陸しました

船客の日本人は米國行き共で二百名、うち女二十七人、カナダへの婦人客は戸崎夫人と私の二人で、共に平野ホテルに投宿し、夫々主人達に電報を打つて貰いました、毎日待つてゐても却々主人は迎ひに來てくれませんので二度目の電報を打つて頂き、それでも迎ひの人は見ゆず、他國で言語は知らず、男の人ばかりではあり私達二人は泣きたいくらい心細い思いをしました

戸崎夫人は間もなく迎ひに來ましたが、私は女一人でホテルに殘される時の事を考ゆると生きた氣持ちはありません、それで（一緒に）その夜晩香坡通ひの船に乘り、晩市で二日ばかり買物をして翌朝の汽車で、あの頃有名だつた山口村入軒（ハモンド）の一つ、主人の家へ向いました（主人への第一電報は屆いてゐなかつたこと判明）

十一月中頃の事で大雨降りでした、ハモンド停車場に着いてみると姉婿さんがワゲン一で出向ひに來て下され、ブラ〳〵揺られながら行くと一哩位行つた所にロッグハウスが目につき、生れて初めて見たので、普通人の家は洋館であるゆゑ、これは當國のコジキの住んでゐる家と私は思ひました

更に山道を進んでも私達の住む洋館は見ゆません、遙かに向うに洋館が一、二軒みゆるが、私の行く所は山口村入軒と聞いてゐるので變に思つてゐるうち平地が見ゆ、向うにまた變な家がポツ〳〵現われるのでカナダにもコジキが澤山ゐるのかなア、と思つてゐると同乘の戸崎さんが「ミセス、前の家が山本さんです」と云われたので私は只あきれてゐるばかり

やがて馬が止まり、前の家よりは更に小さい家の前で戸崎さんは「ミセスのお宅です」と云われました事は、五十年後の今日まで忘れることの出來ない第一印象です、雨は盛んに降り續くし、何んともツシの山道をゴト〳〵揺られながら行くと一哩位行つた所にロッグハウスが目につき、これならコジキよりましだと思ひながら、ジャンク屋にもないような古ストーブがすわつてゐる家と私は思ひました

更に山道を進んでも私達の住む洋館は見ゆません、遙かに向うに洋館が一、二軒みゆるが、私の行く所は山口村入軒と聞いてゐるので變に思つてゐるうち平地が見ゆ、向うにまた變な家がポツ〳〵現われるのでカナダにもコジキが澤山ゐるのかなア、と思つてゐると同乘の戸崎さんが「ミセス、前の家が山本さんです」と云われたので私は只あきれてゐるばかり

やがて馬が止まり、前の家よりは更に小さい家の前で戸崎さんは「ミセスのお宅です」と云われました事は、五十年後の今日まで忘れることの出來ない第一印象です、雨は盛んに降り續くし、何んともツシの山道をゴト〳〵揺られながら行くと一哩位行つた所にロッグハウスが目につき、これならコジキよりましだと思ひながら、ジャンク屋にもないような古ストーブがすわつてゐる家と私は思ひました

更に山道を進んでも私達の住む洋館は見ゆません、遙かに向うに洋館が一、二軒みゆるが、私の行く所は山口村入軒と聞いてゐるので變に思つてゐるうち平地が見ゆ、向うにまた變な家がポツ〳〵現われるのでカナダにもコジキが澤山ゐるのかなア、と思つてゐると同乘の戸崎さんが「ミセス、前の家が山本さんです」と云われたので私は只あきれてゐるばかり

ベッドを上から一枚ずつ剝ぎ取つて下をみれば、何んと牛の食べる干草です、外國まで來て干草の上に寢るのかと思へば、何んとも云ひようのない氣持になりました

女の身で十時間も毎日働いたのです

今度はブラッシュ山を五カ年リースで白人の土地を借地すると主人が言ひますので私は見に行き、私の女の目で見てもワラビが一面に生ひて作物が出來さうもないので又私は反對したのです、すると主人は女のくせに反對する、と云つて聞き入れず借りることにしました、土地は家から大變遠方であり、前年の失敗でお金もないし、また月二十弗を惡くしたこともあり、本當に地獄に來たと思つたこともやアラシが降り込んで寒くて一度や二度ではありません、〳〵てふる上がつてしまひます、仕方がないから古いウォーム・ストーブを買つて貰つて漸く人心地になれました

冬中は外の仕事も出來ないので男の人達は薪取りをします、外の仕事が出來るようになると白人の土地を五年間リースでブラッシュ山を借りてクレア（開墾）し苺を植ゑ付けクラブを取るのですが、日本人八軒の人々は此のストロベリ作りを始めたのです

當時は苺がとても良く出來て、今時のようにバイキンや惡い蟲もつかず、とても作りよいものとばかり思つてゐましたが、此節は五十年前の事を考へると苺作りも困難になりました

私も馴れぬながらハード仕事を手傳い、餘り無理して體を惡くしたこともあり、本當に地獄に來たと思つたこともやアラシが降り込んで寒くて一度や二度ではありません、〳〵てふる上がつてしまひます、仕方がないから古いウォーム・ストーブを買つて貰つて漸く人心地になれました

冬中は外の仕事も出來ないので男の人達は薪取りをします、外の仕事が出來るようになると白人の土地を五年間リースでブラッシュ山を借りてクレア（開墾）し苺を植ゑ付けクラブを取るのですが、日本人八軒の人々は此のストロベリ作りを始めたのです

當時は苺がとても良く出來て、今時のようにバイキンや惡い蟲もつかず、とても作りよいものとばかり思つてゐましたが、此節は五十年前の事を考へると苺作りも困難になりました

私も馴れぬながらハード仕事を手傳い、餘り無理して體を惡くしたこともあり、本當に地獄に來たと思つたこともやアラシが降り込んで寒くて一度や二度ではありません、〳〵てふる上がつてしまひます、仕方がないから古いウォーム・ストーブを買つて貰つて漸く人心地になれました

冬中は外の仕事も出來ないので男の人達は薪取りをします、外の仕事が出來るようになると白人の土地を五年間リースでブラッシュ山を借りてクレア（開墾）し苺を植ゑ付けクラブを取るのですが、日本人八軒の人々は此のストロベリ作りを始めたのです

當時は苺がとても良く出來て、今時のようにバイキンや惡い蟲もつかず、とても作りよいものとばかり思つてゐましたが、此節は五十年前の事を考へると苺作りも困難になりました

私も馴れぬながらハード仕事を手傳い、餘り無理して體

一九〇九年に長男が生れ、主人が古土地を借地すると言ひ出すので私もその土地を見に行きました、大草があるので私が反對すると主人は私を怒つて借地したが、案の條、私の思つた通り苺を植ゑ付けてから毎日々々私達二人に他の人々を雇つて一日も缺かさず草取しても最後は草が苺より大きくなつて苺摘みシーズンには草の中から苺を探す仕末で收穫は豫想の四分ノ一しか取れませんでした

今度はブラッシュ山を五カ年リースで白人の土地を借地すると主人が言ひますので私は見に行き、私の女の目で見てもワラビが一面に生ひて作物が出來さうもないので又私は反對したのです、すると主人は女のくせに反對する、と云つて聞き入れず借りることにしました、土地は家から大變遠方であり、前年の失敗でお金もないし、また月二十弗を

一九〇九年に長男が生れ、主人が古土地を借地すると言ひ出すので私もその土地を見に行きました、大草があるので私が反對すると主人は私を怒つて借地したが、案の條、私の思つた通り苺を植ゑ付けてから毎日々々私達二人に他の人々を雇つて一日も缺かさず草取しても最後は草が苺より大きくなつて苺摘みシーズンには草の中から苺を探す仕末で收穫は豫想の四分ノ一しか取れませんでした

今度はブラッシュ山を五カ年リースで白人の土地を借地すると主人が言ひますので私は見に行き、私の女の目で見てもワラビが一面に生ひて作物が出來さうもないので又私は反對したのです、すると主人は女のくせに反對する、と云つて聞き入れず借りることにしました、土地は家から大變遠方であり、前年の失敗でお金もないし、また月二十弗

一九〇九年に長男が生れ、主人が古土地を借地すると言ひ出すので私もその土地を見に行きました、大草があるので私が反對すると主人は私を怒つて借地したが、案の條、私の思つた通り苺を植ゑ付けてから毎日々々私達二人に他の人々を雇つて一日も缺かさず草取しても最後は草が苺より大きくなつて苺摘みシーズンには草の中から苺を探す仕末で收穫は豫想の四分ノ一しか取れませんでした

もし、丁度三人目の子がお腹にあつても明治四十四年の冬、賃位はあるので三人の子をつれて歸國を思ひ立ち、あの頃中は主人が薪切りのカンツラクトをしてゐたので其の薪切りの手傳いもし且つ根たおしまでやつて四十五年五月、子供が生れる二、三日前まで働き續けました、少々クレアしおくのは可哀相で此のまゝでは一人前の人間になれんように思へて夜毎按じてゐました、主人に相談して大正二年九月、三人の子をつれて歸國しました、親達の許へ歸り再會を喜び合いました、そして親達と相談して私は子供等と日本で暮したいと申し出たのですが、カナダで私が苦しい働きをした事は一言も口にしませんでした

私が再渡航しないと云ひますと、主人の親が「あんたがカナダへ行かんとあの子（主人の事）はヤケを起すゆゑでうぞ行つてくれ」と涙ながらに云われ、私方の親達は、おなかに子供が居る故（註＝コトさんは姙娠中）再渡航をした方がよいと思ふと云われるのです、子供と別れる事が何んから何まで男の仕事を働きに働いて金をため日本行の運賃はあるので三人の子をつれて歸國を思ひ立ち、あの頃中は主人が薪切りのカンツラクトをしてゐたので其の薪切りの手傳いもし且つ根たおしまでやつて四十五年五月、子供が生れる二、三日前まで働き續けました、少々クレアしおくのは可哀相で此のまゝでは一人前の人間になれんように思へて夜毎按じてゐました、主人に相談して大正二年九月、三人の子をつれて歸國しました、親達の許へ歸り再會を喜び合いました、そして親達と相談して私は子供等と日本で暮したいと申し出たのですが、カナダで私が苦しい働きをした事は一言も口にしませんでした

私が再渡航しないと云ひますと、主人の親が「あんたがカナダへ行かんとあの子（主人の事）はヤケを起すゆゑでうぞ行つてくれ」と涙ながらに云われ、私方の親達は、おなかに子供が居る故（註＝コトさんは姙娠中）再渡航をした方がよいと思ふと云われるのです、子供と別れる事が何んから何まで男の仕事を働きに働いて金をため日本行の運賃はあるので三人の子をつれて歸國を思ひ立ち、あの頃中は主人が薪切りのカンツラクトをしてゐたので其の薪切りの手傳いもし且つ根たおしまでやつて四十五年五月、子供が生れる二、三日前まで働き續けました、少々クレアしおくのは可哀相で此のまゝでは一人前の人間になれんように思へて夜毎按じてゐました、主人に相談して大正二年九月、三人の子をつれて歸國しました、親達の許へ歸り再會を喜び合いました、そして親達と相談して私は子供等と日本で暮したいと申し出たのですが、カナダで私が苦しい働きをした事は一言も口にしませんでした

▲ストロベリが終ると次はラスベリ摘み、そしてフラーム、ブルームと働き續け常に男と同じ給金を取り或る時はボスが「ユーは毎日十時間の仕事をしてゐるから十時間分を毎日拂う」とチエキを與へられた時は本當に嬉し涙がでました

三人の子供を連れて働いて土地の金を少しつ返してゐれを中々の大金であり主人は「お前が土地を買うからだ」と小言は一口毎に「お前が土地を買うからだ」と小言は再びカナダへ渡航することになりました

▲ストロベリが終ると次はラスベリ摘み、そしてフラーム、ブルームと働き續け常に男と同じ給金を取り或る時はボスが「ユーは毎日十時間の仕事をしてゐるから十時間分を毎日拂う」とチエキを與へられた時は本當に嬉し涙がでました

三人の子供を連れて働いて土地の金を少しつ返してゐれを中々の大金であり主人は「お前が土地を買うからだ」と小言は再びカナダへ渡航することになりました

▲ストロベリが終ると次はラスベリ摘み、そしてフラーム、ブルームと働き續け常に男と同じ給金を取り或る時はボスが「ユーは毎日十時間の仕事をしてゐるから十時間分を毎日拂う」とチエキを與へられた時は本當に嬉し涙がでました

三人の子供を連れて働いて土地の金を少しつ返してゐれを中々の大金であり主人は「お前が土地を買うからだ」と小言は再びカナダへ渡航することになりました

YAMAGA YASUTARO PAPERS

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

寫眞結婚

晩市

〃



七
四年間だ
ーデールを經

半世紀前の一世(一)

宮内爲治

希望の第一歩を

ンフランシスコから乗た臨時の石炭船のデッら、刻一刻近寄るカナ雄大な天地をじつと見といた。朝もやが晴れ、ノース・ヴァンクーの山、グラウス・ンテンが高くそびえて、波止場では、宿屋組人達の出迎えを受け、希望の第一歩を力強く踏み出した。波止場からシービーアールの廣い線路が、私達の希望のようにどこまでものびていた。

男兒志を立てて郷關を出ず。私が十七歳の時のことだ。

この新しい國の廣い天地で思い切り働こうと、体の底から新らしい力がぐつと湧いて來た。時まつに一九〇七年四月二十五日の朝、例のクメリック號より四カ月早い日のことだつた。

一たん落着いた下宿屋エビス屋の柔かいベッドに別れを告げ、早速内田氏が請負つているウエストミンスター南方の鐵道路付け工事に働き始めた。バッダーかけの危險な仕事も少しも意に介せず、若さは勿論のこと新らしい人生を切り開く決意も手傳つて大人以上に働いた。

カナダに上陸以來初めてのペイに胸をおどらせて開いてみると、一日一弗二十五仙の割合で他の人達より五十仙も少い。それでも朝七時から夕方六時までの十時間の二カ月間を夢中に働いた。

其時、スチヴストン方面の鮭取のネッツマン（當時船は二人乗で、魚具を持つた人のこと）達が、パートナーを求めていたので、路付工事では給料も一人前貰えず、面白くなかつた時でもあり、渡りに船とばかりこれに應じた。ところが出漁までの一週間、鮭を取るべき身が酒を浴びるようにのみ、その後はおきまりの『ポキ』（ポーカー・ゲーム）等賭博の開帳なので、私と友人の染川さんと二人は退屈していた。

折よく近くの農家で、一日一弗五十仙の賃銀で野菜の草取働きを求めていたので毎日十時間働くことにした。初めて白人の所で働くわけで少し緊張する。染川さんが『渡米の栞』という本を讀んだが、白人は腰を下して仕事をするのを非常にいやがるというので、三日間位はかがんだままで草取りを續けた。四日目の朝主人が來て、腰を下して草取りを始めたので二人は急に尻餅をついて顔を見合せ作ら、もう少しで腰が折れる所だつたと笑い合つた。

日本の百姓とちがつてこの國の百姓は、大きな仕事は馬と機械でするから有望の様だ、將來は共同で資金をため農家に入つて經驗をつんだ後自作農になろうと染川さんと固く誓い合つたのも、つい昨日のような氣がする。

さて鮭取りが始まつたが折悪くも不漁の年、それに經驗もなかつたせいか二ヵ月かかつてやつと六百尾、ネッツマンの酒代を引くとパートナーの私に支拂う金はなく、路付工事よりまだ悪い、只働きになつてしまつた。しかし別な意味で大きな收穫をあげたと思う。

というのは、當時の鮭取りの人達は今とちがつて、大抵船乗り上りで、心をなごさめる家族とてなく、氣は悪く、土曜日の朝六時、一週間の漁から歸つてくるとはじめは過ぎし一週間の出來事——風が強かつたの、スナッグが網にかかつていたとかの罪のない話だが、網の手入れが一と先ずすむと、おきまりのバクチが酒を飲みながら始められ、實行があやしくなつて、そのうちガチャンと、色々どちらとも並べてある長いテーブルが引くり返され、後は講談そこのけの大立廻り。染川さんと二人で隅の方に小さくなつて見ていた。

私はそれをじつと見つめていたが、これは人事ではない、と鹿兒島の時のことが思出された。酒飲みの父のため何かと苦勞し、又祖母が毎晩のように、少しは樂になるからと飲ませてくれたので、酒もきらいではなく、又友達と一緒に飲みに行くこともあつたが、これはいけない、新らしい國に來て、目的を實現するために、酒やバクチのために身をあやまつてはならないと、しみじみ思い、一つの決心をした。今日限り、酒もタバコも止め、バクチは勿論のこと絶對に手をつけまいと誓つた。それ以來五十年、ビールも口にせず五仙のカケもしないで來たことは、あの時の鮭以上の大きな收穫だつたと思う。

（以下第四ページに續く）

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.

キャリブ・ロード

半世紀の一世（二）　宮内鳶治

四年間住みなれたクロバーデールを後にして、ビーシー州北方のフォート・ジョージに向けて出發したのは一九一二年四月二十七日のことだった。

道はドライ地帯なので、行けども／＼水のない所で又有ってもアルカリ性が強くコックが出來ない水が多かった。それで、水があれば四時過ぎにはテントを張り一泊することにきめた。クローバーデールを發ってから三日目の朝十時頃、チリワックの北方だ、道はよく天氣もよく、二人は鼻唄まじりに馬を進めていると後から二頭仕立てのボギーが飛ぶように走って來て私達の横にピタリと車をとめ、コートの内側の移民官のバッジを見せた。同地は米國境より餘り遠くない所なので、面白い恰好のワゴンが通ったのを急に追跡して來たものらしい。

『お前達はどこからどこへ行くのか？』

『クローバーデールからフォート・ジョージへ百姓に行く』

と答えると、クローバーデールにいた證據があるかと聞くので、歸化證その他の書類は荷物の中にしまいこんでいるが、ポケットにあった三、四日前のバー氏のストアの買物ビルを示すと疑いは晴れた。そして、その恰好ではフォート・ジョージまでのドライヴは無理だ。丁度昨年の今頃二人の白人が二つのワゴンで行ったが、アッシクラフトに出るにはホーブ・マウンテンを越さねばならぬ。今は雪解け直後で道は穴だらけ、低地は水たまりだ。その人達は二組だったから道の悪い所は四頭の馬で一台づつ引上げたが、お前達はそれが出來ない。それでも白人達は二カ月かかってようやくホーブを越えることが出來たらしい。それより、そこから四哩のローズデール南方にあるフレーザー河に漁船がある。それでアガシーに出て、フレーツ・カーを借りてアッシクラフトまでジービー鐵道で行け。その方は金はかかるが結局安上りになり早く着ける」と親切に敎へてくれ、幸運と成功を祈ると握手してわかれた。

向こう見ずの私達でも、馬でホーブを越えることは止めて、汽車でアッシクラフトまで行った。

それから先は坂道が多いから車にブレーキをつけなければ危いというので、有名なポテートの産地アッシクラフトで鍛冶屋にたのんで附けてもらった。又輕いクック・ストーヴ、飼料を買い、一泊の後、昔キャリブーに金山が發見され、五百哩の道をアキス、ソー、シャブルで開通したという有名な『キャリブー・ロード』を進んだ。當時としては立派な田舍道ではあったが、坂道が多いので馬が疲れ人の方が困った。砂地でドライ地帯なので風の強い、ホコリの立つ所だった。

クリントン近くで一泊した翌日は、上り七哩の坂道を半日かかって越したが、來る日も來る日も坂道で、馬も人もあえぎながら上って行った。或るクレイの急坂では、馬の前足がすべりひざをしたたか打ったので恐れてそれ以上のぼろうとしない。下の平地まで後戻りして再び上り始めても、その滑ったところまで來ると止まってしまう。仕方がないので荷物を全部下してかつぎあげ、道の一方の立木を切り開いてようやく車を引き揚げたことがあった。

今のプリンス・ジョージには當時汽車の便はなく、このキャリブーだけが北方をつなぐ一本道だったので大がかりな輸送隊が通って行った。それは丸いキャンバスの屋根で、大型のワゴン五、六台を連結し、馬は八頭から十六頭位で引かせ坂道になると勾配次第で、ワゴン一、二臺づつはなして坂道を引上げる。そして夜は各所にあるロード・キャンプに泊っていた。私達はロード・キャンプではなしに、水のある所にテントを張り、愛犬のプリンスに外をワッチさせ、銃を枕許に置いて寢るのは別につらいとは思わなかったが、二頭の旅に馴れない馬で、坂道になると荷物を二分、三分しては引上げるので、馬の疲勞が一と通りではないのには困った。せめて一日でも休ませてやりたいが、飼料が豫定以上に減ってくるのでそれも出來ず、馬に代って車を引きたくさえも思った。短い急坂では荷物を全部おろし、空ワゴンを馬に引揚げさせ、自分達で荷物をかつぎあげることも毎日くり返した。だから車に乗るのは下り坂だけのことで、あとは車のサイドを二人で歩き續けた。

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS
FOLDER NO.

心のふるさと

西村　登　美

支那哲學を
學び始めた子供が
學校で習つた事を
折々話して
「ベリーインタレステング」
という
今夜も、
「コンフユーシヤス」
「ラオ・ツー」と言うので
字引で探してみると
「孔子」「老子」と
書かれている
小さかつた子供が
何時か娘になり
遠い東の國の賢者の教えに
耳をかたむけるように
なつたのか
カナダで生れ
カナダで育つた
二世の吾娘の胸に
東洋の精神は
何かとささやいてくれるの
か
「ベリーインタレステング」
という吾娘の言葉は
東洋で生れ育つた母の心を
あたゝかくしてくれる

○

素朴な壺、皿が
動物の形が、人のかたちが
ならべられた
古代エジプトのルームを
音ひそませて私は歩く
その頃の物はまだ
色も形も幼く
生地の土に近いものだが
一つ一つが
心をこめ　力を　めて
人の手で作られたもの
その頃は
今よりもつと掟が守られ
今よりもつと罪をおそれ
人は眞摯な心で生きていた
遠い世に生れ、戀をし、
素朴な營みを終えて
死んで行つた人達が
遺したものよ
昔の夢をさゝやいてくれる
ものよ
動きはげしい、きびしい世
に生きて、
ひそかにミユージアムを歩
めば
少しゆがんだ壺、皿が
心のふるさとのように
親しい

○

ミユーヂアムの
天井一杯の高さに
立ちはだかつている恐龍を
見上げて
私は小さく立つている
アルバタで發掘されたとい
う　この化石は
同じカナダの地を
歩いていたのか
その頃は地上がもつと暖く
動物も、植物も、
すべてが大きく、大きく
小さな人間はいなかつたと
いう
お前達の世界であつた
中世代の地球を
おそつて來た冷寒に
お前達はすべて亡び去り
消え去つてしまつた
再び新らしいものが生れ
また亡び
更に新らしいものが生れ
少しづつ進化して
今のような人類が
生れて來たという
かつてお前達のものであつ
た地球を
今は人間が占めて
絶えず小さく爭つている
あゝ考えられない程の
自然の不可思議よ
地球の歴史の長さよ
ミユーヂアムへ來て
お前を仰げば
おのづから湧く深い吐息！
天井一杯の高さに
立ちはだかつている恐龍よ
お前と、私との間に
幾千萬年の時のへだたりが
あるのか

漁場さがしから銅鑛發見

『池田有親のこと』(中)

德永壽太郎

臨へレン製造に着手

一九〇四年ナナイモ附近の海岸に鰊の群が押寄せ、何百噸もの魚が岸に打上げて腐っているのを見、そこにヒントを得て鰊から肥料と油を製造する工場を建てたが、不幸にもきた火事に遇つて工場は全燒した。不撓不屈の彼は直ちに工場を再建したのであるが、その頃既に發生していたビーシー州内の東洋人排斥熱は政治家の政爭の具に使われ、彼の事業が問題となつて州政府から中止を要求されたそこで彼は政府を相手に訴訟を起し、裁判では勝つたけれども今度は食料品たる鰊をこの漁區内で肥料に製造することを禁ずるという法律を作られたので終に工場を閉鎖するの止むなきに至つた。

そこで彼は鰊を試驗的に造り支那方面に販路を拓くことを始めたが、中止にしてこれを他の日系人に譲り渡した。これが後にカナダ日系人間の重要なる產業の一つになつたのである。

さて彼は新しい漁場を見出すべく帆船ドウソン號とギヤスリン船千里號に十二人の漁夫と潜水夫をのせて北方へ向つた。ドウソン號は彼の設計で作らせた長さ百五十呎、幅三十二呎の船で、中に肥料製造の設備をつけた工船であつた。

『イケダ・ベー』と池田銅山

クイン・シャロット群島の一つモレスビー島の南端に小さな灣がある。彼がそこに立寄つた時、偶然にも良質の銅鑛を發見した。一九〇六年四月のことであつた。處がその場所が地圖に載つていないので鑛區獲得の願書に書きようがない。そこでヴイクトリアに出頭して灣の形に寫眞を添えて出願した處、間もなく中央政府から今後永久にこの地を『イケダ・ベー』と命名する旨を通知して來た。カナダの地名に日系人の名前を用いたのは多分これが初めてであろう。

一九〇年池田鑛山は日本の資本を入れて採鑛に着手した。機械の買入れ、鐵道の布設、埠頭の建設など凡ての設備を整え、カナダ政府の許可で日本から七十餘名の勞働者を呼寄せ一時は百五十人の就働者がいた。此時黒田四郎氏が東部から移つて來て彼の片腕となつて働いた。十六年前に船中で助けられた恩人のために良職を捨てて來たのだという美しいエピソードを殘している。

其後晩香坡地方の白人の資本を加えて資本金八十五万弗の株式會社として經營していたが、一九二〇年銅價暴落で閉鎖するに至つた

鑛山發見當時は太平洋沿岸の新聞雜誌が大々的に報道したので一時に多數の探險者がヴイン・シャロット島に押寄せ、池田灣の隣のゼやバーが出來たという。又日本でも大きく宣傳され彼を主人公とする『世界の大寶庫』とかいう本が續々出版された。何れも事實を誇張してあるので彼は甚だ迷惑したそうだ。

(以下次號)

ニツポニヤホーム
總會通知

一九五九年一月卅一日午後二時よりオタリオ州ビームスビル(ナンバエイトハイウエーとサーテーロード角)ニツポニヤホームに於て總會を開催致します御出席下さい。議事は

一、事會議長の報告
二、幹事、會計の報告
三、開館式に關する件
四、事の選擧
五、臨時提出議案若しあらば

一九五九年一月廿日

ニツポニヤホーム
理事會幹事 山家

會員各位

ENT'D JAN 20 1959

NOTICE OF ANNUAL GENERAL MEETING OF THE NIPPONIA HOME

Please take notice that the first annual General Meeting of the Nipponia Home will be held Saturday, January 31, 1959, 2 p.m., at the Nipponia Home—corner of No. 8 Highway and Thirty Road,, Beamsville, Ontario.

The business of the meeting will include:

1. Chairman's report.
2. Secretary-Treasurer's report.
3. Election of Directors.
4. Grand Opening Ceremony.
5. Such other business as may come before the Board.

By order of the Board of Directors.

JAN 20 1959

ニツポニヤホーム寄附感謝

百拾弗 ハミルトン 兵頭敏子
廿五弗宛 トロント市 テッド永井
ダグラス荒井
アシクラフト 塚本正己
廿弗宛 無名氏
ピカリング ローカル村 木村
オタワ ティ清水
拾五弗 ハミルトン ミス上田
拾弗宛 トロント市 ゼーケー宮崎
中野武雄
小財義信
前田順作
徳永壽一郎
プレストンフォード
ジョーチ西村 トロント市
テー小林
エフラー加藤
富本宇太郎
齋藤直敏
木下雷助
重石紀美子
マーリン ケー青木
ビー尾本
ミセス倉本
五弗宛 トロント市 同

ENT'D JAN 27 1959

中西元暁
山口照
信子 家族一同
552 Sherman Ave. S., Hamilton, Ont. Phone FU. 5-3186

彦孝 同
St. Ont. 5402
四郎 同
一 同

西川新次郎
229 Caroline St. S., Hamilton, Ont.

横山富太郎
家族一同
29 Myrtle Ave., St.

一九五八年青年部に大陸へ送つたもの

ニーカナディアン

クリスマス
新年特別號
（第二部）

池田有親のこと〔上〕

德永壽太郎

一八九〇年十二月橫濱を出帆したシテー・オヴ・ベらキン號に當時二十六歳の日本青年が乘つていた。大なる希望を抱いてアメリカに渡るのである。

船が太平洋の荒波に乘り出した頃、支那人ボーイが彼に駈寄り、船底の積荷の中に日本人らしい若者が潛んで苦しんでいると知らせて來た。行つて見ると十五六の少年が船よいで、見るも哀れに血を吐きながら悶え伏している。事情を聞くとこの少年も同じく大望を抱いて憧れの米國へ行くことに決意したけれど、旅費が乏しく運送問屋の世話で荷物に紛らせて乘つたのだという。彼は少年の境遇に深く同情し出來る限りの介抱を盡した。又船長に會つて寬大なる措置を願つた。船長も己むなく承諾し、船が桑港に着いた時は上陸手續まで濟ませてくれた。

この少年はそれから米國東部へ移り、幾多の辛酸をなめて十官學校を出て、更にボストン大學を卒業した黑田四郎という人であるが私がここに語らんとするのは、この少年を介抱した青年池田有親という人のことである。

生來の冒險好き

池田有親は私の妻の父である。彼は一八六四年、丁度維新の四年前に新潟縣にこの少年も生れた。明治になつて初めて出來た小學校に入學したが、子供の時から秀才であつたと見えて、十四歳の時たまたま明治天皇が北陸地方御巡幸の際『平素學力優等に付金一封、天皇陛下より御下賜候者也』という賞狀を戴いた。陛下から直接の御下賜で彼は非常な光榮に感激したのであつた。十六歳の時東京に出て英語と漢學を學んでいたが後に長野の學校へ移り醫學の初步を修めた。多分醫者になる積りであつたのであろう。

然し性來冒險好きで事業熱に燃えていた彼は學業を止めて輕井澤で親戚の持つていた廣い荒地を開墾することを企てた。鄉里から數人の農夫を呼び寄せ、まだ其の地方になかつたアップルや栗の苗木を數百本植付けたが、不幸にも野兎に全部食い枯されてしまつた。又アメリカからキャベツ、トマト、レタスなどの種を取寄せて栽培し、そこの大きな池には鯉を養殖した。地味と氣候に惠まれてこれらの作物は良く出來たが、まだ一般に西洋野菜の使用法を知らぬ時代で地方には賣先がなく、東京・橫濱の外人に供給するには鐵道がない時で運搬に莫大の費用がかかり到底收支償わず、この開墾事業は時機尙早という譯で遂に失敗に終つた。それから數十年後に彼は輕井澤を訪れたことがあるがこの地が世界的に有名の避暑地となり、彼が曾ての養魚池は雲場が池といつになつているのを見て今昔の感に打たれたという。

長政にあこがれ海外發展を志す

彼は少年の頃から山田長政に憧がれ日本人の海外發展の重要性を感じていた。二十六歳の時彼も意を決してアメリカに渡り、初め加州ヴアカビルで農園に働いたが、遂に大堀という友人と二人でアラスカに向つた。貯金の全部を投じて防寒具、食糧品、探金道具及び長期滯在の計畫で農具や穀物野菜の種などと二噸にあまる荷物を携えて出かけたのである。彼がアラスカ探險中、無人境に酷寒と飢餓に戰い幾度か死線を越えた話はここで書く紙面がないが、この體驗記は「アラスカの氷山旅行」と題して一九〇三年東京で出版された。兎に角大金鑛の發見は遂に實現せずに終つた。

彼は其後二カ年、アラスカ南部の都市シトカに留つて働きながら漁業に就て研究した。そしてその沿岸に鮭が頗る豊富なることを確かめたので、一九〇二年日本へ行き海産物商數人と共同で東丸という帆船を買入れ、アラスカで塩鮭を製造して日本へ輸出することを始めた。初年は好漁で收益があつたが翌年船火事で大損失を蒙つた爲に折角の計畫も二年で中止した。

（以下次號）

おば樣もどんなにかハッピーになられるでしょう。いつまでもなごやかに暮してしやべりが出來長生きして下さい。

YAMAGA YASUTARŌ

Congenial Atmosphere, National Food Treats, At Nipponia Home Here

By WFR

A man who is spending the bulk of his life savings in the service of his fellow countrymen to remove lonliness from the sunset of their lives is one of Clinton Township's newest citizens. Mr Y Yamaga, superintendent of the recently opened Home, on No 8 Highway at The Thirty.

Three Japanese-born men and one lady, all well past the 70 mark, are the first residents of the Home which eventually will provide a comfortable home for 18, at a monthly cost to each of less than their old age pensions.

Of the 22,000 Japanese in Canada, some 15,000 live in Ontario. The Nipponia Home is the only one of its kind in this country especially designed and planned to care for elderly Japanese. It is owned by a corporation, registered as a charitable institution, and received a grant as such under the Ontario Government's Charitable Institutions Act. Rev T Komiyama, a United Church minister connected with the Church of All Nations on Sherman Avenue, Hamilton, is chairman of the board of directors.

Mostly, though, Nipponia Home is the culmination of the dream of one man. Mr Yamaga, the sprightliest young man of 73 we have ever seen, was born in Japan and came to Canada at the age of 21.

Like so many of his countrymen, he settled in British Columbia and soon was growing strawberries at Haney, in the Fraser Valley. As a teacher in a United Church Sunday School he had to learn English quickly in order to teach lessons to his class. This was an experience unlike that faced by most of his countrymen who worked in the forest industry, under Japanese-speaking foremen. Year after year they worked in the woods, never having occasion to learn the language of their adopted country, and to this day there are many of the original generation to come to Canada who cannot speak English.

These are the people for whom the Nipponia Home was built. Mr Yamaga knows the plight and the loneliness of these grandparents, able to talk only the commonest "household" Japanese to their children, who are essentially English-speaking, and unable to converse at all with the grandchildren who speak only English.

A Touch of Home

After 14 years as managing director of a berry growers co-operative in the Fraser Valley, and other years as a partner in a successful sawmill business in the Cariboo country, Mr Yamaga determined to spend his remaining years enjoying the fruits of his long labours by building a home with his savings especially for his elder fellow-countrymen, with a genuine atmosphere of friendliness, congeniality, and a touch of the homeland.

He got in touch with the Toronto architectural firm of Henry Fleiss & Associates, and a Japanese Canadian, George Yamazaki, who was on their staff, designed the building. Though Mr Yamazaki had never been in Japan, he has created at Nipponia Home just the kind of atmosphere combined with every comfort, that Mr Yamaga had in mind.

Money for the home, which cost some $100,000, came 50% from the Ontario Government, half the remainder from Mr Yamaga, and the balance from a subscription campaign among the Japanese of Ontario. A grant of $1,000 was received from the Atkinson Foundation.

The home is built on a two and a half acre site at the corner of Thirty Mountain Road and No 8 Highway, formerly owned by B V Kenyon. Mr Yamaga built a new home for himself overlooking the ravine across the Thirty road from the Home. Here he lives with his wife and an invalid son.

Likes The Weather

Besides the mild climate, Mr Yamaga said he chose the Beamsville district because of the good communications, accessibility of the home to the centres of population, and because it was close to where his daughter and her family live, near Hamilton.

Building started early in July and the first residents were in well before Christmas.

The one-storey building is built of concrete block and has nearly a full basement. It has two main wings. One houses the bedrooms, seven double and four single, all attractively furnished in a very modern style. The other main wing holds the kitchen, dining room, large and attractive sitting room, and Mr Yamaga's office. In the basement is a laundry room, carpenter shop, recreation room, provision room, and furnace room. Heating is by natural gas. Flooring is of a high quality covering wall to wall, over felt, to give soft walking to the elderly occupants.

Leisurly Baths

Two imortant features built in to the Home are among the most attractive from the viewpoint of the Japanese occupants. These are the old-country-style baths and the Japanese garden.

The former consists of a deep tub, in which one sits immersed in hot water of up to 140 degrees, on a wooden bench, the water reaching the neck. The bath measures about six feet long by three feet wide and some 30 inches in depth.

A formal Japanese garden is to be built in a 30 x 20-foot area enclosed on all sides by the building. This will contain a pool with fish, evergreens probably a little bridge, and all the usual features of such a national garden.

Not the least of the remembered joys of homeland found at Nipponia (which derives its name from the Japanese name for their homeland) is the regular serving of national dishes from the modern kitchen. Practically daily the residents eat some of their favourite rice, fish, or other fondly remembered dish, prepared by a cook who knows how to please Japanese palates.

Mr Yamaga is a happy man these days in his post as superintendent of a Home that was to a great extent the culmination of a dream he has harbored for helping make brighter the lives of his elderly countrymen. The residents are contemporary, age-wise (one man, 88, proudly notes that he is older than Sir Winston Churchill and appears to be retaining his age-lead over that doughty Britisher!) They have many things in common — youthful experiences, remembrances of the old land, and many memories, good companionship, and comfort in their old age. They were charmed one day recently when Miss Mary Scott, of Albright Gardens, a longtime missionary in Japan, visited Nipponia Home and talked excellent Japanese to them.

We feel certain people of Beamsville and Clinton Township welcome these gentle people to their midst, with the hope that they may live long and happily in their new home.

NOTICE OF ANNUAL GENERAL MEETING OF NIPPONIA HOME

Please take notice that the First Annual General Meeting of the Nipponia Home will be held on Saturday, January 31, 1959, 2 p.m., at the Nipponia Home, corner No. 8 Highway and Thirty Road, Beamsville, Ontario. The agenda of the meeting will be:

—Chairman's report.
—Secretary-Treasurer's report.
—Election of Directors.
—Grand Opening Ceremony.
—Discussion of other businesses.

By order of the Board of Directors.

Y. Yamaga,
Secretary-Treasurer.

YAMAGA YASUTARO

BEAMSVILLE EXPRESS

BEAMSVILLE, ONT., WEDNESDAY, JAN. 14, 1959 EIGHT PAGES



The attractive and completely modern Nipponia Home, No 8 Highway at Thirty Mountain Road, only home for elderly Japanese people.

1/21/59

ームに入つて

テー・ケー女

ニッポニア・ホームに入つて一カ月、有難い日々を送つているので、体重も二斤増し元氣でいることをビーシー州にいる身内のものに知らしてやつたら、彼女も喜んでくれ、次のような手紙を書いて來ました。

×

おば様もいよいよホームにはいられましたとの事、かねがねさびしさにやせるおもいをしておられたおば様、さぞ氣持ちがサッパリなされたでしょう。日本語ばかりでおしやべりが出來

日本食がたべられ、老人同志の昔話し、なごやかな笑い聲がきこえるようです。何の思うことなくのんきに日を暮しなさる事が出來ますから、きつと長生きなさるでしょう。

昔は養老院とは金のない人が入りましたのですが、今は日本でも別莊を持つているような人が澤山入る人があります。家にいて嫁にねんりようするのがいやで、老人ホームに行けばのん氣な生活が出來るからです。おば様もどうにかハッピーになられるでしょう。いつまでもなごやかに暮して長生きして下



MR. Y. YAMAGA, SUPERINTENDENT OF THE NIPPONIA HOME

Old Age Assistance Recipients

of which 41 are organizations and individuals who donated $100.00 or more entitling them to a life membership. In honor of all donors, the Home has a "Memorial Book" in which the names have been inscribed.

Y. Yamaga, secretary-treasurer and superintendent, reported the activities of the Board of Directors since September of 1957 when the Home was incorporated by the Provincial Government as being a charitable organization.

The financial report to December 1958 was also given. The public donation including the Atkinson Foundation's contribution of $1000 was $18,662.60; from Mrs. Uyehara of Edmonton, Alberta the sum of $10,000; all the assets and savings of Y. Yamaga of $25,000, and the Provincial Government's subsidy of $51,080.82 made possible the purchasing of the site, construction and furnishing as well as paid advertising and stationery. A contingency fund of $2,500 has also been set aside.

The meeting which had in attendance members from Hamilton, St. Catherines, Guelph and Toronto decided the following matter:

1. The date for the Grand Opening is Saturday, April 18th.
2. The membership fee of $2.00 a year for the general membership will be asked to be paid strictly on a voluntary basis.
3. Further general contributions will be accepted.

All membership fees and contributions received in the future will be set aside as a special fund for further expansion since the operating expenses are being ...pply covered by payment from ...residents (The monthly pension or assistance of $55.00 except for $8.00 which is deducted for personal use as compliance to Ontario laws goes into the expenses of the Home.) In a situation where a shortage in funds might arise, the Provincial Government has agreed to meet the deficit. If the extension fund accumulates, the report stated, the Home will be able to provide nurses plus further development.

With emphasis on health the Home has retained the services of a doctor who will be called in for necessitated cases and also has monthly physical check-ups for its residents. An ambulance service is also available from the West Lincoln Hospital which is located within a miles distance. Persons in possession of "medical cards" will get free care and hospitalization.

Due to some misunderstanding in regards to the general idea of the Home, many Issei are hesitating to apply for entrance the report stated.

The Nipponia Home is a co-operative home for aged citizens who donate their pensions or assistance into the expenses and live under the idea of being one happy family sharing pleasures and worries. In this atmosphere they can live without fear or anxiety in what the future holds for them. With these facts in mind the Directors urge all eligible applicants to apply for the accomodations still available.

The present residents are looking forward to spring when they will be able to put to physical work their already planned vegetable and Japanese-styled gardens.

The meeting elected the directors for this year as follows: Rev. T. Komiyama, Mrs. H. Hayashi, Y. Yamaga, Hamilton JCCA; Mrs. H. Shimizu, Toronto JCCA; M. Sano, Hamilton Kyowakai; S. Mori, Toronto Buddhist Church, and S. Utsunomiya.

雑録

老年者共同住家（ニツポニア・ホーム）

梅月生

　オンタリオ州ビームスビルに出来上つた老年者の共同住家ニツポニア・ホームでは一週間前に見て来たので總會には行かぬつもりでいたが、終身會員であるトロント市協から住矢ミツ會長が出席することになつたので、去る土曜日午后、天氣はよいし便乗させてもらつて出かけた。

　セントカスリン、ハミルトン、ジエルフ、トロント方面からの會員が集り、理事長の小宮山牧師が司會して建設資金募集に際し各方面から快よき支持を寄せられてホームが出来上つたことに感謝を表明した。寄附者總數は九百十七名（このうち團体や個人で百弗以上の寄附者は終身會員となつていて、これが四十一名）でこれら寄附者の厚意を記念するためには『寄附者芳名錄』を備わることになつている。

　理事會幹事山家安太郎氏の報告は、一九五七年九月にオンタリオ州慈善團体法の下に登錄して建設に着手して以來理事會がして来た仕事を説明したもので、資金關係では

△一般よりの資金寄附額はアトキンソン財團よりの千弗も合めて一八、六六二弗六〇仙
△エドモントンの上原夫人より一〇、〇〇〇弗
△山家安太郎氏の財産と貯金供出二五、〇〇〇弗

で合計五万三千六百六十二弗六十仙、これに對して州政府からの補助金が五万一千餘弗來るので收入合計は十万四千七百餘弗となり、政府補助金收入も支拂いもまだ全部は濟んでいないけれど、この金をホームの地所代、建設費、家具代、廣告印刷文房具代等に振り當て、不時の用意金として二千五百弗をおくことが出来るようになつている。

　總會では諸報告を承認後次のことを決定した。

（一）開館式は四月十八日（土）に行う。州政府の厚生相はじめ招待する人々のリストは理事會で用意のものを承認。
（二）會費（一ヵ年二弗）は自發的に納入方を希望する。
（三）今後の寄附金も受付ける。

　昨年の建設資金募集に際し百弗以上を醵金した團体と個人は規約によつて終身會員となつているのであるが、昨年のはすべてホーム建設の資金だつたので、終身會員以外の人は、本年から二弗の會費で、ホーム運營の會員（管理者）になつてもらうことになるわけで、その他の寄附金（居住者慰安のためなど特別な名目で寄附者がある場合は別にして）も受付けることになつた。

　そして、こんどのホーム運營費は大体において居住者が支拂うボード代（政府からの老年恩給又は生活費補助金月五十五弗のうち本人に八弗を小使いとして渡した殘り）でまかなつてゆき、不足がある場合は州政府から補助金がくるので、『自活』できる見當がつくのであるから、今後入つてくる會費や寄附金はホーム擴張資金として別に積立てることになつた。資金がたまれば行く行くは看護婦も置いて更に完備したホームに發展させることが出来るわけである。もつとも現在でもホームは、近くに嘱託醫があつて必要の場合は電話一つで直ぐに來診してくれるし、一ヵ月に一度はドクターが居住者の健康狀態を見廻りに來ている。万一怪我したらアンビユランスもあり、一マイル以内にはウエスト・リンカーン病院があるので、メデカル・カードを持つている者は病院費も醫師の費用もすべて政府で見てくれる。

　ところで、これまでホームに入り得る人は滿七十歲以上の老年恩給受領者ということになつていたし、とかく老人ホームといえば、『おばすて山』式な間違つた考え方が行われていたせいか、入寮をためらつている向きもあるらしくて、まだルームが空いているが、『六十五歲以上六十九歲までの者でオンタリオ州政府から老年恩給受領者並みの生活補助金を受けている人々を入寮させることが出來るか否か』につき州政府に正式に問合せて確答を待たのによると

　州政府から生活補助金を受けている者（六十五歲から六十九歲までの者）も、老年恩給受領者と同樣に取扱つてよい。

ということになつたので、右のように六十五歲以上六十九歲までの者で、生活費補助を受けており、身寄りもなくて入寮したい人は、傳染性病氣でさえなければ誰でも申込める、ことになつた。

　要するにニツポニア・ホームは、老年者の共同住家であり、入寮者お互いが金を出し合つて家族的に共同生活し、一大家族の一員として睦まじく語らい合い、喜びも憂いも分ち合う氣持のある人だつたら至極氣樂に老後の不安を忘れて生活できるところなのである。

　現在居住している人々は、まだ雪におおわれている庭や畑を眺めて、春や待たると、今からすでに花壇や野菜畑の計畫を語り合つている。

　尚本年度の理事には次の諸氏が選定された。

小宮山牧師　林久枝夫人　山家安太郎　ハミルトン市協代表　清水英夫夫人　トロント市協代表　佐野又三郎　ハミルトン共和會代表　森助五郎（ト佛教會）宇都宮鹿之助

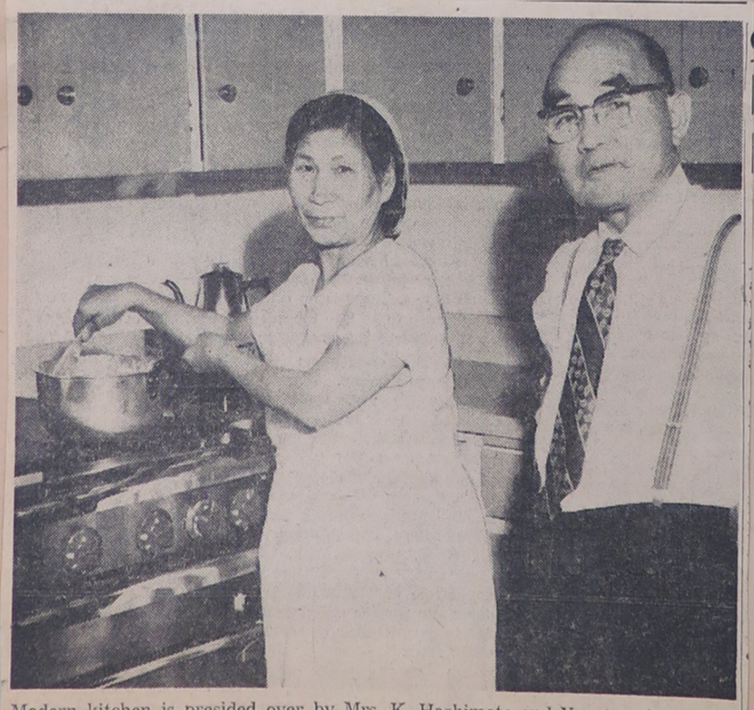
Nipponia Home

Cherry Blossoms Recall Japanese Childhood



—Globe and Mail, Jimmy Simpson.

Living room is furnished in Canadian style, except for Japanese painting and poems on wall. Home is built amid blossoming fruit trees.



Modern kitchen is presided over by Mrs. K. Hashimoto and Yasutaro Yamaga.

By JIMMY SIMPSON
Globe and Mail Staff Reporter

Beamsville, Feb. 24 — The only one of its kind in Canada, a home for aged Japanese-Canadians has been opened near here by Yasutaro Yamaga, retired B.C. lumberman. The Nipponia Home, long a dream of Mr. Yamaga, is located between Beamsville and Grimsby.

Surrounded by fruit trees which will remind the elderly residents of their childhood among the cherry blossoms of their native Japan, the Nipponia Home is a low one-story building on a two-and-a-half acre plot, with a separate staff house just across 30 Mountain Rd. It has two wings. One contains a spacious living room and a large dining room, as well as the kitchen and Mr. Yamaga's office.

The other wing, which is connected by a glassed observatory passing the main entrance, has seven bedrooms with two single beds and four with only one bed. Total accommodation is limited to 18.

Regular Canadian-style washrooms and bathrooms are available for both men and women residents and there is one special bathroom, with a deep, tiled Japanese tub where hot, relaxing baths, in truly Japanese manner, can be enjoyed.

A large room in the basement will be furnished as a recreation room and there are special laundry rooms, storage and furnace rooms, as well as a workshop.

The grounds are staked for extensive flower gardens. A vegetable garden will be planted to meet the requirements of residents. Between the wings a Japanese garden is planned as soon as weather permits. Fruit trees bordering the property will supply residents with fresh fruit during the season and a reserve of canned fruit for winter.

There are only four resident guests at the moment. They include a former fisherman, a gardener, a storekeeper, and one woman. All have spent most of their lives in Canada in British Columbia until they were required to move inland with their families during the Second World War. Their ages range from 88 to 73. Applicants must be over 65.

A 10-man board of directors, headed by Rev. Takashi Komiyama, pastor of All Nations United Church, Hamilton, reviews application for admission. Four others have applied for admission up to the present, and it is expected that the home soon will be filled to capacity.

"Our residents enjoy themselves here," Mr. Yamaga said. "They can speak their own language and, while we have all become used to living in Canadian fashion and usually eat the same type of food as other Canadians, occasionally our cook prepares a special Japanese dish such as sukiyaki for a change."

Except for a Japanese painting and several poems on long scrolls on the living room wall, the rest of the home is furnished in traditional Canadian style. An elaborate television set occupies a prominent place in the living room and automatic washers and dryers make work easy in the laundry.

"I don't think any of us could live like they do in Japan, with low stools and cushions," Mr. Yamaga said. "I think we would get just as tired as Canadians do when they sit on low seats."

The home has been a long-time dream of Mr. Yamaga. When he retired from his lumber business in the Cariboo district, 300 miles north of Vancouver, two years ago, he moved to Hamilton, to be with his daughter and her family.

But inactivity didn't suit him, and he decided to organize the Nipponia home. Other directors said Mr. Yamaga donated nearly a quarter of the more than $100,000 invested so far. An Ontario Government grant helped with construction and the balance of the money is being raised among their own people, Mr. Yamaga said.

"There are about 10,000 of our people in Ontario," Mr. Yamaga said. "Between 8,000 and 9,000 live in Toronto. There are about 1,000 in Hamilton and a number of families in other Ontario cities such as St. Catharines, Brantford, London, St. Thomas and others."

"Our race is just like others here. In Japan there is a real interest in keeping families together all through their life, but in Canada and other countries the young people have drifted away from their parents, often moving to other districts to get work."

"I wanted to make a happy retirement for some of our older people. While we expect most of our residents will be persons who have been living in Ontario for some time, there are no restrictions for applicants from other parts of the country. If they need a home we will consider helping them."

FOLDER NO. 8-14

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

Childhood

By JIMMY SIMPSON
e and Mail Staff Reporter

amsville, Feb. 24 — The one of its kind in Canada, ne for aged Japanese-Cana- has been opened near by Yasutaro Yamaga, re- B.C. lumberman. The Nip- Home, long a dream of Yamaga, is located between sville and Grimsby. rrounded by fruit trees will remind the elderly nts of their childhood g the cherry blossoms of native Japan. the Nip- Home is a low one-story ng on a two-and-a-half plot, with a separate staff just across 30 Mountain has two wings. One con- a spacious living room and e dining room, as well as itchen and Mr. Yamaga's

other wing, which is con- d by a glassed observatory g the main entrance, has bedrooms with two single and four with only one Total accommodation is d to 18.

ular Canadian-style wash- and bathrooms are avail- or both men and women nts and there is one spe- athroom, with a deep, tiled ese tub where hot, relax- baths, in truly Japanese er, can be enjoyed.

arge room in the basement e furnished as a recrea- oom and there are special ry rooms, storage and fur- rooms, as well as a work-

grounds are staked for sive flower gardens. A able garden will be planted eet the requirements of nts. Between the wings a ese garden is planned as as weather permits. Fruit bordering the property upply residents with fresh during the season and a ve of canned fruit for r.

ere are only four resident s at the moment. They in- a former fisherman, a ener, a storekeeper, and woman. All have spent of their lives in Canada ritish Columbia until they required to move inland their families during the nd World War. Their ages e from 88 to 73. Applicants be over 65.

10-man board of directors, ed by Rev. Takashi Komi- , pastor of All Nations ed Church, Hamilton, re- application for admission. others have applied for ssion up to the present, and expected that the home will be filled to capacity. ur residents enjoy them- s here," Mr. Yamaga said. y can speak their own uage and, while we have all ne used to living in Cana- fashion and usually eat the type of food as other Ca- ns, occasionally our cook ares a special Japanese dish as sukiyaki for a change."

Except for a Japanese painting and several poems on long scrolls on the living room wall, the rest of the home is furnished in traditional Canadian style. An elaborate television set occupies a prominent place in the living room and automatic washers and dryers make work easy in the laundry.

"I don't think any of us could live like they do in Japan, with low stools and cushions," Mr. Yamaga said. "I think we would get just as tired as Canadians do when they sit on low seats."

The home has been a long-time dream of Mr. Yamaga. When he retired from his lumber business in the Cariboo district, 300 miles north of Vancouver, two years ago, he moved to Hamilton, to be with his daughter and her family.

But inactivity didn't suit him, and he decided to organize the Nipponia home. Other directors said Mr. Yamaga donated nearly a quarter of the more than $100,000 invested so far. An Ontario Government grant helped with construction and the balance of the money is being raised among their own people, Mr. Yamaga said.

"There are about 10,000 of our people in Ontario," Mr. Yamaga said. "Between 8,000 and 9,000 live in Toronto. There are about 1,000 in Hamilton and a number of families in other Ontario cities such as St. Catharines, Brantford, London, St. Thomas and others."

"Our race is just like others here. In Japan there is a real interest in keeping families together all through their life, but in Canada and other countries the young people have drifted away from their parents, often moving to other districts to get work."

"I wanted to make a happy retirement for some of our older people. While we expect most of our residents will be persons who have been living in Ontario for some time, there are no restrictions for applicants from other parts of the country. If they need a home we will consider helping them."

EDNESDAY, MARCH 25, 1959 TORONTO, ONT.

Toronto JCCA Elects 1959 Executive Officers

At the Inaugural and Appreciation Banquet for the Toronto JCCA last Saturday evening at the Driftwood Restaurant, executive members numbering about 35 elected last year's co-chairman of the local chapter, Mits Sumiya, to the vice presidency position.

During the business portion of the banquet, the following officers were elected to assist Toronto JCCA president, Stan Hiraki, for the 1959 term:

Treasurer, George Takahashi; assistant treasurer, Miss Fumi Sasaki: secretary, Miss Nancy Takeuchi; picnic committee chairman, Mits Sumiya; softball committee chairman, Mrs. Liz Pearce; social committee co-chairman, Miss Denise Nishimura and Ace Shirakawa; art committee chairman, Miss Agnes Shimono; finance, George Takahashi; public relation co-chairmen, Vic Kitagawa and Jerry Kutsukake. Sock Shintani who will be travelling to various centres across the country on business was also appointed to assist in public relations as well as Ed Ide. The Toronto Chapter graciously accepted an offer by Jack Hemmy to assist also, in the way of photographs.

A brief summary of this year's activities was presented by the president which included the Invitational Softball Tournament; Annual Community Picnic; Art Exhibition; dances and joint activities with the Hamilton and Chatham chapters.

It was also announced that the executive committee is contemplating the forming of a film society and a committee to do research on Japantse culture to assist the National JCCA.

Before adjournment of the business, Mits Sumiya expressed his appreciation to all past active members for their support during his term in office. Guest speakers were T. Umezuki representing the Isseibu and Ed Ide, National president but also member of the local.

Guests included Roy Miura, Fred Kamibayashi, Muts Murase, Miss Lillian Otsuka, Mits Nakashima and George Kumagai of the Hamilton JCCA as well as others from Toronto numbering the social gathering to over 55 persons.

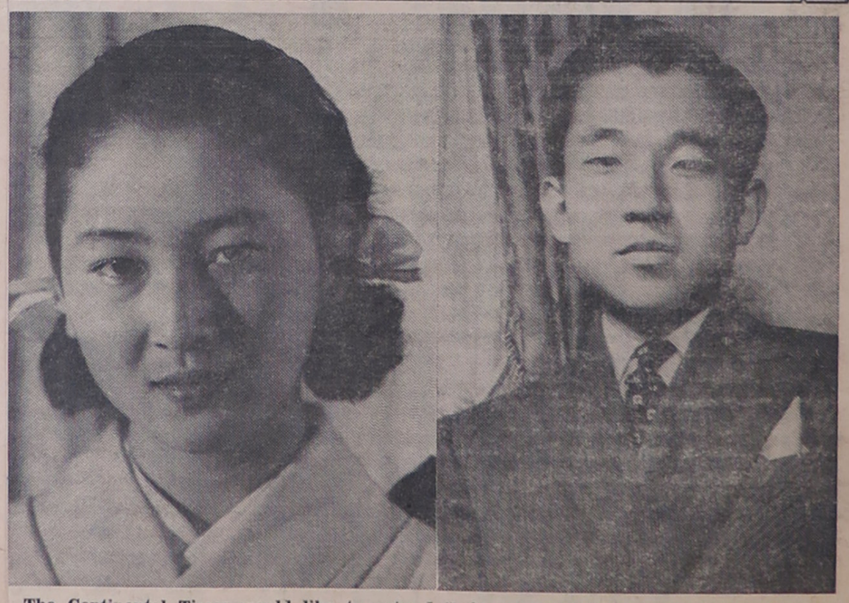
The next Toronto JCCA executive meeting will be held April 1st, at 415 Spadina Ave. (second floor), beginning 8:00 P.M. sharp. It was decided to conclude all meetings promptly at 10:30 P.M. with the instalation of the new executive.



—photo by Jack Hemmy

Toronto JCCA executive officers for 1959 are, (with the exception of Vic Kitagawa) from left to right: Miss Nancy Takeuchi, Miss Denise Nishimura, Mrs. Liz Pearce and Miss Agnes Shimono. Back row: Jerry Kutsukake, George Takahashi, Stan Hiraki, T. Umezuki (Isseibu representative), Mits Sumiya and Ace Shirakawa.

TORONTO 2, ONTARIO Authorized as second class mail, Post Office Department, Ottawa.



The Continental Times would like to extend their congratulations to the Crown Prince Akihito on the occasion of his marriage to Miss Michiko Shoda on this 10th day of April, 1959.

FOLDER NO. 8-14

雑　録

さくらの話(二)

（新潟林業氏述）

梅　月　生

桜は寒の寒冷・凍結に弱くては、これが防止に適当な覆屋を掛ずる必要がある。

桜に適ずる土質

桜を植るを理想的な地は「盛り上げ土」というて有機質と腐植質に富む乾燥地が最も適している。粘重土、砂石こう地、低湿地は不適当で、潮風の強いところ、風の多い所もよくない。もの植物と同じく酸性土壌はよろしくない。

桜の特質と植付

土質の不良は十分な客土改良も出来、又窪土ずも後に植ても成育が早く樹勢もよいがこと花が咲き出すと生長が止まる。

植付地はなるべく乾燥を嫌う。小枝はいずれは使わぬ様合は銀利ないし、ノコギリで切り跡を当たいい。ノコ刀で切り跡のロその他の傷には油の切り方で切り跡を当たいい。ノコギリで切り跡を当たいい。ノコ刀

ニューカナデアン
The New Canadian
479 Queen St. W.,
Toronto 2-B, Ont.
Phone EM. 6-5005

毎週水・土二回發行
購讀料金 半年三弗五十仙 一年六弗(前拂)
カナダ・トロント市 ニューカナデアン社

【オタワ發】シーシーエフ黨 値上げし、また酒類も十二

増税にかこつけ
不法なる値上げ

し、寫眞もそえて出せば二週ぐらいで發給されるが料金は五弗。

記念切手 百七十組

雜錄

さくらの話(三)

（新堀林榮氏述）

梅月生

植付後の管理

植付後の手入れとして必要なことは施肥、乾燥時の灌水、風害時の保護、寒冷期間中の保護、病虫害の防除と人畜の害に對する處置等である。

櫻は剪定する必要はないが、幹から出る徒長枝と根元から萠生するヒコバエは除去せねばならない。又病枝や枯枝は切取つて、大きい切口には防腐劑等で手當をする必要がある。雨がなく炎天續きで葉がしおれる樣になれば給水してやる。根元にストローなどを敷いてもよい。

五年間は毎年するがよい。櫻の肥料は十質にもよるがチッソとリンサン質の十分腐熟した有機肥料であれば何んでも差支えない。近年日本においては樹木肥料として肥料の三要素を含有した固形肥料が賣り出され、苗圃、庭木、盆栽等に利用されているがカナダにもそうしたものがあるだろう。施肥の方法は一般果樹その他の樹木に準じてよい。

配樹計畫

櫻の配樹方法を大別すると「霞か雲か」の壯觀は群植の櫻であり、「花のトンネル」又は大きな區域の内の限定された一地域などに用いる「寄植」、「並木式」植え方（異種の混するのを避けること）、點景植などの方法もある。

『七、五、三』式に

配樹に當つて大体の必要本數を算出するには、植栽すべき地域の面積を一株の生長限界（十五呎——二十呎）の占有面積を以て除しそれを所要本數とするか、或は反對に苗本數を以て除し、一株の占有面積を算出すればよい。

最も大切なことは、木と木の間隔を均等にせず、苗木の大きさ、形等に順應し疎密兩樣に適當に配列して植栽することである。出來るだけ自然的に植栽すること。

接木

櫻の肥料は十質にもよるがチッソとリンサン質の十分腐熟した有機肥料であれば何んでも差支えない。近年日本においては樹木肥料として肥料の三要素を含有した固形肥料が賣り出され、苗圃、庭木、盆栽等に利用されているがカナダにもそうしたものがあるだろう。施肥の方法は一般果樹その他の樹木に準じてよい。

配樹計畫

櫻の配樹方法を大別すると「霞か雲か」の壯觀は群植の櫻であり、「花のトンネル」又は大きな區域の内の限定された一地域などに用いる「寄植」、「並木式」植え方（異種の混するのを避けること）、點景植などの方法もある。

『七、五、三』式に

配樹に當つて大体の必要本數を算出するには、植栽すべき地域の面積を一株の生長限界（十五呎——二十呎）の占有面積を以て除しそれを所要本數とするか、或は反對に苗本數を以て除し、一株の占有面積を算出すればよい。

最も大切なことは、木と木の間隔を均等にせず、苗木の大きさ、形等に順應し疎密兩樣に適當に配列して植栽することである。出來るだけ自然的に植栽すること。

○トロントではどういう狀態になるか解らないが、ビーシー大學内で、日本の桐の木が美事に育つているのを見た。また日本の『はなしようぶ』はぜひともカナダに廣めたいと思う。

◇

尚、新堀林榮課長は四月一日の櫻贈呈式を終えてからニューヨークを經て桑港に向い、同地に四日間滯在して七日出發九日羽田空港に安着した知らせと共に『皆樣の御協力を得て使命を果ざした葉がホロリと落ちたら三日間天氣がよいこと』を必要とされている。芽つぎやナシと同じで芽つぎも出來る。その時期は夏の終りとされて居り『接いでから一週間位で芽が出來る。接木の方法はリンゴ

○接木の台木には山櫻系統のマザクラが最上でありそれは挿木（さしき）によつても幾らでも殖やすことが出來る。

○トロントではどういう狀態になるか解らないが、ビーシー大學内で、日本の桐の木が美事に育つているのを見た。また日本の『はなしようぶ』はぜひともカナダに廣めたいと思う。

◇

尚、新堀林榮課長は四月一日の櫻贈呈式を終えてからニューヨークを經て桑港に向い、同地に四日間滯在して七日出發九日羽田空港に安着した知らせと共に『皆樣の御協力を得て使命を果ざした葉がホロリと落ちたら三日間天氣がよいこと』を必要とされている。芽つぎやナシと同じで芽つぎも出來る。その時期は夏の終りとされて居り『接いでから一週間位で芽が出來る。接木の方法はリンゴ

と御禮狀をよこされたが、山櫻の苗を持つて來られなかつたのを殊のほか殘念がつて居られ、色々お世話になつたお禮がわりに、山櫻の苗二、三百本を特別に仕立てて、何んとしてでもトロントに送りたいと出發前安齋蓮治氏に語つていた。

YAMAGA YASUTARO PAPERS
FOLDER NO. 8-14

For Aged Japanese

Nipponia Home Opened Saturday

BEAMSVILLE — Leaders of the Japanese-Canadian community in Canada joined with government representatives and local officials in a ceremony Saturday afternoon when Nipponia Home, only one of its kind in Canada, was declared officially open by Lawrence Crawford, of the Ontario Department of Public Welfare.

The ceremony took place in front of the main entrance to the home, built last year for senior Japanese-Canadian citizens.

Rev. T. Komiyama, of Hamilton, was chairman of the program. A prayer of dedication was offered by Rev. Dr. K. Shimizu, of Toronto. Greetings were brought by Edward Ide, president of the National Japanese Canadian Citizens' Association; Reeve Delby J. Bucknall of the Township of Clinton, Hon. Charles Daley, Minister of Labor for Ontario; John Smith, MP for Lincoln; Matae Endo, consul of Japan in Toronto, and a representative of Toru Hagiwara, Japanese ambassador to Canada.

Mr. Crawford, representing Hon. Louis Cecile, paid tribute to the work of Yasutaro Yamaga, superintendent and secretary-treasurer of the board of directors of the home.

The province was happy to cooperate with various ethnic groups who wished to establish such homes, Mr. Crawford said. He added $51,000 had been contributed by Ontario.

Ontario was giving leadership in establishing such homes for the aged throughout the province.

Mr. Yamaga told of the efforts made to finance the home. A successful financial campaign among Japanese-Canadians had raised $17,000, the Atkinson Charitable Foundation had donated $1,000 and various other sums had been received in adition to the provincial grant.

He told of the need for the home. Elderly Japanese were likened to a mother hen who hatched a brood of duck eggs. After the "children" were old enough, they took to the water, leaving the mother confused and unable to understand them.

Aged Japanese, many of whom could not speak English, did not understand their grandchildren who were Canadians and who lived as do other canadians. They longed for congenial company, a taste of food typical of their homeland, and people to converse with in their native tongue. The home provided this.

The official opening was a personal triumph for him, Mr. Komiyama said.

Rev. Dr. G. Victor Levan, of Trinity United Church, Beamsville, pronounced the benediction.

Beamsville Citizens' Band, under the baton of John Tennant, provided music.

Refreshments, including many Japanese dishes, were enjoyed by the guests. Those of non-Japanese origin sampled many new taste treats. Some even tackled chopsticks to lift the cakes and rice dishes.

FOLDER NO. 8-14



雜錄

ホーム開館

梅月生

山家安太郎氏が、餘生と私財のすべてを打ち込んで創意、オンタリオ州政府の良き理解と多くの人々の快よき支持を得て出來上つた日系老年者の共同住家＝ニツポニア・ホームの開館式が四月十八日に行われた。地元のビームスビルその他の町民をはじめ、ロンドン、セントカサリン、ハミルトンおよびその近郊、トロント方面からの參加者二百五十餘名が、晴れやかな顔つきで祝辭の聲を放ちながら喜び合つた。

開館式で祝辭を述べた人々は全加市協の井手會長、地元クリントンのバビノー町長、同地區選出のオンタリオ州政府のチャールス・デーレー勞働相、オタワ議會のジョン・スミス代議士、遠藤領事、萩原大使（山戸徹書記官が代理）諸氏であつたが、何れの人々も、先輩者に老後の不安なき生活を與えなければならぬことを強調して、ニッポニア・ホームがその一翼を擔うものであることを指摘し、その重要性と意義を述べ、特にその創始者である山家氏の献身的努力に敬意を表し、また入寮者が今後樂しく老後を過されるようにと祈つたのであつた。

ホームの前庭における式はビームスビル・バンドの奏樂で始まり、理事長の小宮山牧師が司會して、清水博士の開會の祈禱、前理事と現理事その他の來賓を紹介、祝辭、オンタリオ州政府のシーソル厚生相に代つてローレンス・クロフォード厚生官の公式開館、山家氏の謝辭、レーヴェン牧師の祝禱で式を閉じ、ハミルトン市協が用意した茶菓がサーヴされた。

十年前から抱いていた理想の夢を實現し得た山家さんの喜びは殊のほかであつたろう。すでに老年恩給を受けている彼ではあるが、アップルのようなレッド・チークはかがやいて、まだまだ若い。祝辭の中で人々が述べていたように山家さんが、いつまでも元氣で、ホームのために良い仕事を續けられるように念願するものである。

YAMAGA YASUTARO PAPERS
FOLDER NO. 8-14

N CANADIAN

t Organ for Canadians of Japanese Origin

VEDNESDAY, APRIL 22, 1959. TORONTO, ONT.

Realization Of 10 Year Dream In Opening Of Nipponia Home



四月十八日のニッポニア ホーム開舘式で

—photo by JACK HEMMY

BEAMSVILLE, Ont.—A day to remember arrived for Mr. Yasutaro Yamaga Saturday, April 18th, when his dream of the past 10 years became a reality with the official opening of the Nipponia Home for aged Japanese Canadians.

The ceremony in which some 250 persons from London, St. Catherines, Hamilton, Toronto and local Occidental residents attended, Mr. Yamaga was paid tribute not only for his time and effort, but also his fortune to realize this humanitarian project.

In any community there is a need to help the aged and to provide them with security and comfort. It was with this purpose in mind that Mr. Yamaga initiated the building of the Nipponia Home.

Lawrence Crawford representing Welfare Minister Cecile, who officially declared the Home open, told the gathering that this venture may start a trend in care for the aged throughout Canada. He said the provincial government will give a 50 per cent grant to any organizations which can raise the other half for similiar projects. Mr. Crawford specializes in the care and welfare of the aging.

The Nipponia Home was incorporated under Letters Patent Sept. 30, 1957. The application for the incorporation was made by a provisional Board of Directors consisting of Rev. T. Komiyama of Hamilton, Ontario, Mrs. T. Uyehara of Edmonton, Alberta, and Messrs. Y. Yamaga and T. Namba, both of Hamilton and Mr. T. Umezuki of Toronto.

The Board then appointed George Yamazaki of the architectural firm of Henry Fliess of Toronto to draw up the plans for the Home. Construction was started on the revised plan to cut costs by the Robin Stewart Construction Company of St. Catherines, Ontario, on July 2, 1958. The Home was completely ready for occupation by December 15, 1958.

In view of the increased cost of construction, the Board of Directors decided to adopt a membership system and also to make an appeal to the Japanese Canadian residents in Ontario for donations to help defray the estimated shortage of $12,000 from the $80,045 cost. The Board mailed 1,800 letters of appeal to the residents of Toronto. Friends in other Ontario centres were also approached.

The appeal brought a magnificent response so that within two months the total contributions exceeded the amount of the shortage. By the time the [illegible] completed the contributions amounted to $17,662.60. The Atkinson Charitable Foundation also made a contribution of $1,000 toward the cost of furnishings.

With the funds that came in, it was possible to use better materials in the construction as well as building an "ofuro" (Japanese style bath.)

The Board of Directors has decided to inscribe the names and gifts of the 917 donors, including all life members, in a "Memorial Book."

At present, there are four residents in the Home. All are enjoying the congenial atmosphere, and Japanese meals. It is hoped that the Home will serve more Japanese Canadian Senior Citizens in the future.

In the arms of the eldest resident of the Nipponia Home Mr. Ichizo Higo, is Shirley Komiyama, 3-year-old daughter of Rev. Komiyama of Hamilton, Ontario at the opening ceremony April 18th. The group picture depicts from left to right, John Smith, M.P. for Lincoln, Hon. Chas. Daley, Member of Legislative Assembly, Rev. T. Komiyama, Chairman of Board of Directors for Nipponia Home, Lawrence Crawford, Public Welfare Dept. for Ontario, and Y. Yamaga.

とで五ヵ月間の收支は殆ど同額で、在寮者少數にも拘らずホームは健全なる運營成績を示している。最近三名の入寮申込みを承認したので在寮者は合計十一名となった。

七十五個宛支拂い、その七五パーセントはウエルフェアから補助してくれるというようにドクターへの支拂いが簡單になつた。又ホーム在住者で『ミーンスことに關しては、かかる噂

△七月五日のトロント市協ピクニックと六月二十八日のハミルトン日系ピクニックに在寮者が招待をうけたことを感謝。

『入寮者申込と同時に二百弗寄附を要求される』との噂が、どこからともなく流れ、それに迷わされている人々もあるとの報告があつた

木下軍三（ハ市）デーブ須見（セントカサリン）高田順三 無名氏 ▲五弗宛 森助五郎 小澤正作 池田照子 宮本たえ 平松豊志（ハ市）山本米藏（仝）内田務 森研三 倉良夫人

TORONTO, ONT.



photo by JACK HEMMY

Nipponia Home Mr.
aughter of Rev. Ko-
eremony April 18th.
ohn Smith, M.P. for
e Assembly, Rev. T.
or Nipponia Home,
or Ontario, and Y.

the contributions
$17,662.60. The
ritable Foundation
a contribution of
the cost of furnish-

unds that came in,
ble to use better
the construction as
ng an "ofuro" (Ja-
bath.)
of Directors has de-
ibe the names and
7 donors, including
ers, in a "Memorial

there are four re-
Home. All are en-
genial atmosphere,
meals. It is hoped
e will serve more
adian Senior Citi-
ture.

Saturday, June 13, 1959 TH

健全な運営續く

收支償うニツポニア・ホーム

【ビームスビル發】ニツポニア・ホーム理事會は六月六日午后ホームの食堂に於てルフエア規則で、開かれ、今年一月から五月末までのホーム運營に關し詳細な報告があつたが、會計報告によると入寮者のペンションと州政府の補助金とで五カ月間の收支は殆ど同額で、在寮者少數にも拘らずホームは健全なる運營成績を示している。最近三名の入寮申込みを承認したので在寮者は合計十一名となる。尚五月一日から改正されたオンタリオ州のウエルフエア規則で、

『老人ホーム在寮者は誰れでもメデカル・カードの必要なくドクターのサーヴイスを受けられる』（ニツポニアホームはペンド一つに對し毎月一弗七十五仙宛支拂い、その七五パーセントはウエルフエアから補助してくれる）

というようにドクターへの支拂いが簡單になつた。又ホーム在住者で『ミーンステスト』をパスした者はオンタリオ州の病院保險も無料でサーヴイスが受けられる。

▲某團体の委員會の席上『ニツポニア・ホームに入るためには五百弗寄附せねばならぬ』との流言が日系人間に飛んでいるが事實か、との質問が出たことが一理事から報告され、

▲ハミルトン市に於ても『入寮者申込と同時に二百弗寄附を要求される』との噂が、どこからともなく流れ、それに迷わされている人々もあるとの報告があつたことに關しては、かかる噂は全然根據のない造り事である事を理事會の名を以て發表する決議を通過した。

その他の決定事項は次の通りで、閉會後ホームの菜園で出來た野菜料理で夕食を共にして散會した。

△普通公共團体の慣習に從いニツポニア・ホームの責任者に五千弗のボンドを附する。

△七月五日のトロント市協ピクニックと六月二十八日のハミルトン日系ピクニックに在寮者が招待をうけたことを感謝。

唄と踊りとごちそう

三葉會がホーム入寮者慰安

ビームスヴイルのニツポニア・ホームは去る日曜ほど風變りな一日を味わつたことはない。訪問者の數といい、おみやげといい異常なもの。入寮者とスタフにとつて實に樂しい一日であつた。ト市から遙々三葉會々員と有志四十餘名が、それぞれごちそうをどつさり携えてホームをバスで訪れ、得意の唄と踊りを披露し、あるいは劍舞まで紹介とあつて入寮者は大喜び。三葉會の責任者田中さんは『こんなに喜んで貰つて本當によかつた』と至極滿悅であつた。主なる慰安プログラムをあげると

『おてもやん』＝藤原『赤垣源藏德利の別れ』＝田中『おしどり道中』＝藤原、太田黑『男涙の子守唄』＝南郷『上州からす』近藤、馬場『安來節』＝土井、平野『劍舞』＝辻『義太夫』＝西本『江州音頭』＝鹿谷

であつた。

●寄付感謝　その後次の團体と諸氏から御寄付を頂きましたことを深謝申上ますニツポニアホーム

▲百弗宛——法人濟生會小林豊　ト市聖公會二世グループ　ウイニペッグ市協▲五十弗宛——ミス・スコット　平野芳太郎（息女追悼記念）

▲廿五弗宛——アート荒井（母堂追悼記念）　カムループス　阪木哲夫　仝　エド高橋

▲廿弗宛（ウ市）桑田久夫　千葉松子　吉本富士夫　無名氏

▲十五弗宛　ビビアン　ワイ本村

▲十弗宛——大河原エツ　桂茂夫　宮崎治郎兵衛　岡田良一　ローイ曾根　ケン沓掛（エロラ）三宮夫妻　平家宗春　吉村義平　平山ソデ　松井新藏　池野政義　テー大井　松尾千代治　中津ハツ　木下軍三（ハ市）デーブ須見（セントカサリン）高田順三　無名氏

▲五弗宛——森助五郎　小澤正作　池田照子　宮本たえ　平松豊志（仝）　内田務　森研三　曾良夫人

●招待　ニツポニアホーム入寮者は七月五日のト市々協、六月廿八日のハ市日系各野遊會に招待されている由。

大陸

FOLDER NO. 8-14

Vancouver Missionary Remembered

(The following appreciation was expressed by Rev. K. Shimizu, M.A., D.D., in the Toronto Japanese United Church bulletin, "The Shepherd's Call.")

MISS HENRIETTA DEWOLFE

Miss Henrietta DeWolfe, one of the most memorable figures in the history of the United Church missions among the Japanese Canadians, passed away peacefully on Monday morning, September 7th, in Vancouver, leaving Miss Carolyn, her beloved sister to mourn her loss.

Miss Henrietta DeWolfe was born in Halifax, and after receiving her education and training there, went to Japan, where she served for twelve years, from 1904 to 1916. She was engaged in organizing and supervising kindergartens in Tokyo, Shizuoka and other places. She also trained teachers and Bible women, while at the same time conducting evangelistic work.

The writer has no official records of her services in Canada, but he remembers having first met her in Vancouver in 1917. She assisted him in the Night School he was then superintending, teaching English to the new immigrants from Japan. When fn 1918, soon after the close of the First World War, an epidemic called "Spanish Flu" broke out and a temporary hospital was set up for the Japanese Canadians by the citizens headed by the late Rev. Y. Akugawa. Miss DeWolfe was one of the first to volunteer as a dietician.

Miss DeWolfe was the superintendent of the W.M.S. Kindergarten in Vancouver Japanese United Church for many years. She also had the oversight of the Baby Band, Mission Band, Saturday Club, Explorers and C.G.I.T. girls' groups, where she gave those young girls a thorough Christian training. At one time, her Kindergarten was overflowing with 125 children, and had to refuse some applicants due to the lack of accommodations. She also headed the Beginners' Department of the S.S.

Miss DeWolfe gave an efficient leadership to the women of the Church. She organized the mothers of the Kindergarten children into an active group, and taught its members not only in the care of children but also in the management of their homes. She was also a powerful influence in the W.M.S. and the Women's Association.

She was an energetic worker, courageous in the work of the Master. She went into the families, both Christian and non-Christian alike, and gave strong witness to the Gospel of Christ.

Today, there are literary thousands of young men and women, her former kindergarten children, now scattered all over this broad land, who would gratefully remember her as their revered teacher, influential leader and true Christian friend.

ニツポニア・ホーム 寄附感謝

其後次の諸氏から御寄附を頂きましたことを深謝申上ます。

△百弗（トロント市）玉置房松
△六十弗（日本庭園へ）山崎リドバス
△五十弗宛 長谷川ワカ
△卅弗（息昇記念）上出邦藏
△廿五弗 中澤義雄
△廿弗宛 高橋壽夫
梅窪 島田信一
秋山實
△十五弗 吉木寛 中本ウラジム河野 二階堂キミ 兒玉末吉 玉根俊大西夫妻 辻龍太郎 料治一太（モントリオール）中渡市（オルダショット）及川ケー
△十弗宛 ハ市佛教婦人會（オルダショット）管谷夫人（トロント市）和氣ケー 中村ゴードン 林シゲ（ホープ）角田夫妻（ウイニペッグ）奥夫人

1/23/60

年の始めに思う

オ州 のぞみ生

近頃の日本雑誌などによく「楢山節考」という文字が出ている。それは一昨年ヴェニスの映画祭においてグランプリを獲得した秀逸のフイルムであつて、昨年夏、ストラットフォードでも「リキシャマン」と共に観賞されたのであつた。つまりこの「楢山節考」は昔からいい傳えられているうば捨山の話である。

朝日新聞「天聲人語」の執筆者荒垣秀雄氏は「主婦の友」に「としよりの日に思う」と題して、日本にはまだ老年者に對して國家的になんらの保護もされていないことを痛感している。その點、カナダは行き届いて有難い國である。今更、うば捨山の話を繰り返すまでもないが、靜かにあちこちを見渡すとき、「今様うば捨山」はないか、と思うのである。

これは日系人に限らず、白人社會にもあるらしく、その原因としては一世と二世の開き——教育の程度、環境の相違等、數えれば多種多様である。何れに責任があるか、これも千差万別といおう。

ある日のことバスを待つていると、白人老婆が來ていきなり「どこかルームはないでしようか」と尋ねられ、話しをすすめてみると「いま自分は娘の家にいるが、つらくて出たいと思つている」という。世間には息子ばかり持つている人は娘さえあれば老後は心おきなく住めるものと思い込んでいる人もあろうが、果して息子の家がよいのか、娘の家がよいのか、何れともわからなくなる。

ところが、ここに珍らしい話がある。先頃、久しぶりに訪れた老婦人の家が、前とは見違えるようになつているので驚いていると、最近、甥夫妻が移り住んできて、各ルームを立派にしてくれたのである。「オイバークやデパートに時を過している老人の多さ。日系老者は家にとぢこもつて無聊をかこつている人もある。こうして事實上、楢山をさまよつている老いたる人々を思う時、これらの淋しい先きの短かい人々の憩い家がもつともつと與えられることが急務ではないかと思う。第二、第三のニツポニア・ホームを切に望んでやまない。

は百姓をして餘り豊かでもないのですがネー」と、嬉し涙であつた。これを思うに、我子ならずとも、またとには財力に乏しくとも、愛の業はする心さえあれば出來得るという實證なのである。

世間には住み慣れた家を賣つて、息子夫妻の方に移つてみれば、事毎にツラブル多く歎いている老人がいるし、またすべての不動産を若夫妻の名儀に切り替えて今更どうにもならぬ破目に至つている人もいるなど枚擧すれば數限りはない。

FOLDER NO. 8-14

Nipponia Home Proves Beneficial

BEAMSVILLE, Ont. — The Director's meeting of the Nipponia Home in Beamsville, Ontario was held on October 24th at the Home. Members who attended were Rev. T. Komiyama, Y. Yamaga, M. Sano, S. Utsunomiya, R. Miura, Mrs. H. Shimizu, Mrs. F. H. Hayashi and Mits Sumiya.

Superintendent Yamaga reported to the committee stating that 14 persons were admited to the Home for residency since its first opening with 2 persons since transferred to a local hospital, 1 to a nursing home and another elsewhere.

At present, the Home is catering to 5 male and 5 female residents of whom two are bed cases transferred from Hamilton Hospital and another from the Linhaven Home, St. Catherines, because of the language barrier.

These bed cases are rendered special care, room service and daily wheel chair outings by Mrs. Ishii who is assisted by Mrs. Hasegawa and Mrs. Yamaga. An apprentice nurse was also acquired free of charge for three times a week for sponge bathing during the summer months.

The printed financial report which followed indicated for a 6-month period (January-June). In it, Nipponia Home is said to be in a healthy financial position. Following brief discussion, the report was approved by members present.

Owing to the fact that the superintendent uses his privately-owned automobile for Home business without expenses, it was moved by 8-select committee that 10 cents per mile be paid retroactive to the date when a new bus was purchased.

The 1960 General Meeting, in the case that circumstances might prevent a meeting of directors before the end of the year, it was approved that January 30th, 1960 at Nipponia Home beginning 2:30 p.m., would be the date for the annual general meeting. It would be here that nominations for candidates will be received by the secretary for directors of the ensuing year.

Mr. Yamaga proposed that Mrs. Ishii, who is rendering a responsible service of nursing two bed cases, be payed $25.00 a month with free board. It was unanimously carried by the directors.

Recently too, the Home was given a Hi-Fi set by the Toronto Nisei Women's Club. The Mitsubakai, Toronto, performed a shibai for the entertainment of Home residents and asked for small donations from visitors to aid financially. Local farmers nearby, it was learned, are extending gifts of fruit, vegetables as well as baked goods to Home residents.

ニツポニア・ホーム寄附感謝

其後次の諸氏から御寄附を頂きましたことを深謝申上ます。

△百弗（トロ市）玉置房松
△六十弗（日本庭園へ）山崎リドバス
△五十弗宛（息昇記念）長谷川ワカ
△卅弗 上出邦藏
△廿五弗 ミス・セツ山岡
中澤義雄

1/23/60

年の始めに思う

オ州 のぞみ生

近頃の日本雑誌などによく「楢山節考」という文字が出ている。それは一昨年ヴェニスの映画祭において選ばれた秀逸のフィルムであつて、昨年夏、ストラットフォードでも「リキシャマン」と共に観賞されたのである。

今更、うば捨山の話を繰り返すまでもないが、静かにあちこちを見渡すとき、「今様うば捨山」はないか、と思うのである。

これは日系人に限らず、白人社会にもあるらしく、

が、つらくて出たいと思つている」という。世間にはないのですがネー」と、嬉しい涙であつた。これを思うに、我子ならずとも、また娘さえあれば老後は心おきなく住めるものと思い込んでいる人もあろうが、果して愛の業はする心さえあれば

は百姓をして餘り豊かでも

息子ばかり持つている人は

たとは財力に乏しくとも、

バークやデパートに時を過している老人の多さ。日系老者は家にとぢこもつて無聊をかこつている人もある。こうして事實上、楢山をさまよつている老いたる

FOLDER NO. 8-14

THE NEW CANADIAN — Wednesday, September 23, 1959.

山家さんのこと

（一）

福島秀勇

三年前に山家安太郎氏がビーシー州からオンタリオ州へ移つて、老人ホームの問題を持ち出して以來、山家氏自身の人となりが人々の話題にのぼり、同氏の過去までが云々されて、或は讃辭又は惡口ともなつて、それが老人ホーム建設の上にも反映した形であつた。

一体、山家氏とはどんな人か、又『彼の過去』とはどういうことなのか？ それを説明する前に、結論を先に言うならば、彼は何時の時代にも人より一歩先んじていて、良いことを提唱し實行して、人から嫉まれ惡口され、世間から非難されて來た人である。それがために味方も出來た代りに敵も出來た。ニッポニア・ホームの問題もその一例で彼が老人ホームのことを言い出し實行しなかつたら、共鳴者もない代りに惡口も非難もなかつたであろう。彼の一生涯は、殆んど社會改善と進歩への鬪爭記であり、惡口と非難される事の連續であつたとも言える。

山家安太郎氏が戰前永らく居住した農村ヘネーに、私も一九一九年から二五年まで山家氏の隣りに土地を持ち主に山家氏の宅に起居していたことがあり、總移動當時もタシメで共に居たことがあるので、私の知つている範圍において彼の過去を描いてみよう。

一九二〇年の頃、エー・シー・ハンプトンという人がヘネーの日本人農會ホールを借りて、日曜日毎に日白人の子供七八十人位を集めてサンデー・スクールを開いていた。そこはコーナー・ミッションとも言われて、その中に、二十歳前後の『定着農夫』と呼ばれた日本人靑年達のためにバイブル・クラスもあつて、山家氏はミセス吉野とともにサンデー・スクールの先生としてハンプトン氏の片腕となつて奉仕し、傍らバイブル・クラスの通譯もしていたので、或る日のこと『自分自身がクリスチャンでもないのに、何故サンデー・スクールの先生をしているのですか』と尋ねたら、山家氏は『白人でさえ日本人の子供のために一生懸命になつていてくれるのに、日本人である僕が知らん顏して居られるか』と答えた。

私が山家氏を知つた初めから、彼はこんな變り者であつて、後年彼がバイブルの感化を受けてクリスチャンとなつたのは當然の結果と言えよう。後で知つた事であるが、このサンデー・スクールは『同化は宗敎から』の信念から、その二年前にウイリアム・ホール氏と山家氏によつて創設されたものだつた。

Saturday, September 26, 1959.

山家さんのこと

（二）

福島秀勇

その頃、良い苺を作るには古い畑ではダメだというので、ヘネーの日本人は山林を開墾して苺畑としていたものである。白人から見れば、日本人が山を開いてヘネー村を立派な農園地としてくれる事は嬉しいけれども、自分たちが聖日として仕事を休み教會に集まつて靜かに禮拜しているとき日本人がサンデーもハラデーもおかまいなしに、あちらでもドカーン、こちらでもドカーンとパウダーをかけて、まるで戰場のような光景を呈していたことは彼等にしては堪えられないことであつたであろう。『今日もまたジャップが働いている』と、あちらでもこちらでも、ささやくようになつた。

この不穩な情勢を感知した山家氏は、これは一大事と『サンデーに働く事は遠慮してくれ』と日本人間に說き廻つたが、『自分が自分の畑で働くのが何故惡いか』と逆襲される始末。農會の役員會に提案したが、そこでも一笑されて相手にされなかつた。その時代の日本人としては無理のないことで、サンデーにソーミル働きを休むことは知つていても、自分が自分の畑で働くのが何故惡いかは合點の行かない事であつたのである。こんなわけで、彼は『ケトーかぶれ』だと村中での嫌われ者であつた。

然し、それにもこりずに彼は法律書を調べてみたらサンデーに働く事が違法である事がはつきり判つたし收穫時には例外のある事を知つたので、今度は前よりももつと確信と熱心さをもつて、排斥の種子を自分達が知らず知らずの中にまいている事、カナダの法律に從うべきである事等を、夜毎に說き廻り、農會の方にも盛んに呼びかけた。數年後には『今日もパウダーをかけたいが、山家の奴がウルサイから』と多少は遠慮するようになつた。

しかしその日本人達も何時までも頑迷ではなかつたそれと話がわかれば皆善良な人達で、百パーセントの協力を示すようになり、遂に農會では『サンデーにパウダーをかけない事、トランク・ロード及びその他の白人の目につく處で大びつに働かない事、どうしても働かねばならない時は家の裏の方でこつそり音のしない樣に仕事をするように』と、役員會で決議し、村中に觸れ廻すまでになつた。これは一九二四年頃の農會の記錄にある筈である。

THE NEW CANADIAN

長さんと仰が
氏はそれまで
あつて、矢野
、山家安太郎
上門下の三羽
とか言われて
して來た親し
たが、その時
まだまだ改
もあり、資本
もあつたので
不平もあつた
ものには卷か
に。

しつとして居られなかつた山家氏は農會改善運動に乘り出したものである。こんな事をされては一騷動起るのは當り前であつてヘネーでもその例にもれず、村中は井上派と山家派とに分れてしのぎをけずつた。共鳴者も味方も出來た代りに敵も出來て、今日の言葉でいうならテンヤワンヤの騷ぎとなつた。此の時代の兩方の立役者が未だカナダ中に健在であるが故に、この記事はこれ以上進める事は遠慮するが、と

とき、月々慰問品や生活費を援助したのは、その昔、井上氏に追從して戰つた人たちではなくて、恩人に反抗したと非難された山家氏その人であつたのである。『あの時、井上さんにたてついたのは辛かつたが、苺農者一般のためには止むを得ない事であつた』と後年山家氏は一友人にもらした。

その時代のヘネーの苺農者は立派な苺は作る事は出來ても販賣の知識がなかつたので、商人からよいカモにされていた。一年に一度しか收入のない百姓達は、せつかく立派な苺は作つたものの値段が安いために諸支出を差引かれた總決算はゼロ。次年度の收獲までの一年間の生活費は來年の收獲を賣る約束で商人から借りる。そこにつけこまれて又來年の收獲は安く買われる。こんな調子で百姓達は働けど働けど貧乏から拔けきる事は出來なかつた。

山家さんのこと

（三）　福島秀勇

へネーの村長さんと仰がれた井上次郎氏はそれまで万年農會長であつて、矢野誠治、岡四郎、山家安太郎の三氏は『井上門下の三羽烏』とか子分とか言われて何もかも協調して來た親しい間柄であつたが、その時代の農會には、まだまだ改善すべき惡風もあり、資本家との腐れ縁もあつたので陸では相當な不平もあつたが、皆、長いものには卷かれろ式であつた。

この状態にじつとして居られなかつた山家氏は農會改善運動に乗り出したものである。こんな事をされては一騒動起るのは當り前であつてへネーでもその例にもれず、村中は井上派と山家派とに分れてしのぎをけずつた。共鳴者も味方も出來た代りに敵も出來て、今日の言葉でいうならテンヤワンヤの騒ぎとなつた。此の時代の両方の立役者が未だカナダ中に健在であるが故に、この記事はこれ以上進める事は遠慮するが、とにもかくにも、その後のへネー農會は曲は直となつて健實な發展の一路をたどつて來たのは事實である。はからずも山家氏のこの改善運動が、恩人井上氏に反抗する事となつて『恩を仇で返す山家』と非難された。しかし後年井上氏の家族が神戸に不遇な状態にあつたとき、月々慰問品や生活費を援助したのは、その昔、井上氏に追從して戰つた人たちではなくて、恩人に反抗したと非難された山家氏その人であつたのである。『あの時、井上さんにたてついたのは辛かつたが、苺農者一般のためには止むを得ない事であつた』と後年山家氏は一友人にもらした。

その時代のへネーの苺農者は立派な苺は作る事は出來ても販賣の知識がなかつたので、商人からよいカモにされていた。一年に一度しか收入のない百姓達は、せつかく立派な苺は作つたものの値段が安いために諸支出を差引かれた總決算はゼロ。次年度の收穫までの一年間の生活費は來年の收穫を賣る約束で商人から借りる。そこにつけこまれて又來年の收穫は安く買われる。こんな調子で百姓達は働けど働けど貧乏から抜けきる事は出來なかつた。

山家さんのこと

（四）　福島秀勇

この情態に早くもめざめた山家氏は、共同販賣組合運動を研究し出した。そして夜に晝をついで組合の必要を説き回り、組合組織のために東奔西走、遂に少數の共鳴者を得て、メープルリッジ共同販賣組合を組織するところまでこぎつけたが、事はそんなに簡單ではなかつた。今まで日系人百姓を食い物にしていて『仲買いの神様』とも『たぬき』とも言われていたギランド氏の支配する『日自合資會社』という仲買人會社と正面衝突する事となり、お互に反感を持つて戰いは數年續いた。

山家氏にそんなことをされては、今まで通りギランド氏のおこぼれによつて涙ほどのウマイ汁が吸えなくなる階級もあれば、その子分も居り、又、中には山家のやる事なら何でもかでも反對しなければ虫がおさまらない連中もいて、惡らつな防害運動をするやら、山家に對抗するために他に組合を組織するやらで、山家氏が組合を組織したことによつて、この時も村中は三派に分れ、これまたテンヤワンヤの大旋風が卷き起つた。産みの苦しみである。この時も彼は妨害、非難、攻撃等を眞正面に受けてよく奮闘し十五年後の總移動當時には組合員日白二百數十名、資本金約十万弗、利益配當毎年數千弗となるまでに發展していた。それとともに賛成者も反對者も各派おしなべて、彼の組合運動そのものによつて直接大いなる恩惠を受け、利益を得て、各自昔日にまさる發展をしたのである。

彼に『米加に於ける協同販賣と市場統制』という本と『民主々義勞働運動』という二著があるが、前者は同胞の組合運動普及の目的で書かれたもので、カナダに於て發賣されたので讀んでいる人も多いと思うが、後者は日本で發賣されたのでカナダ同胞には餘りよく知られていないようだ。

…こと

…島　秀　勇

ドカーン、こちらで…ーンとパウダーをか…まるで戰場のようだ…を呈していたことは彼…しては堪えられないこ…とであろう。『今日…

…慮してくれ』と日本人間に説き廻つたが、『自分が自分の畑で働くのが何故惡いか』と逆襲される始末。農會の役員會に提案したが、そこでも一笑されて相手にされなかつた。その時代の日本人としては無理のないことで、サンデーにツーミル働きを休むことは知つても、自分が自分の畑で…

彼は法律書を調べてみたらサンデーに働く事が違法である事がはつきり判つたし收穫時には例外のある事を知つたので、今度は前よりももつと確信と熱心さをもつて、排斥の種子を自分達が知らず知らずの中にまいている事、カナダの法律に從うべきである事等を、夜毎に説き廻り、農會の方に…呼びかけた。數年…

…時までも頑迷ではなかつた。それと話がわかれば皆善良な人達で、百パーセントの協力を示すようになり、遂に農會では『サンデーにバンク・ロード及びその他の白人の目につく處で大びつらに働かない事、トラ…に働かねばならない時は家の裏の方でこつそり音のしない様に仕事をするように』…決議し、村中…

山家さんのこと

（六）

福島秀勇

どういうわけかは知る由もないが、総移動當時には彼はイの一番にヘネーから追放されてホープの十一哩道路キャンプに送られた。そこでも彼はキャンプ人員一同に呼びかけて共同購買組合を組織させた。

日本人總移動後、フレザー・ヴアレー農村の日本人の財産を賣却處分するために三人のカストデアン顧問委員というものが出來て、山家氏もその一人に任命された。

此事が發表されると『山家の奴がケトーとグルになつて日本人の土地を二束三文に賣り飛ばすのは不都合だ』という譯で、舊組合員や、移動地の團体名義で、即時辭任の勸告狀が澤山舞い込んだが、彼は『過去十五年間苦勞して州内日白苺農家の聯合販賣にまでこぎ付けた日本人農業の葬式に立會い、その最後を見屆けるのは僕の義務だ』と家族友人の止めるのを押切つて出かけた。或る日のこと私も山家氏に、顧問委員を辭任したがよいと言つたら山家氏は『日本人の財産を評價する場合、例えば一人の白人委員は五百弗と評價し他は六百弗と言う。それに對して僕は千弗と評價するその場合、合計二千百弗の三分の一、即ち七百弗のところで大概落ちついているだろう』と説明された。しかし日本人農地全部を歸還兵定着局へ賣り渡す交渉の席上先方の代表委員が、敗者に臨む勝者のような暴壓的な態度に、山家氏は論議の餘地なしと憤然辭表を提出し、ホープのロード・キャンプに歸つた。賣渡し決議は山家氏不在のまま行われたが、これ等論爭の議事錄が、後日オタワに於て賠償に關するバード調査官任命に導いた有力な資料となつた事は爭えぬ。

老人ホームの問題は、すつと前から市協その他の團体によつて研究され討議されて來たものの、時期を得ないでタナアゲされていたものである。それなのにビーシーから移つて來た山家氏が一人で騒いでいるのは賣名か、とまで疑われ、反感をさえ持たれたものであつた。だが山家氏は、ここでもひとよりは一歩先きを歩く形で、日系老人ホームの必要を主張し、遂には多くの人々の支持を得て、彼自からは『社會に儲けさして貰つた金は、全部社會に返すべきである』という建前から、老後への貯えのすべてを投げ出し、彼の社會への最後の奉仕として、最後の馬力をかけて遂にホームを完成したのである。こんどのホームについても、彼を非難する人もあつた代りに多くの共鳴者と支持者があつて、難事も美事に成就したのである。或る時山家氏は『世間では孤兒院を造るのにさえ反對する人があるのに、こんどの運動に對しては陰の非難が少しあつた位で表面上の妨害運動が少しもなかつたことは、大きな感謝でなければならない』と述懐していた。

ニクボニア・ホームは近いうちに滿員になりそうな狀況で、開館式を擧げて半年もたたない今日、早やくも增築の必要が感じられる

『此處のお客さん達一人一人の人格を尊重しながら如何にしたら皆が幸福に、愉快に暮して行けるかを考えながら、このホームを運營して行かなければならない、へたばるか仕上げるか僕の仕事は今後にある』という山家氏の健在を祈つてやまない。

（終り）

山家さんのこと

（五）

福島秀勇

一九二五年頃から、日本人苺産業の異常な發展にともない、バンクーバー島の白人農家が、加州の排日土地法と同じような法案を州議會に提出しそうな形勢が段々と濃くなつた。山家氏は市場監督官グラント氏その他の有力家を介して交渉を重ね、自らもバンクーバー島の苺産地へ出掛け、遂に日・白苺農家聯合販賣の組織に成功し、日・白均等主義に依り市場の競爭を解消したので、永年蒸し返していた排日法案を撤回させることが出來た。

この時分は私はビクトリア市に住んでいて、山家氏が來市する毎に訪問を受け『今日は州政府の誰々と面會する』とか『明日はサニッチ（晩香坡島南部の苺産地）へ行く』とか言つて、よくその時の事件の成り行きを斷片的に山家氏から聞いていたものだが、その山家氏の働きは日本語新聞の記事となつて發表されたわけでなく、殆ど世間の人には知られずに終つた。それは鈴木悦氏が勞働組合を組織して勞働會議に加盟し、排日を除いたのと殆ど同時代の事であつた。

山家氏は、村の白人社會の空氣にも常に氣をつけていて、事件を未然に防いだり、或は日白の融和のために奉仕したことは、大きな問題、小さな問題等數限りなくあるが、その大部分は人に知られないで流れ去つたものが多い。されど知る人ぞ知るで、井上次郎氏を組して『山家君が日白人間のカスガイとなつての働きは偉大な貢献である』と言わしめたほどである。彼は何か日本人間に問題があると村會へ出頭して白人に説明して諒解させ、一方白人間に問題があるときは彼が村會へ招かれて相談を受けるという有樣であつた。そうして日本人社會へ歸つては排斥のきざしは少しも見えないばかりか、小學校のメーデー祭には日本人少女がロビンソン小學校のピーテーエーの副會長に選ばれ、又ビーシー州のピーテーエー連合會の副會頭にも推されていた。これもあの時代のビーシー州では、たつた一人の日本人として特記されるべきことである。

「祖父母と孫たち」

ニツポニア・ホームでだんらん

十二月二十日(日)午后から夜にかけてニツポニア・ホームでは、トロント市内の若人たち二十六名の慰問晩餐會で温かいフンイ気がかもし出された。トロント市協ではクリスマス季節の慰問訪問プログラムに今年は同ホーム慰問を加えスキヤキ晩餐會を開催、材料一切から食器やナベ、カマまで運び込んで向うで用意し、ホーム在住者と入れ変ってテーブルにつき二世男女のクツクとお給仕で夕食を共にしたのであるが、同行者の中には二名の看護婦もいたので手足の不自由な老婦人二名はフイール・チエアにのせて食堂に伴い看護婦付添いで食べさせた。食事が終つてから同行した婦月民が二世達の真情を披露し、ホームの監督山根氏が在住者一同に代つて「これは全く孤父母たちと孫たちのリユニオンだ」と深謝を述べた。食後はバーラーで団欒パンド三名の伴奏で日本語の流行歌やクリスマス・カロルを合唱して更に温か味をそえた。

然木の名作數百點を集めて展覽會を開いた事がある。花立て、箸立て、生花筒、寫眞掛け、額ぶち等々驚くべき藝術品が陳列され、バンクーバーの大新聞が寫眞入りで大々的に讃嘆記事を載せた。作品の藝術的價値よりも「退屈しのぎ」の作者に與えた無形の利益は莫大なものであつた。その他山登り、茸がり、春のタンポポ摘みや野生ゴボー掘りなどが、戰時の不安と恐怖の氣分を和らげ、健康を保たせたことを誰がその頃考えたであろうか。

若い人々は、ただ刹那的にハーピーを樂しむけれど老後のための恒久的ハーピーを考えている人は殆どないようである。若い頃から自分の老後の慰めとなればかりでなく、社會的にも明るい好結果を與え得るものである。六十過ぎた婦人達が揃いの衣裳で踊るのを見よ、あの一人一人の、世事を忘れ切つた無邪氣な意氣の中に青春は燃え社會を明るくするのではないか。(完)

趣味の道樂

老いぬ～～ヒケツ～～

オンタリオ州 ワイ生

マカーサー將軍の座右の銘の中に次のような一節がある。

「青春は一生涯のただの一期間ではない。青春は人の精神狀態である。感情と想像の活動力、それに勇氣が常に臆病を征服して、貪ぼるように冒險を追い求める事である。誰も單に生きた年の數で老いるものではない。人は理想を捨てることによつてのみ老いる。人は信念が若いだけで若く、不安と恐怖心の量だけで老いる……」

吾々クメリック時代の移民は、五十年一日の如く重勞働を續けて來た。若い時は道樂のない働き者と世間のほめ者であつたが、老いてから道樂がないので退屈で仕方がない。孫のもりもするが、むづかると頭が痛くなる。可愛がるとスポイルすると言つて若い者にしかられる。晝は皆仕事に行くので遊びに行く所もない街を歩いても電車やカーにはねとばされそうで危くてしようがない。室に閉じこもれば氣がいらいらして眠られもせぬ。体の方々が惡くなるがドクターに見てもらつても要領を得ない病氣になる。こうした感情的疲勞と困ばいと併行して病氣が起る。

恰度、心配事と胃潰瘍の關係のように、心の寂しみと痛みが種々の形のキャンサーにも變化する事は近代醫學が証明している。何もする事のない老人は、精神的にも肉体的にも仙人のようになり易いものである。食物にしてもコックするのが面倒で、手輕なもので濟ましていると、動物質タンパクが欠乏し、關病力が弱つて精力が衰える。新鮮な野菜や果物にあるビタミン・シーが欠乏すると智腦の働きが鈍るし、ビーの欠乏は精神的機關の働きを狂わせる。腦を適度に使うことを怠らなかつたら、いわゆる老病は起らないものであると醫者は言う。

腦を適度に使うことを實行するためには『趣味の道樂』——以下ハーピーという——を勵めたいのである。何か一つでも頃は、尺八、ハモニカ、バイオリンなどやつて居た人が『年とつてからハモニカでもあるまい』といつて音樂をやめてしまう人があるが、とんでもない間違いで

魚釣、手工、細工、盆栽、造花、生花、茶の湯、俳句狂歌、短歌、寫眞、繪畫、碁、將棋、詩吟、ダンス、ゴルフその他のスポーツ何でもよい。一藝に達したらしめたもので老後まで樂しめる。下手の横好きでも結構である。

ハーピーは老いてから急に習うことは困難であり、老いては趣味が起らないのが普通であるから『若いうちから老後のために』趣味の道樂を始め何か一藝に達しておくべきである。若い人間の腦が快活に活動している間は、肉体が病氣を近づけないものである。

食物にしてもコックするのが面倒で、手輕なもので濟ましていると、動物質タンパクが欠乏し、關病力が弱つて精力が衰える。新鮮な野菜や果物にあるビタミン・シーが欠乏すると智腦の働きが鈍るし、ビーの欠乏は精神的機關の働きを狂わせる。腦を適度に使うことを怠らなかつたら、いわゆる老病は起らないものであると醫者は言う。

腦を適度に使うことを實行するためには『趣味の道樂』——以下ハーピーという——を勵めたいのである。何か一つでも頃は、尺八、ハモニカ、バイオリンなどやつて居た人が『年とつてからハモニカでもあるまい』といつて音樂をやめてしまう人があるが、とんでもない間違いで

趣味の一藝に達することは自分の老後の慰めとなればかりでなく、社會的にも明るい好結果を與え得るものである。六十過ぎた婦人達が揃いの衣裳で踊るのを見よ、あの一人一人の、世事を忘れ切つた無邪氣な意氣の中に青春は燃え社會を明るくするのではないか。(完)

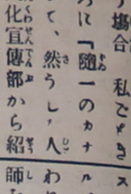
大陸時報

THE CONTINENTAL TIMES
417 Dundas St. West
TORONTO, ONTARIO
Phone EM. 6-1888
Published Twice Weekly
TUESDAY and FRIDAY
Publisher and Editor
Y. IWASAKI
Rates:
$6.00 A YEAR IN ADVANCE

Friday Jan. 1 1960

新年號

第三



日本文化の灯を點じた カナダ宣教師の恩惠

在東京 東 良三

日本には戰前から「日加協會」という團體があり、戰後「日本カナダ貿易協議會」が出來て、カナダから來日される大官、有力者、訪日婦人團からラグビー選手たちと云つたものゝ歡迎會が、かなり頻繁に催されるし、在日加奈陀大使館でも相當强力に宣傳に努めてゐるので、もういゝ加減一般日本人の頭にカナダといふ國の事情がわかつている筈だが、殘念ながら實情はそうではない

現に新聞、雜誌、レヂオ、テレビなどが、カナダを紹介しようと云う場合、私どもの

ものゝところに「隨一のカナダ通」とあつて、然うした人がカナダが大使館文化宣傳部から紹介されて、よくいろ〳〵聞きに來たり、加奈陀に關する文獻を求めに來るのでも分るであろう、また私が四年前に出した「カナダという國」と云ふ本が、未だに外務省、通産省、貿易商社、學校、圖書館と云つた方面で、恰も「教科書」のような取扱いを受けてゐるのだから、推して知るべきである

× ×

さてや、カナダといふ國が、われ〳〵日本が、まだ非文明國であつた明治初年に、いきなり一人の外交官を派遣して來たのである。

× ×

この篤信なトロント市民の熱誠な提案が意外な反響を呼んで、中央協議會は直にそれを採擇したばかりでなく、各方面から外國傳道資金が續々として集まつたとは、當時經濟的に貧弱な加奈陀國民としては驚くべき義擧であつたと言わねばなるまい

× ×

そして着々として其の準備を進めるうちに、二年後の一八七三年（明治六年）二月日本はキリシタン邪宗門禁制の高札撤去を定め、同時にヤソ教の國禁を除く旨を公布したので、その時分できたばかりの東京帝國大學からも手厚く待遇され、まだ未開時代の日本の文化に盡した業績は大きく



家一御皇天の日記績度出目

東洋の日本に力をそゝいで、る重大な使命を果すためには

トロント市メトロポリタン大教會の主任牧師ジョージ・カクラン神學博士と、ハミルトン市教會牧師デビドソン・マクドナルド醫學博士とが選ばれ、其の年の五月七日前記メトロポリタン教會で行われた送別會には、二千人の信者が列席したと古い記錄が傳えている

× ×

かくて選ばれたる靈の戰士ヵ博士の方は夫人と一男二女を、マ博士はその夫人を伴ひ、マ博士はその夫人を伴ひ、ひたすらに祈りの心貧しき人々に慈愛の灯を點するために、ただ「み心のまゝに」と、ひたすらに祈りの

× ×

其の頃トロントの傳道本部

× ×

彼の教を受けて、後年著名な學者となつた人の數は少くない

× ×

イギリスの小屬國としか思われてゐなかつた加奈陀が、明治初年の夜明け前の日本精神界に、偉大な貢獻をしたことは、いま回顧して見ると實に驚異的な事實であるが、その政治的に弱小國とされてゐたカナダが、我が國の女子教育にも先鞭をつけていることにも、敬意を表さねばなるまい

即ち、一八八二年（明治十五年）ハミルトン市で發足した「カナダ婦人傳道協會」は早くも翌明治十六年十二月に日本派遣最初の婦人宣教師としてミス・カートメンを我が國に送つて日曜學校、看護婦養成の事業を擔當せしめたのである、東洋における西洋文化のパイオニアたらんとする信仰と人間愛の熱情をたゝえた年若い加奈陀の婦人宣教師

うした若者たちに聖書の講義をやつてゐるうちに、彼らの温かい隣人愛に感動して、キリスト教信者としての洗禮を求めるものも續出してきた、あの有名な「西國立志編」を譯した中村敬宇もその一人で、後年英學者として名を馳せた佐藤顯理も、初期受洗者の一人であつたのである

此のように二人の努力が漸次實を結んで、横濱と東京と育にも先鞭をつけていることにも、敬意を表さねばなるまい

即ち、一八八二年（明治十五年）ハミルトン市で發足した「カナダ婦人傳道協會」は早くも翌明治十六年十二月に日本派遣最初の婦人宣教師としてミス・カートメンを我が國に送つて日曜學校、看護婦養成の事業を擔當せしめたのである、東洋における西洋文化のパイオニアたらんとする信仰と人間愛の熱情をたゝえた年若い加奈陀の婦人宣教師

を志すようになつて選ばれた勇敢な女性は次々と海を渡つて來日した

それに力を加えた先覺者のクラン博士は、日本女性の教化に着手する機至れりと、明治十六年トロントに赴き、外國傳道本部を說得した上、翌十七年東京に踏るやいなや麻布鳥居坂に三千坪の土地を購入して、百坪ばかりの校舍を建てた、なにしろ七十五年前のことで、外人が「居留地」以外に住むことが出來なかつた時代なので、政府の認可を受けるのに隨分苦勞した末、同年十一月わずか十二人の生徒を收容して發足したのは、「東洋英和女學校」で、日本最初の女學校でもあつたのである（つづく）

○迎 春 杉万芳月

酒は佳してんな初風織けかし
亂入の國會明けて民小さし
世の平和會談に繁く今朝の春

初刷に浮ぶ精魂五十年

大陸時報

THE CONTINENTAL TIMES
417 Dundas St. West
TORONTO, ONTARIO
Phone EM. 6-1888
Published Twice Weekly
TUESDAY and FRIDAY
Publisher and Editor
Y. IWASAKI
Rates:
$6.00 A YEAR IN ADVANCE

新年號

第二



◆寫眞說明▼ビーシー大學內の日本庭園の一部（池だけが略ば完成）人物は建設委員向つて左から森教授、田邊領事、石原ドクター、ニール博士、マン博士、ビニング教授

日本の庭園とその特色

千葉大講師ビーシー大學客員教授

森　歡之助

世界における庭園を大別致しますと、フランスに有名なル・ノートルという造園家がいて、大きな池を掘り中島を造り、池中に舟を浮べて遊ぶということが、主なる庭園の利用法でありました、その後、鎌倉時代になつて中國から禪宗が傳わられ、同時に水墨山水畫が日本でも盛んに鑑賞されるようになり、禪宗の寺院の庭園として、枯山水というものが作られるに至りました

これは水墨畫を描くと同じ態度で庭を造るのでありまして、主に書院から眺めて鑑賞するために造られたものであります、なお此の他に、書院の庭として、出入の多い池を所をとり生活を豊にすることにつとめるようになりました此の點では日本は他國の美點を取り入れるのに非常に熱心でありまして、終戰後は生活の各分野において、一層歐米の風が多く取り入れられるようになつて來たのであります

これに比べますと、庭園の方では、今までにまだそれ程に世界の注目を受けていなかつたのでありますが、この度の終戰後庭園も亦一部の人々から強い關心をもつて見られるようになりました、今日では從來の「フジヤマ」「ゲイシャガール」の日本でなく、日本の本質に徹した目で日本の物を見直して、そのよい所興味のあるところをとり入れて、身邊に造つてゆこうという希望をもつている人が多くなることを待ち望んでいる次第であります

本來の日本的な諸藝術は、だんだん歐米の建築家の間にも理解されるようになり、歐米の新しい建築にその要素が取り入れられるようになつて來たのであります

その池のまわりをめぐつて鑑賞する種類の庭を生じました これは山水庭といわれているものでありまして、室町時代に最も發達し、引きつゞき桃山時代になつて極めて豪華な庭が作られるに至つたのであります

この頃が丁度十五、六世紀に當るのでありまして、十七世紀の初め頃までは、なかなかよい庭が造られたのであります、有名な京都の桂離宮のティ園なども此の時代に出來たものであります、今日名園と云われるようなものは餘り出來なくなりました、廿世紀になつて世界の交通が開け、文化の交流が盛んになり、衣食住の各方面において、そのよい

十七世紀の江戸時代からはだんだんティ園も因習的となり、敢に於ては多く造られましたが、質において名園と云

一方東洋ではどうかと言いますと、中國から日本に傳わつた造庭法が、日本の國情に從つて全く日本獨特の庭園を生むに至りました、日本の造庭法も佛教の傳來に附隨して建築法と共に支那大陸から傳承したものでありますが、平安朝時代には寢殿造りと云つて、大きな池を掘り中島を造り、池中に舟を浮べて遊ぶということが、主なる庭園の利用法でありました、その後、鎌倉時代になつて中國から禪宗が傳わられ、同時に水墨山水畫が日本でも盛んに鑑賞されるようになり、禪宗の寺院の庭園として、枯山水というものが作られるに至りました

建築界では、日本の傳統的な古建築の持つてゐるいろいろの特質、例えば（一）構造材がそのまゝ裝飾材として應用されていること（二）直線を基調とした簡素な意匠であること（三）日本の氣候に適合させるために、極めて開放的な構成であることなど、從來の西洋の建築には見られない極めて特異な特質を持つている上に、全体として極めて單純　明快であるという點が

（以下第六部に續く）

陸から取り入れたものだとしましても、いつの間にか、それが日本的なものとなつて發達して來たということが、すべての物に就いて言いることでありまして、庭園においても中國から受けついだ觀念や技術が、わが風土や國民性によつて、中國のそれとは全く異つたものとして發達を遂げたのであります、例えば室町時代（一三九二―一五七三）に造られた枯山水の如きは、一幅の山水畫を見るような効果をねらつたもので、畫を描く態度と同じ態度で作庭をしたものだと思われます、其の結果として、狹い禪院の庭にも立派なものが造られるに至りました、これらの手法は多分に抽象的で一面また裝飾的でもあり、また極めて難解のものも生じました、この種の庭は、見る人によつていろいろの意味に解釋されるのでありまして、西洋の庭のように一目見て「あゝきれいだなー」と云つてしまうわけにはゆきません、これはその作者が、この庭はどういう風に見るべきだと教えてくれませんからあとで見る人が、各勝手な解釋をつけておるわけであります

日本の庭園とその特色

森　歡之助

（第二部からの續き）

それでもしこの種の庭を見る機會に接せられましたならばいろいろの他の意見にしばられることなく、極く平靜な氣持で、極めて單純に、自分で感ずるまゝに鑑賞されることをおすゝめいたします、ある一つの先入觀をもつて庭を見ますと、それから抽出して自由な氣持で庭の眞の價値を感得するということができなくなると思います、この種の庭は、前にもあげましたように、構圖が極めて單純であり、抽象的であり、また裝飾的でもありますから、これを現代の庭として應用したならば、どんな國の庭としても、またどんな建築にもよく調和させることが出來ると思います

鈴木悦氏と労働組合

——歴史についての自習——（二）

井手小四郎

鈴木悦氏と労働組合、この二つは深い関係があるし、それに同氏は労働組合の性格に大きい影響を與えているので、鈴木氏研究の一助として、その経歴を知る必要があろう。同氏は早稲田の文科出身、萬朝報、朝日新聞の記者を經て、大陸日報の主筆として、ロシア革命の翌年渡加、キャンプミル勞働組合の機關紙日刊民衆潮があつた。鈴木氏が書齋から市井に出かけたことは社會情勢と周圍の青年層の思想を探ぐるには、渡加前まで主宰。しかし鈴木氏の力の影響を無視できない。

しかし、生えぬきの勞働者だから勞働者の意識をもちとしてインテリだから勞働者の意識をもち得ないというものではないが、同氏は最後まで知識階級の人であり、勞働者の意識はもち得なかつたところの勞働階級への理解者同情者であつた。それは勞働組合の性格に反映していることである。勞働組合は組合としての機能を發揮するよりも、殆どの全力を機關紙「民衆」に注がれて啓蒙運動に終始したことではないか。農者がふえ、その生產面が飽和に達すれば價格の下落や販賣難を惹起し、投げ賣りなどの混亂が勞働組合に組織されて行くを起す。その時、キャナリーや仲買人の利は殖えても農者の利は薄くなる。農者は自衛上、組織の自覺を持つに至ることは自然の成り行きであるだろう。村長さんと尊稱された井上次郎氏の長い間の指導は、その歷史的使命を終えて、山家氏等の協同組合がそこに創設されるに至つた。その發展過程を決定づけたものは、經濟機構の欠陷やその他の經濟關係、社會情勢の然らしめたことは勿論である。

さらに漁者方面はどうであつたか。ここには各地に日系人だけの漁者團体が存在した。少數民族の經濟的自衛策として出發したであろうところの漁者團体も、豫備檢束、または橋渡的存在として、またある白人勞働者の利は薄くなる。農者後年、殊に第一次世界大戰後に至つて、白人、インディアン等の漁者組合に、日系人漁者の組織されることをはばむ障害になりはしなかつたか。ここにも功罪ともに、客觀的分せきが必要である。

宝 (3) 1959年10月25日 (毎月一回25日発行)



妻夫ご筆の主近最

アルバタ伝道の想出 (1)

南部アルバタの日系人合同教会が長老執事を選出して書記・会計を選任し、教会の組織をカナダ合同教会の制度に添うて成立してから本年は丁度十年になるというので、私の想出を記してみる。

南部アルバタにある日系人合同教会というのは悪夢のような太平洋戦の最中に浮び出た一つの小島のようなもので、太平洋ならぬ大平原に設立された活きた神の教会である。一九四二年八月七日夜八時頃、ロッキーを汽車で越して来た私共の一家十人が古いレスブリッジ駅にマゴワン牧師によって迎えられて足を下した時が高天原であった。翌日私共は見るもの皆めずらしく広い〳〵地を同牧師に連れられて二十余里はなれたレイモンド町に向い、そこに借りてあった町はずれの古ぼけた四室ある平家に落付き、次の聖日は数名の日系人の方々と芝生の上で記念すべき第一回の礼拝をもち、家の長男等は小数の児童とサンデースクールを営んだ。飲料水の設備のない住宅で、近くのイリゲーションデッチの横に堀った井戸に溜った水をバケツに汲んできて用い、冬は雪をクライにとって溶かして洗濯などをした。便所が外であるので零下二十度も下がる冬の寒い時など身ぶるいした。戦時中で買う自転車のない時、自転車屋の主人用のものを四十五弗で買い、レイモンドを中心として百哩四方の地域を冬は羊毛製の厚い布の外套をまとい、漸く眼だけ出し、鼻ヒゲは白く凍るような有様で厳寒の時を本当に一軒〳〵訪問した。一年に四千哩を走っているので、四十六、七才の当時としては元気であったのであろう。ビーシー河より敵国外人として強制移動させられて移動して来た日系人の方々は、全く馴れない砂糖大根耕作の肉体労働で住宅とてまずいのでなんぎをして疲れられるのである方がでなんぎをして来て元気になったのはあなた「アルバタに来て元気になったのはあなた位いのものですよ」と仰ったが、今までに用いていた眼鏡まで不用になったのは感謝であった。従って人手不足で依頼され たり、子女教育の費用にと十五エーカーのビーツ働きを家族で働いたこともある 自転車にホーをつけてマグラスの辺まで走った時など楽しいものであった。やがて窪田・唐木氏並びに有志の方々の御好意で自動車が与えられたが、これは足でペタルを踏むのでなく、器械が廻り出してドン〳〵動くので、この運転に馴れるまで又一骨折りした。自動車君はガソリンさえ食べさせておけば元気で走ってくれるが、ある時など、アルバタのぬかるみ道路でタイヤに泥がついて車は動かなくなることがあった。近くの農家に御願いしてトラクターで曳き出してもらったり、雪のあとが凍って滑るようになると何回デッチにすべり込んだことであろう。田尻氏が曳き上げ車をやとってきて下すってようやく道に出て、ちょっと走ると又すべり込むので「この人はよほどデッチが好きな人らしい」と白人達が笑った。そしてグレイハンドの大型バスから曳き出してもらって帰ったこともある。すべる田道をミセス樽山に押してもらう車君が女用コートを泥しぶきで台なしにしたこともあった。道を塞いだ積雪に乗りつけて車体の腹がつかえるのでシャベルでの雪除けは寒い日に大汗かく程働いた。ラヂエーターの水がもるようになったので一哩位走っては水を入れつつ三十哩も走り、牛に突き当てたり、零下三十度にも下って自動車がスタートせず他の人の自動車で曳いてもらったり、油箱の下を温めたこともあった。アルバタの冬は本当に寒いものであった。

血 (第三種郵便物認可) 第58号

看護設備を擴張したい

ニツポニア・ホームで更によき理解と支援望む

日系人社會の支援により生れ運營第一年を終えたオンタリオ州ビームスビルのニツポニア・ホームは一月三十日總會を開いた。一九五九年度の收支決算報告は次の如くで、初年度で設備費等に相當かかつているにも拘らず收支相つぐない結構自立できる財政狀態である

收入の部

△寄附金及び會費 二、五〇二・七〇
△維持費收入(在寮者支拂) 四、七一四・四四
△州政府の補助金 三、〇五六・七九
△セールス・タキス拂戻 九三〇・〇六
計 一一、二〇三・九九

支出の部

△食料(訪問者の贈物や近隣の農家などからの寄贈があるので少ない) 一、四六〇・〇九
△醫療と醫藥 八六八・二四
△ガス、電氣、水代 一、三八三・四〇
△文房具、電話 五四五・一八
△家具、諸道具、修繕費 二、六四四・三八
△村費(地租 スクール・タキスは免稅だが、水道等の費用だけかかる) 一四・九七
△造園費(設計費八〇〇弗が含まれているが、それは全部寄附されて收入の部に入つている) 一、三九七・八八
△保險料、銀行料、雜費等 七一二・〇一
△給料(支配人六〇〇弗、コック七五〇弗) 一、三五〇・〇〇
△旅費 二五六・九〇
計 一〇 七三三・〇五
(差 殘金四七〇・九四)

●資產は土地、家屋、家具(消耗費を差引いて)、銀行預金等で九万八千八百六十弗二十三仙 この中には擴張資金として特別に積立てある千四百八十弗が含まれている。

運營狀態

ホーム入りははじめてはない

一九五五年度のホーム運營報告書は次のことを指摘して居り、ト市の三葉ブして看護している。

會、ト市協の特別慰安、クリスマス當時の日曜學會諸團體、個人などのプレゼントその他に感謝を表明している。

△一九五九年末までに十四人の入寮者があり、うち一人はナーシング・ホームに、一人はオンタリオ病院に、一人は普通の病院に送り(後死亡)、一人は歸宅した。現在男五名、女五名で十名が在住。

△官立病院が患者の整理をし、言葉 解らぬ長びく病人三名をホームに委託した。このうち二名は床つき患者なので看護設備をなし差し當り家族的に在寮者の石井夫人が主となり、山岡長谷川、山家三夫人がヘルプして看護している。

△昨年度の入寮者十四名の他に八名の申込みがあつたが入寮前に取消した。日系人社會には日本の昔の養老院と同じくニツポニア・ホームに入る事は家族の恥と考える向きがあるようで申込取消の大部分はそれが理由のようである。

△ホームの經營は在寮者のペンションの中から八弗を小使いとして本人に渡し(この額は各ホームそれぞれの取極めで三弗、五弗、六弗、十弗というのがあるが普通は八弗)殘り四十七弗でまかない、不足の七割五分を州政府が補助してくれるので財政的に安定している。

△醫療については嘱託醫が毎週一回往診してくれ、病人が出たら何時でも來てくれる。ドクターには一定額の月給(一ベッドにつき月一弗七十五仙の割)をホームから支拂うが、病院保險は手術費はカバーしていないので貯えのない人の分はホームで支拂つている。

△現代醫學の進歩から一般的に壽命が延び老人の人口は殖える一方、床つき患者も段々殖える傾向にあり白人ホームでは特別看護人の必要な老人が四割もいる所がある。ニツポニア・ホームでも滿員になつたら看護設備を擴張して、家庭で手のかかる老人の保護事業を增したいと願つている。

△現在まだ六つのベッドが空いて居り、看護を必要とする老人で入寮を希望する向きもホームに申込んで相談すれば考慮を拂い便宜をはかることになつている

理事と會費のこと

ニツポニア・ホームの管理に當る理事は十名であるが本年度からその半數は二年の任期とすること及び三名の常務理事を置いて運營の實務に當らせることになり入選は次の如くきまつた。

△留任理事—小宮山牧師 山家安太郎 宇都宮鹿之助 三浦ローイ 本常虎藏
△新任理事—平石君子 信岡良太郎 平城スタント市佛教會代表上出敏夫
△常務理事—小宮山理事長 山家監督 宇都宮

尚、昨年度の總會で決議した會費、寄附金等はホーム擴張資金として積立てる件を再確認して、更に多くの人々が入會し(終身會員は百弗以上の寄附者、普通會員の會費は年二弗)今後必要性が更に增して來るであろう看護設備の擴張を實現できるよう援助方を一般に切望することになつた。

(梅月生)

自費入寮者と看護を必要とする老人

△ニツポニア・ホームは原則としてペンショナーを入れているのであるが、六十五才以上の人で自分から費用(一九五九年度は一人一日三弗三十仙と公定された)を支拂つて入寮したい人も入れる。

Nipponia Plans Extension On Nursing Facilities

3/6/60

BEAMSVILLE, Ont. — The Board of Directors of the Nipponia Home expressed hope for more financial support which would enable an extension in nursing facilities. This was learned after the general public from Hamilton, St. Catherines and Toronto attended the General Meeting on January 30th following the completion of one year's operation, and heard reports that additional capital was needed for the Home to fulfill its aims.

The type-written report by the Superintendent, Mr. Y. Yamaga, stressed the importance of additional nursing facilities. In short, the report said:

"During the 12 months of operation, fourteen persons were admitted including three bed patients transferred from a Hamilton hospital requiring special nursing care. The Home discharged 1 to a nursing home, 1 to a local hospital and the third to an Ontario hospital; still another back to the family. At present, the Home is catering to 5 males and 5 females, among whom we have two bed patients that do not require hospital care but nursing is needed. As the Home is not financially able to contract graduate nurses, Mrs. Ishii has taken charge of these persons assisted by ladies in the Home."

To reaffirm the 1959 resolution, it was decided that membership fees and public donations would be kept as a special fund for this extension program of providing nursing facilities.

(Persons who donate $100.00 will become life members. Regular membership is $2.00 per year. It is hoped that more persons would take up membership in the Home in order that the special program can be pursued.)

Niseis Boycott

Mr. Yamaga's report further said that "besides the forementioned residents, the Home has had 8 applicants who cancelled their applications due to the fact that Niseis considered it a disgrace to the family name to have their folks in the Nipponia Home —where elder people enjoy a harmonious environment.

"The Home allows $8 to each resident out of their pension and credits $47.00 towards the maintenance account. When monthly expenses exceed incomes, the Provincial Welfare subsidizes 75 per cent of the shortage monthly, so the Home's operation is secured. Any person over 65 years can be admitted by paying the full amount per diem ($3.30) a day, or as much as their ability.

Covers Surgery

"In the case of medicals, a doctor makes regular calls weekly, and in the case of sickness, at any time being paid a fixed amount of $1.75 per bed. The Home also assists operation costs if residents require surgery as

(continued on page eight)

Nipponia Home

(Continued from Page One)

the Ontario Hospital insurance does not cover operations. As we Japanese Canadians are no exceptions in that the old age popu- facilities to care and meet the situation to relieve the family of this responsibility."

In addition to this report, the financial report disclosed satisfactory operation of the Home for the past year.

New Directors

An election of new directors took place at which time a decision that the term of office for directors would be two years was reached. Those elected for the new term are:

Re-elected—Rev. T. Komiyama (Chairman), Y. Yamaga (Secretary-treasurer), Roy Miura, T. Motosune (elected member) and S. Utsunomiya.

Newly-elected — Miss Kumiko Hiraishi, H. R. Nobuoka, Stan Hiraki, T. Uyede and a representative from the Toronto Buddhist Church.

The re-elected members, Chairman, secretary-treasurer and elected member, is the executive committee assigned to handle pressing situations.

poils Working Body in That ospective Employers

day is vice versa.

These girls want to know the conditions in the homes before they decide to work. They insist on knowing whether the homes are equipped with modern appliances, how many holidays they will get and how many members there are in the household.

Some of the girls want it understood explicitly that they be permitted to use the telephone to date their boy friends.

Well, postwar democracy American style has had a lot to bring lation grows yearly the Home is hoping to provide more nursing

(Continued on page seven)

明るい生活 (一)

＝あと何年生きられる＝

◎戦後ぐんと伸びた日本人の平均壽命が、一九五九年秋に男六十五才、女はついに七十才と、どうやら欧米なみにこぎつけたことはご存じの通りです。しかし、この知識から、逆に近頃よくこんな會話をききます。

「うちのおばあさんはことし七十八……平均壽命を八年オーバーしたんだから、これからがねえ……」とかまたしごく壯健な五十代の紳士たちが「もう二年で停年さ。そして平均壽命は六十五だから、あと十二年の人生か……」などと。どうやら平均壽命と年齢別にある平均餘命をご存じない向きが多いようです。人間零才の平均餘命——つまり、オギャアと生れてからの餘命—が、一般の平均壽命となっているので、成長するにつれ各年齢の平均餘命もあるのです。厚生省人口問題研究所の昨年の生命表によると、五十三才の男のあなたは十二年でなくてあと二十年、七十八才のおばあさんもあと七年の「平均餘命」があるのです。決して「餘命いくばくもなし」というわけではありません。

伸びる平均壽命

◎生命表は四年ごとの國勢調査から人口、出生、死亡數などの統計資料を基につくられます。日本では明治一年に作つたものが最初です。が、このやり方では四年間に一回でその間の實數しかつかめませんので、一九四七年からは推計人口を基に、毎年の「簡易生命表」もできています。平均壽命の伸び具合もこれで見ると明治三十年代から大正末期まではおおむね男は四十二才どまり、女は四十五才どまり。「人生五十年」にも滿たなかつたわけです。やつと一九三六年に男四十七才、女五十才になつています。一九四五年は戰爭で男二十四才、女三十八才と下りましたが、四六年には男女とも盛り返して五十代になりました。六十代になつたのが五二年で男六十才、女六十三才。そして五八年からグンと伸びて、人生七十年も古來まれでなくなつています。

明るい生活 (二)

＝あと何年生きられる＝

平均餘命の定義

◎ところで平均餘命とは、各年齢別の死亡率をそれぞれ一定と見た時に、その年齢の人々がこんご平均して何年生きられるかということです。「平均壽命」というのは、人生のスタートである零才において、あと何年生きられるかという平均餘命をいうのです。零才が一才よりも餘命が少いのは一才になるまでの死亡率が高いからです。

◎次に平均壽命を外國にくらべると、ニュージーランド、イスラエル、カナダなどの長命國を勘定にいれると日本の順位はいま十五位ぐらいだそうですが、厚生省の話では十年後の一九七〇年には男六十八才、女七十二才ぐらいになるだろうとのことです。十年さきにはあなたの壽命もプラス・アルファというわけで、めでたい限りですが、壽命が伸びて一方出生率が減れば人口の老齢化が當然起つてきます。いま日本の老人（六十五才以上）の人口比率は七パーセントで、イギリスの一六パーセントやオーストリアの一〇パーセントより低いとはいえこんごは定年延長などもいよいよ盛んに論議されるでしょう。北歐では勤め人の定年がだいたい男の六十五才、女は六十才になつています。

原因、結核の減少

◎壽命が伸びた原因は、生活の安定、新藥の普及、榮養知識の向上と、いろいろですが、直接の原因は戰前に高い死亡率を示した結核と乳兒死亡が減つたからだそうです。結核が死因のトップを脳いつ血にゆずつたのは、一九五一年で、五九年の死因の順は、腦いつ血ガン、心臟病、老衰、肺炎、不慮の事故、結核となつています。米國ではこの順位が、心臟病、ガン、腦いつ血、事故、肺炎……ですから、死因構成の型もかなり歐米に似てきました。そして五九年の人口動態實數を見ると出生が百六十四万人死亡六十八万人（うち乳兒死亡五万四千人）自然增加九十六万人です。十九秒に一人生れ、四十六秒に一人死に、三十三秒に一人ふえているわけです。

●寄付感謝　その後次の團体と諸氏から御寄付を頂きましたことを深謝申上ます

ニツポニア・ホーム

△二百弗　トロント市三葉會
△五十弗　ハミルトン市成瀬アート
△三十弗　モントリオール市山岡延一
△二十五弗宛　トロント市森次正春　清水ヒデ
△二十弗　ウインニペグ市高津俊輔
△十五弗宛　矢野武夫　ゼー・ハンター
△十弗宛　ハミルトン市横山富太郎　牧野元太郎　トロント市比嘉盛善　平山そで、藤下
△五弗宛　モントリオール市山下平城スタン　住矢ミツツ　ハミルトン市松井與三郎　中芝光夫　神林フレッド　上信ヨシミ　ウオーカー

FEB 13 1960

遠來の訪客

梅月生

ビームスビルのニツポニア・ホームの山家安太郎氏は、先週末日本からの珍客を迎えた。神戸市生田區にある社會福祉法人「大慈厚生事業會」の理事長高橋トミ女史がその人である。

高橋女史は、一九四五年良人を失つて以來、亡夫の遺志にもとづいて、一意專心、亡夫經營の神戸驛前山陽旅館を營みつつ、私財を厚生事業に投じて、亡夫の戒名「大慈院吉祥義人居士」の頭字をとつて、「大慈厚生事業會」を組織して、すでに大慈母子寮（定員二十世帶）と大慈保育園（定員一三八名）を經營して、母と子に溫かい手をさしのべているのであるが、昨年一月母堂タキさんが九十七才の天壽を全うし他界したのを契機として、追善供養のため養老院の建設を決意し從來の兒童福祉事業に更に養老事業を加えることになつたのである。

養老施設「大慈院」設置趣意書には次のように書いてあるが、人間の平均壽命が延びているのに對して社會施設をこれに追いつかせようとする努力は　どこの國でも同じことで、老人の問題は在來或る程度までは「家族制度」にたよつていたように思う日本でも、焦眉の問題となつているようである。

「老人の多くは貧困と孤獨に堪えしのびつつ、その餘生を送つているのが現在の姿であります。このことは家族制度の變革と民主々義のはきちがえ等によつて日本の美風であつた敬老思想が地に陷ちたことに基因するのでありますが、更に戰爭によつて柱と頼む子息を失つた爲に天涯孤獨となつて、かかる運命になつた人も多いのであります。

思うに老人こそ今日の文明をつくり上げた人々であり、國の寶として尊敬せられ、重寶がられ、いたわられなければならないのであります。ここにおいて自分の父母、祖父母のみでなく世の多くの老人達を尊敬すべしとする思想昂揚の爲九月十五日を『としよりの日』と定め　全國到る處において、この日を中心として敬老行事がくり展げられてお發表して「大慈養老院」建設計畫を立てられたのは昨年の七月で、爾來その實現に努力を傾けているのであるが、理想的な養老院をつくるには外國の老人ホームの實情を視察研究する必要があるというので、このたび六十八才の一人旅で（日本から來たホッケー・チームと同船）ウイニペッグの桑田久雄氏のもとへやつて來られたのである。そして桑田夫人と同伴で方々の老人ホームを見て廻り、先週トロントに着いて各所の施設を見學し、ニツポニア・ホームにも行つて一と晩とまつたのである。高橋女史は元ヘネー農村にいた土屋新吉氏の夫人の妹であり、その土屋氏は桑田氏の叔父さんに當り、山家さんもヘネーでは土屋さんと深い親交があつたところから、カナダに行くについては是非とも山家さんにも會わなければときめていたのが叶えられて、しかも同じ思いの養老施設の當事者としての山家さんに會つたのだからお二人の喜びようは想像に餘りあるものがあり、ホームの實地を見られた高橋女史には非常によい參考となつたことであろう。

Another Kagawa



Miss Umeko Kagawa has been promoting interest and support among Quebec and Ontario youth groups for the 40 world youth projects in 24 countries being carried out under the World Council of Churches and the World Council of Christian Education. In her capacity as World Youth Secretary she attended the annual meetings of the CGIT and Young People's Committees and the Department of Christian Education of the Canadian Council of Churches.

Miss Kagawa is a daughter of the famous Dr. Toyohiko Kagawa, and a member of the United Church of Christ in Japan. She is a graduate of Kwansei Gakuin and has done post-graduate work in the United States, receiving her BD degree from Yale in 1955.

老人ホームの話

ウ市　江波生

日本では五十年の昔、養老院と呼ばれたものは肉身的にも経済的にもヘルプレス（無援）の孤獨老人を收容する所で、親なし兒を收容する孤兒院と同じものであつた。だが今は違う。

今日の吾等一世老人はペンショナーと呼ばれて、經濟的にもカナダ政府のバックがある。ペンションを日本語で『恩給』と言つて居るが、必ずしもオナサクで頂いて居るのではない。吾等は過去五十年間カナダの産業の爲めに働いて來た。工場や山や河で不慮の死をとげた同胞はおびただしいものだ。即ち戰死軍人と同じで吾等は産業の戰士であつた。カナダ政府が歸化の有無に拘らず、誰でも年配に達した一世老人にペンションを與える理由は茲にあると思う。

緣あつて夫婦になつたが老年に至つて同じ日に天國行きは出來ない。地獄でもよいいつしよに行きたく思つても、それも叶わぬ。必ず一方が先きで一方が後に殘る。そこに孤獨の淋しさがある。なぜ淋しいか。朝夕の『話對手』の無いことだ。

話し對手の無い者同志が集つて、その欠陷を補うて一つの家庭的團樂の中に餘生を送る。だから老人ホームと呼ばれる。此の名稱は事實を表現して居るものだ。

一世と二世の色々の問題を要約すると『英語と日本語』の問題に歸着すると思う。言葉で充分意志を通じ得ない所から問題が起る。兎も角一世老人は日本語の居るようだ。老後の爲めの娛樂・醫療・衛生等凡てが完備している。空氣のいい果樹園の中にモダーン設備をした此のホームは日本趣味豊かな日本食も欲しい。又『昔話』しに花を咲かせ『事を望んで居る。まぐろの刺身、すきやき、うどん、豆腐の日本食も欲しい。又それは吾等の隱居後になくてはならん條件だ。此の要求に應じて創始せられたのがニッポニア・ホームであると言えよう。

見た所、ニッポニア・ホームは吾々の必要とする老後の生活條件を全部備えて

ある。万一を必要とするので
エー・エー・ブルー
加盟

看護が要る

老人の世話もできる
ニッポニア・ホーム

ビームスビルのニッポニアホーム創立當初の事業目的は老年恩給受領者の保護ということになつているのであるが、他の一般の老人ホームの傾向にならい、少數の特別看護を要する老人の世話もすることになり

病院手當の必要のない人例えば中風、アースライタス（關節炎）の如く或る程度身體の自由がきかんが、現在の施設をもつてしても出來るそうであるから希望者は詳細をホームに聞き合せて相談するとよい。六十五才以上でペンション又は州政府の生活費補助を受けている人々のためのルームもまだ四つ、五つ空いているので、希望者は申込むがよい。



JAPANESE TEA BREAK — Tea and cakes are served each afternoon in the restful surroundings at the Nipponia Home for Aged Japanese Canadians at Beamsville. The housekeeper, Mrs. Teruko Ishii, and two residents at the home, Gohichi Izumi and Ichizo Higo, take their afternoon tea break on a shaded patio overlooking the Japanese garden. Serving is Mrs. Tami Hashimoto, who cooks Canadian and Japanese meals for the residents.

Nipponia Home Residents Plant Japanese Garden

BEAMSVILLE — A tiny Japanese garden is slowly taking shape at the Nipponia Home for aged Japanese Canadians at Beamsville.

But Japanese gardens, noted for their dwarfed trees and shrubs, are not grown overnight. Years are required to bring them to perfection.

The garden at the Nipponia Home was a blaze of tulips in the early spring, but these have now been replaced by small shrubs and rock plants surrounding the garden pool.

TO THOSE accustomed to gardens massed with flowers in mid-July, the garden today would be a disappointment. It consists mainly of small shrubs, planted well apart in light, sandy soil, with little vegetation in between.

But the patient residents at the home are in no hurry. Five years from now, perhaps 10, they expect to have a garden which will bring back memories of their homeland.

A few pagoda-like ornaments are the only features which lend a recognizable Japanese touch to the garden today.

A VISITOR from Japan might wonder at the purpose of a small brick and stone structure occupying part of the lawn. It is an outdoor barbecue in real Canadian style. Once or twice a week the residents of the home enjoy a meal cooked outdoors.

Canadian foods are served at the home for breakfast and lunch. Dinner is in traditional Japanese style. In the afternoon, tea and cakes are served on a ton contributed $10,000, and Japanese groups in Ontario also sent funds.

NOV 16 '60

◇…寄附感謝
ニッポニヤホーム

△廿弗宛十弗宛
青木藤一郎、間所道春、坂梨みつ子、吉田藤藏、遠山正松、比嘉盛善、松山平四郎（以上トロント市）堀部和幸（ハミルトン市）志風巳吉（キングスビル）小樋トヨ（ボートホープ）梶浦万龜次（墨カスリン）△五弗宛
足立綾子、上萬原鐵夫、下高原バーノン、横本靜子、松居新藏、松尾千代次、小林龜吉、田中武二郎（以上ハミルトン市）北川恒等（ウ市）ゼー・エッチ小林



JAPANESE TEA BREAK — Tea and cakes are served each afternoon in the restful surroundings at the Nipponia Home for Aged Japanese Canadians at Beamsville. The housekeeper, Mrs. Teruko Ishii, and two residents at the home, Gohichi Izumi and Ichizo Higo, take their afternoon tea break on a shaded patio overlooking the Japanese garden. Serving is Mrs. Tami Hashimoto, who cooks Canadian and Japanese meals for the residents.

Nipponia Home Residents Plant Japanese Garden

BEAMSVILLE — A tiny Japanese garden is slowly taking shape at the Nipponia Home for aged Japanese Canadians at Beamsville.

But Japanese gardens, noted for their dwarfed trees and shrubs, are not grown overnight. Years are required to bring them to perfection.

The garden at the Nipponia Home was a blaze of tulips in the early spring, but these have now been replaced by small shrubs and rock plants surrounding the garden pool.

TO THOSE accustomed to gardens massed with flowers in mid-July, the garden today would be a disappointment. It consists mainly of small shrubs, planted well apart in light, sandy soil, with little vegetation in between.

But the patient residents at the home are in no hurry. Five years from now, perhaps 10, they expect to have a garden which will bring back memories of their homeland.

A few pagoda-like ornaments are the only features which lend a recognizable Japanese touch to the garden today.

A VISITOR from Japan might wonder at the purpose of a small brick and stone structure occupying part of the lawn. It is an outdoor barbecue in real Canadian style. Once or twice a week the residents of the home enjoy a meal cooked outdoors.

Canadian foods are served at the home for breakfast and lunch. Dinner is in traditional Japanese style. In the afternoon, tea and cakes are served on a patio overlooking the garden.

The staff consists of a housekeeper, Mrs. Teruko Ishii, and a cook, Mrs. Tami Hashimoto.

The home's founder, Yasutaro Yamaga, lives with his family in a modern ranch-style home across the street.

MR. YAMAGA, a retired businessman from British Columbia, launched the project two years ago. Most of the cost was met from Mr. Yamaga's life savings. A relative in Edmonton contributed $10,000, and Japanese groups in Ontario also sent funds.

◇…寄附感謝

ニッポニヤホーム

△廿弗 島野サイ △十弗宛 青木藤一郎、間所道春、坂梨みつ子、吉田藤蔵、遠山正松、比嘉盛善、松山平四郎（以上ハ市）堀部和幸（ハ市）志風巳吉（キングスビル）梶浦万亀次（蚕オスリン）小樋トヨ（ポートホープ）△五弗宛 足立棱子、上高原鉄夫、下高原バーノン、槇本静子、松居新蔵、松尾千代次、小林亀吉、田中武二郎（以上ハ市）北川恒等（ウ市）ジェーエチ小林

NOV 16 '60

FOLDER NO. 8-14

老人ホームの話

ウ市　江波生

日本では五十年の昔、養老院と呼ばれたものは肉身ダの産業の爲めに働いて來た。工場や山や河で不慮の死をとげた同胞はおびただしいものだ。即ち戦死軍人や一方が先きで一方が後に残る。そこに孤獨の淋しさがある。なぜ淋しいか。朝夕の『話對手』の無いことだ。

話し對手の無い者同志が集つて、その欠陷を補うて

T

Jan 18/61

Nipponia Home Report

By Y. YAMAZAWA (Secretary)

TORONTO. — Through your constant support the Nipponia Home has again ended another year—our second—with operations running smoothly. During the season, we held a very successful open-house with the Hamilton JCCA looking after refreshments, and to the many girls who so kindly helped us—we wish to thank you all. Also during the season, our superintendent attended three important meetings of the Charitable Homes Executives in Toronto and reaped much knowledge and experience in practical common problems of the Homes.

At the present time we are catering to 8 men and 5 women —2 of them bed cases. The average age of the residents is 78; the two oldest members of our "family" are 90 and 86 and both are in splendid health.

Financial source of operation is the resident's pension money less $8.00 allowance which amounts to approximately half of the cost. The shortage is covered by the Provincial subsidy and public donations. In regards to the medical aspects of the Home, the Home doctor makes a visit once a week for a check-up. Also, medicine is supplied to our residents free of charge. During the overall year not a single emergency call for a doctor was needed.

For recreation many residents enjoy vegetables and flower gardening in the summer; and in the winter they grow vegetables in a root-house which Mr. Yamaoka so kindly built us. Also, in the winter, they are busy taking care of tropical and gold fish, pot flowers, cabinet making, hand craft, and many play pool.

The Ontario Welfare Council is making a study about a special subsidy for Bed Care as there is a rapid increase of these among the Homes for the aged. We shall be able to extened this type of care service when the legislature passes such a grant.

We are deeply grateful to the Toronto JCCA and the Mitsubakai for their annual entertainment given to our residents. Also much appreciation goes to both Japanese and Occidental Church Organizations, who so kindly sent gifts to individual residents during the Christmas season.

Jan 18/61

入寮者(ニポニア)は年中元氣
平均年齢は七十八才

ニッポニア・ホームは大要次の如き一九六〇年度の運営報告を行なつた。

◇ホームの山家幹事はト市で開かれた老人ホームのマネージャー会議に三回出席し、ホーム共通問題を研究した。ニッポニア・ホームには目下男性八名、女性五名が入寮している。経営費はペンションから八弗を小使金として渡し、残余四十七弗を經營に當てているがそれは賃費の約半額にすぎず、不足額は政府の補助と寄付によつている。囑託醫は週一回來診、入寮者一同は年中風邪もひかず、元氣で一年を過ごした。

◇入寮者中の最年長者は九十才、次いで八十六才、十三名の平均年齢は七十八才であるが、夏は野菜作りや花を育て、冬は金魚、熱帯魚、鉢花 大工、玉突きなどの趣味で輕運動している。目下、床付き老人二名を世話中であるが、州内百十余カ所のホームでもしだいに床付き老人が增加の傾向にあるので、オ州當局では床つき老人を世話するホームに特別補助金を支給する案を研究中。現在、ニッポニア・ホームには空きベッドは三つのみ。

日本の老人ホーム (一)

徳川夢聲

なつかしのメロデーきけば
誘われてふと口すさむ若き日のうた
月冴えて庭の菖蒲の影黒し
一聲もらせ山ほととぎす

右は『浴風園歌集』第二集より、目についたまま拾いだした詠草である。名の示す如く浴風園なるところに、收容された人々の作を集めた小冊子である。

ヨーローイン

一体〝浴風園〟とは、いかなる所か？ 早くいえばこれ『養老院』である。その養老院で〝歌集〟を出しているとは！ 大抵の讀者は以外に思うであろう。しかも、前記の二首をみるになんとも微笑ましく、明朗な氣分に滿ちている。

昔からヨーローインと聞けば、人の世から見放された、寄る邊なき老人たちがいわば老人専用のロウ獄みたいに感じられていた。

―わしはノタレ死にをしても、あんな所の厄介にはならんよ。

―生きながらの墓地ではないか！

―あんな所へはいるなんて、こんな恥さらしのことはない。

―コジキをしても、その方がまだマシさ。

てなふうにおっしゃる人々が、世間の大多數をしめているようだ。なるほど、戰前の氣持からいうと、そう考えるのもそう無理ではない。だが、今日では逸う正しく生涯を送つて、晩年身寄りのない老人で、生活に困る人々は、當然、國家なり公共團体なりが、それをやさしく迎えて、殘る生涯を保證すべきである。

また、經濟力はあつても自分一人で靜かに余生を送りたい人たちは、有料の養老院にはいるがよろしい。戰後は、その種の施設もだんだんと出來ている。

無料も有料も

とはいえ、無料も有料も現在のところではまだはなはだ不十分である。ゆき場のない氣の毒な老人が、あつちこつちにも澤山に存在する。古い家族制度がくずされて、それが中途半端だからいけないのである。一日も早く、世の老人たちに安らかな〝いこいの場〟を與えてもらいたい。

この浴風園は、そうした老人のいこいの場として、ほとんど申し分のないところであろう。

私はこれまでに幾度か、慰問演藝をやりに來ているし、園長の下松桂馬氏や、保護部長の芦澤威夫氏とも面識があるし、おまけに一中時代の同級生であつたエッチ君と、その奥さんとが入園してご厄介になつているのである。

エッチ君は一中・一高・帝大のコースを進んだ秀才であつた。人間があまりにも立派であつたため、かえつて不遇の身となり、某廣告代理業の支店主任などやつていたが、輕い腦出血のため、困窮の極に達し、浴風園のご厄介になることになつた。

入園後も、時々、私の家まで話しに來たりしたが、中々の元氣で、『まつたく僕は今幸福ですよ。もしかしたら、クラスの中で僕が一番、幸福じやないかと思うんだ。ハッハッハッ』

などといつたもんだ。決して皮肉や冗談でなく、その時は心底からそういつてるようであつた。（同君は昨年死亡した）

もちろん、入園しているお人の全部が、そんなふうに滿足しているわけではないだろう。中にはいろいろと不平な人もあるに違いないまた、老人の中にはどんな場合にも、不平しかもてないという性格の人もあろうが、この日、私が園内を一巡した印象によると、大多數の人たちは、明るい表情を浮かべて、ひつそりと樂しく暮らしているようには見えたのである。

聲

近い。大核病棟が取容されているエッチ君の骨もここに眠つている。私は石段をのぼり合掌した。キクと、カーネーションと、グラジオラスがそなえられている。石の上に、バラバラと小さなカキモチがあげてある。

葵（あおい）寮というのがあり、その庭にはタチアオイが見事に咲いていた。ここにもバラがにおい、ケシの花が豊かに群落をなし、むらさき露草が繁り、ガーベラがあざやかに咲いている。

ここは極東一

前大臣松田竹千代氏（テキサス無宿のアダ名あり）の紹介で入園した八十歳のメリケンジャックがいた。上山草人の先輩で、若き日のメリー・ピックフォードの映畫に、エキストラで出演したという耳の遠い老人だ。

いや、この種の老人ではフランスの文化勳章をもつも、今ではこんなに快方にているエラブツもいた。陸向かつたと、いろいろの運軍の通譯官であつたが、外務省に懇望されて、國際勞働事務局で働いた人だ。第二次世界大戰に超短波で大活躍をした人だ。この人も耳が遠いが、園長から感想を聞かれて『今ここが日本一、いや極東一です』と答えた。

さて、お婆さんばかりいる寮を訪れた。みんなニコニコと私を迎えてくれた。なにかの祝日に、これらのお婆さんたちは、本職の美容師が來て、花嫁姿となつたが、どうしてなかなか美しいものであつたらしい。事實、若いころはサコソサコソと思われる顔だちの人が、いくらもいたのである

物療（物理療法）室には、二人のじいさんがいて、半身不隨のトレイニングをやつている。

有料の黒光寮には、明大文學部長未亡人がいる。私は部屋にはいつて、欄間に掲げられた故主人の寫眞とフィリピンで戰死された一人息子さんの寫眞とに敬意を表した。

ふと見れば楓の花も盛りにて

はスイートピー、キンセンカ、バラ、カスミ草、金魚草などの草花が初夏の太陽をうけて美しく咲いている。

その向こうにクラブと呼ばれる建物がある。將棋をさしている老人が二組あつた。碁盤も幾つか重ねて置いてある。一隅にはテレビを置いてあつた。

第二洗たく場の前にくるとブーンとにおう。これは患者のオムツを洗う所で、一日に二千枚も片づけるそうだ。第一洗たく場は、厚い壁をもつて仕切られ、機

ニューカナ
中央銀行

老人ホーム代表

三百名會合して福祉事業を討議

オンタリオ州内の老年者ホーム責任者の第四十二回大會が六月七、八、九の三日間オシャワのゼノシャ・ホテルにおいて開かれ、州内の官營、私營の大小百十二カ所のホーム代表者三百名の中に、ビームスヴィルのニッポニア・ホーム責任者山家安太郎氏も加わつて出席した。州政府からは厚生大臣ルイ・セシル氏、老人ホーム課の主事ラドロウ氏其他課員總出で參加、官民協力して三日間にわたり老年者の福祉に關する諸問題を熱心に討議した。オシャワの市長トーマス夫人の歡迎の辭があつてからセシル厚生大臣が、オンタリオ州の福祉事業の發展につき講演し、ラドロウ主事は老年者ホーム責任者協會につき次の如く語つた。

『今から四十二年前、老人ホームに組織された本會で、諸君の責任は重大で福祉事業の前途は遼遠である』ついで英国の老人保護プログラムの報告があつたが好い參考になつた。

◇

現在オンタリオ州内にある老年者ホームは官營（市や郡で經營）が五四、私營（救世軍、教會、維持會等で經營）が五八で、總計八千三百三十のベッドを持つている。近年著しく床つき老人が增加する傾向にあり、床つき老人の保護費は普通の二、三倍を要するので政府へ特別補助を要求するためこの問題の討議には多くの時間が當てられた。また老人病に使う高價な藥の協同販賣その他、多くの有益な協議と決議も行われた。オシャワ市は出席者一同を晩餐會に招待し、ゼネラル・モータース會社は、自動車組立て工場を二時間にわたり、工場のカーに乘せ說明者をつけて見學の便を與えた。

New Homes For Elderly At Ancaster

OTTAWA — A Federal Government loan of $55,000 has been approved for the construction of 11 low-rental dwelling units for elderly persons in Ancaster, Ontario.

Provided under the limited-dividend section of the National Housing Act, the loan will be made to Ancaster Senior Citizens Apartments Limited. It will be repayable over a period of 45 years.

The company is sponsored by the Ancaster branch of the Canadian Legion. It has obtained a provincial grant of up to $5,500 towards the cost of construction and, in addition, will receive a tax concession from the municipality.

The project will provide five bachelor and six one-bedroom units in one-storey row housing. Monthly rents will be $44 for the bachelor units and $52 for the one-bedroom units.

Minimum annual income for tenants at initial occupancy will be $792 and $984. Continued occupancy will be restricted to tenants with incomes of not more than $1,995 and $2,475 respectively.

Few Know Sickroom Services

The Canadian Red Cross Society operates an important free service which few people ever see.

It is the sickroom loan service, which this year will help about 28,000 Canadians to convalesce from illness or injury in their homes.

Crutches, wheelchairs, back rests, sickroom enamel ware, even hospital beds, are available to those who need them.

"LONG PERIODS of recovery can cause a person to deteriorate and hamper a quick recovery," a Red Cross official said yesterday

Correct hospital equipment in the home helps to overcome some of these problems, he continued:

This is Red Cross month in Canada for the society, which was founded in this country in 1896.

The local branch was formed in 1914.

THE HAMILTON Red Cross Society receives some of its operating funds through money collected in United Appeal campaigns, but other branches in this district are conducting fund-raising campaigns this month.

TORONTO, ONTARIO

rts Fund Drive

BEAMSVILLE, Ont. — The Nipponia Home started their fund raising campaign for the expansion of the Home last week. The expansion and the fund drive was officially approved at the Home's annual general meeting held at the end of last month. The extension of facilities will enlarge the Home by nine rooms totaling a dozen beds. Appeal letters were sent out to the Japanese Canadian families and all major JC organizations in Ontario and the fund committee are waiting for the early responses to arrive.

The letter explained the necessity of an expansion, stating that at present, eighteen senior citizens are residents in the Home and four more are awaiting admission.

The expansion of the Home to a 30-bed capacity will cost approximately $30,000, half of which will be subsidized by the Provincial Government. At the moment, $5,000 has been accumulated in the Building Fund of the Home through membership fees and special donations. Thus, a further sum of $10,000 has been set as the goal of this fund raising campaign.

All donations will be deductible from your income tax returns.

At the regular monthly meeting for February, the Toronto JCCA decided to donate the proceeds of their Spring Dance to be held on April 7th, to the expans on fund.

The Toronto Kisaragi Club also decided to make a donation to the Home at the general meeting held on February 25th. The exact amount of the donation will be refered to the new executive.

●寄付感謝

ニッポニア・ホーム

△百弗 トロント市聖公會二世クラブ
△五十弗宛 高橋義夫、（キヤリブ）勝野千秋
△四十弗 （トロント市）二世ウイメンズ・クラブ
△廿五弗 清水夫人
△廿弗宛 小樋トヨ、（モ市）竹重安定
△十五弗 （トロント市）露木千代
△十弗宛 （トロント市）池端正夫、大河原エツ、堀内芳太郎、大村ジョージ、村田親一郎、向井夫人、平石キミ、（ウ市）
△六弗 （トロント市）九岡、常盤
△五弗宛 （トロント市）寺北夫妻（ハミルトン市）井上一平、上林フレッド、（トロント市）山崎庄太郎、（オークビル）内堀夫妻

NIPPONIA HOME PLANS EXPANSION

Nov 24/61

Beamsville, Ont. — On Saturday, Nov. 11th the Board of Directors met to discuss and approve the proposed plans for an immediate building extension to the Nipponia Home. The superintendent and secretary-treasurer, Mr. Y. Yamaga, reported that presently there are five ladies and eleven men living in the Home and two staff members totalling 18 residents—the maximum limit for the Home. However, the Home has received several more requests from elderly persons who may have to be turned down unless a building extension is made soon.

Mr. Yamaga stated that the increasing trend indicates that a building extension must be made to cope with the growing needs of the senior citizens.

Plans have already been made and submitted by the architect to build three more single and three more double bedrooms plus a staff room at an estimated capital cost of $22,000 for buildings and furnishings. As the provincial subsidy will assist in retiring half the cost, $11,000 is needed. Present contributions to the building fund through membership fees amount to approximately $4,500. Hence a further $6,500 is required through a Nipponia Home Extension Fund Drive which the Board of Directors proposed to initiate at the end of Jan. 1962.

Every Japanese Canadian citizen, old or young, Issei, Nisei, or Sansei, is asked to consider this need seriously. Further information concerning the extension Fund Drive will be made public early in the new year.

The annual general meeting of the Home will be held on Saturday, Jan. 27, 1962, from 2:30 p.m. All members and prospective members are asked to attend this all-imporatnt meeting to discuss the present and future progress of the Home.

The Board of Directors approved the appointment of Mr. T. Yasunaka as assistant superintendent. Growing needs and responsibilities at the Home have increased the burden on the superintendent's duties and an assistant was sorely needed.

A committee was appointed to investigate the possibilities of erecting low rental housing units to accommodate elderly persons. Several building lots which are located across the road from the Home were purchased by Mr. Yamaga. Under certain conditions loans up to 90% of the capital cost can be secured through the National Housing Act. Additional grants up to a maximum of $500 fo reach dwelling unit can be received from the Ontario Department of Public Welfare through the Elderly Persons Housing Aid Act.

The public is reminded at this time that it is still not too late to renew your membership in the Home by remitting your contributions.

ニッポニア・ホームの建增資金募集を開始

【ビームスビル發】ニッポニア・ホーム理事會では去る一月末の總會で決定したホーム建て增しに要する資金募集運動を開始した。オンタリオ州内の日系人と主なる團体等にあてて援助方をねがう日英兩文の手紙を先週中に發送したが、△募金の目標額は一万弗（十二ベッドをおける九室の建て增し予算は三万弗であるが、殘額はオ州政府から補助があり、增築積立金が一万弗たまつているので不足額一万弗を必要としている）で、この寄付金はインカム・タキスからさし引きできるホームは現在滿員、すでに四名の入寮申込者が空き室のできるのを待つている狀態で、工事はできるだけ早く着手しなければならないことになつていて、一般のオンタリオ州内の日系人と主なる團体等にあてて援助方をねがう日英兩文の手紙を先週中に發送したが、△募金の目標額は一万弗（十二ベッドをおける九室の建て增し予算は三万弗であるが、殘額はオ州政府から補助があり、增築積立金が一万弗たまつているので不足額一万弗を必要としている）で、この寄付金はインカム・タキスからさし引きできるホームは現在滿員、すでに四名の入寮申込者が空き室のできるのを待つている狀態で、工事はできるだけ早く着手しなければならないことになつていて、一般のオンタリオ州内の日系人と主なる團体等にあてて援助方をねがう日英兩文の手紙を先週中に發送したが、△トロント市國しは四月七日ダンス會を開いてその收益を寄付することになつている。△如月クラブでは二月二十五日の總會で援助することに決定、寄付額決定は新役員に一任。

Vol. XXVI.—No. 8 WEDNESDAY, JANUARY 31, 1962 TORONTO, ONTARIO

Will Make Public Appeal . . .

Nipponia Home Expansion Plan Endorsed

BEAMSVILLE, Ont. — The Fourth Annual General Meeting of the Nipponia Home was held here on Saturday, January 27 with the expansion plan being fully endorsed by those in attendance.

The extension became of prime necessity when four applications for admission were received by the already capacity filled Home.

The public will be asked to support the fund raising campaign which is set at $10,000.

The plan calls for the addition of five single-bedded rooms, three twin-bedded rooms and a staff room, complete with a full basement, on both sides of the present sleeping quarters.

The details of the plans are:

(1) At the present time, the 18 bed home is fully occupied by 16 residents and two staff members. After the expansion is completed there will be 29 beds and a staff room and this the Board of Directors feel will be adequate to take in any future applicants. This expansion will also be the last one.

(2) Expansion plans had already been anticipated in the original plans for the present kitchen, dinning room, wash rooms, heating facilities and these will not have to be increased, with the exception of adding extra toilets according to the number of residents occupying the Home.

(3) The estimate total cost of the expansion will be $30,000, including the furniture. Half of this sum ($15,000) will be granted to the Home by the provincial government leaving a net amount of $15,000 to be raised. Out of this required sum, $5,000 has already been accumulated through membership fees (amount not used in the operation of the Home) and special donations. This, therefore, leaves the actual sum needed at $10,000.

Mits Sumiya, National JCCA and George Takahashi, Toronto JCCA, told the meeting that their respective organizations had fully endorsed the expansion plans at recent meetings.

Discussions on how to raise the required funds followed and subsequently, four members of the committee were appointed to draft a letter, appealing to various organizations and to the Japanese Canadians throughout the province to support the upcoming fund raising campaign.

Saturday's meeting was presided over by the Rev. T. Komiyama, chairman of the Board of Directors. Mr. Y. Yamaga, secretary, reported on last years operations. In brief, Mr. Yamaga reported that; the Home completed its third year of operation without to many difficulties and cared for 16 residents. The residents, at the end of the first year numbered eight, after the second year there were ten, and at the end of last year there were sixteen residents. This included eleven men and five women with the oldest person being 90-years-old. There are four people in their eighties, with the average age being 78. At present there are four persons seeking admission and more are expected in the future.

The report also stated that the yearly X-ray check of the residents showed no defections.

During 1961, as in other years, the home received visitors from the Toronto Mitsubakai, Toronto Buddhist Church, Toronto and Hamilton JCCAs who came to comfort the residents. The report also acknowledged the gift of a Xmas tree from the Grimsby United Church Women's Association and the Xmas gifts from various church organizations of Toronto and Hamilton.

While Mr. Yamaga was confined to the hospital last year, the Rev. Komiyama acted as superintendent. After Mr. Yamaga returned from the hospital Mrs. Ishii, the matron, also became confined to hospital, but fortunately Mr. and Mrs. T. Yasunaka came from Montreal to assist.

Mr. Yasunaka acts as assistant secretary and Mrs. Yasunaka has taken over the duties of Mrs. Ishii. A public nurse has been hired as a night watch for the sick residents. With these arrangement the Home is carrying on without difficulty.

For the comfort and enjoyment of the residents the Home purchased a 16 mm sound movie projector and tape recorder (donated by Mr. and Mrs. Y. Yamaga on their 50th wedding anniversary) which is wired so that even those confined to their beds can enjoy the program.

Chartered accountant, George

(Continued on page 8)

Nipponia Home . . .

(Continued from page one)

Laughlin reported on the Homes financial status. Fixed assets of the Home are $106,441.17.

Last year's operational expenses were:

Revenue: maintenance paid by residents—$7,160.50.

Provincial grants and special donations for maintenance — $3,787.88 Operational expenses including food, medical service and supplies, water, gas, hydro, telephone, salary, insurance, etc.——$10,620.08.

Amount remaining—$407.26.

The matter of erecting low rental housing for pensioners was also reported at the meeting. (Mr. Yamaga has already donated a small $800 lot for this purpose), but it was decided to study this further and in the meantime this matter was dedefered.

The following were elected to succeed, half of the 10 directors whose terms of office had expired:

George Takahashi (TJCCA), H. R. Nobuoka (Toronto Japanese United Church), Toyoshi Hiramatsu (Toronto Anglican Church), Tosh Uyede, St. Catherines, and one from the Toronto Buddhist Church.

Those who will remain on the Board of Directors for another year include T. Mototsune, K. Goto, Fred Kamibayashi, Y. Yamaga and Rev. T. Komiyama.

After the general meeting, the Board of Directors met and elected officers for 1962:

Chairman: Rev. T. Komiyama
Secretary-Treasurer: Y. Yamaga
Ass't. Supt.: T. Yasunaka.

At the conclusion of the meeting those attending enjoyed supper together in the dinning room of the Home.

Vol. X
10,0
Swi
UBC
V
the

賀正
新しい春を迎えまして
皆様の御健勝を祈ります
トロント壽會

祝聖誕
謹賀新年
亀岡書籍貿易商會

聖誕と新年を
御祝いします
トロント曙俳句會

1961

昔と今の老人厚生事業

—オンタリオ州のことを中心にして—

山家生

昔、小アジアの或る地方の習慣として、人が六十歳になると、人里はなれた洞穴に連れて行かれ、そこで野獣の餌食にされるならわしになつていた。そうすれば老人は社會の邪魔者にもならず、若い者たちの手足まといにもならないようになる譯である。

愈々ホラ穴に穩居せなければならぬ時が來たら、子供は必要な食料とチャルと呼ばれる山羊の毛を織つた毛布を用意するのが一般のしきたりになつていた。或る日、中年の男が彼の子供うにしておいて、父と共に泣きながら歸つて來た。

男が家に歸つて第一に眼についたものは、家に殘してある半分のチャルであつた。そこで子供を呼びつけて叱りつけた。

『この、お前のしたことを見ろ。世間の人は、オレがしみつたれで、お爺さんに半分のチャルしかあげなかつたと言うではないか、馬鹿め！』

『お父さん、そうではありません』と、子供は泣きじやくりながら切れ切れに言つた。

力のなくなつた老人は社會の無用の邪魔者であり、子大きな不正義であり、オンタリオ州の恥である。州法で何とかせねば——との輿論が高まり、郡立老人ホームが多く建てられるようになつた。

餘命短かい老人が、あじけない牢獄の中で暮さなければならない人々のために慈善家の同情が湧き起り、養老院建設の輿論となつて二、三の郡では老人保護の養老院（ブアー・ハウスと呼ばれた）を建て、監獄から老人を引きとつた。一九〇〇年には同じ様なホームが一八できた。次の十年間に二七になり、一九五〇年には三五になり、年々增して一九五八年には、州内に養老院建設の輿論となつて二、三の郡では老人保護の養老院（ブアー・ハウスと呼ばれた）を建て、監獄から老人を引きとつた。一九〇〇年には同じ様なホームが一八できた。次の十年間に二七になり、一九五〇年には三五になり、年々增して一九五八年には、州内に

カナダは新らしい国で、百年前には青年移民ばかりで、老人問題は全然なかつた。併し英本国にはエリザベス王朝にできた貧困法があつて、一名〝働らく家〟という救貧の施設があり、男女とも年齢に關せず貧者を救濟していた。カナダに多數いた。これは國家的にも恥にちがいない。しかし十四、五年前から老人を、現代文化社會を創造した功勞者と認め、その老後の福祉問題が一般的の社會問題として登場するようになつた。

○

一九四九年のオンタリオ州議會で老人ホーム法規に大改革を加え、一九五六年の議會で更に改善されたのが現行法である。それは功勞者優遇を基礎としたものであるから、政府の恩惠的救濟でもなく、厄介者扱いでもない。その證據に政府は老人ホーム建設を奬勵するために、建築費や家具費の半分を補助し、且つ經營費にも補助を與える。また二倍の申込みがあるのが常である。

しかし日系人社會では、殘念ながら一世は勿論二世まで、三、四十年前の〝ブアー・ハウス〟時代のように、老人ホームに入ることを家族の恥のように考えている人が多いようである。

○

カナダは新らしい国で、百年前には青年移民ばかりで、老人問題は全然なかつた。併し英本国にはエリザベス王朝にできた貧困法があつて、一名〝働らく家〟という救貧の施設があり、男女とも年齢に關せず貧者を救濟していた。カナダに

御題〝土〟

桂子

あかつきの凍土ふんで初詣
また一とせの幸や祈らん
ひとにぎりの土に育ちし鉢花に
なぐさめらるる事の大きさ
連峰に紫雲たなびく春の日に
たがやす土のほのかに匂ふ
敗戰に焦土となりし故里も
いまは昔にまさるとの文

Vol. XXVI.—No. 8 WEDNESDAY, JANUARY 31, 1962 T

Will Make Public Appeal . . .

Nipponia Home Expansion Plan End

BEAMSVILLE, Ont. — The Fourth Annual General Meeting of the Nipponia Home was held here on Saturday, January 27 with the expansion plan being fully endorsed by those in attendance.

The extension became of prime necessity when four applications for admission were received by the already capacity filled Home.

The public will be asked to support the fund raising campaign which is set at $10,000.

The plan calls for the addition of five single-bedded rooms, three twin-bedded rooms and a staff room, complete with a full basement, on both sides of the present sleeping quarters.

The details of the plans are:

(1) At the present time, the 18 bed home is fully occupied by 16 residents and two staff members. After the expansion is completed there will be 29 beds and a staff room and this the Board of Directors feel will be adequate to take in any future applicants. This expansion will also be the last one.

(2) Expansion plans had already been anticipated in the original plans for the present kitchen, dinning room, wash rooms, heating facilities and these will not have to be increased, with the exception of adding extra toilets according to the number of residents occupying the Home.

(3) The estimate total cost of the expansion will be $30,000, including the furniture. Half of this sum ($15,000) will be granted to the Home by the provincial government leaving a net amount of $15,000 to be raised. Out of this required sum, $5,000 has already been accumulated through membership fees (amount not used in the operation of the Home) and special donations. This, therefore, leaves the actual sum needed at $10,000.

Mits Sumiya, National JCCA and George Takahashi, Toronto JCCA, told the meeting that their respective organizations had fully endorsed the expansion plans at recent meetings.

Discussions on how to raise the required funds followed and subsequently, four members of the committee were appointed to draft a letter, appealing to various or... panese provin... ing fu...

Satu... en ove... ma, c... Direct... retary... operat... report... pleted... withou... cared... dents,... numb... year... end o... teen... eleve... the o... old.... their... age ... are f... sion... the f... Th... yearl... dents... Du... the ... the... to B... Ham... comf... also... Xma... Unit... tion... vario... Toro... W... fine... the... peri... retu... Ishii... conf... ately... cam... M... tant... naka... of M... been... the... rang... on.... F... mer... pur... pro... nat... mag... nive... eve... can... C...

Nipponia Home . . .

(Continued from page one)

Laughlin reported on the Homes financial status. Fixed assets of the Home are $106,441.17.

Last year's operational expenses were:

Revenue: maintenance paid by residents—$7,160.50.

Provincial grants and special donations for maintenance — $3,787.88 Operational expenses including food, medical service and supplies, water, gas, hydro, telephone, salary, insurance, etc.——$10,620.08.

Amount remaining—$407.26.

The matter of erecting low rental housing for pensioners was also reported at the meeting. (Mr. Yamaga has already donated a small $800 lot for this purpose), but it was decided to study this further and in the meantime this matter was dedefered.

The following were elected to succeed, half of the 10 directors whose terms of office had expired:

George Takahashi (TJCCA), H. R. Nobuoka (Toronto Japanese United Church), Toyoshi Hiramatsu (Toronto Anglican Church), Tosh Uyede, St. Catherines, and one from the Toronto Buddhist Church.

Those who will remain on the Board of Directors for another year include T. Mototsune, K. Goto, Fred Kamibayashi, Y. Yamaga and Rev. T. Komiyama.

After the general meeting, the Board of Directors met and elected officers for 1962:

Chairman: Rev. T. Komiyama
Secretary-Treasurer: Y. Yamaga
Ass't. Supt.: T. Yasunaka.

At the conclusion of the meeting those attending enjoyed supper together in the dinning room of the Home.

1961

昔と今の老人厚生事業

—オンタリオ州のことを中心にして—

山家生

昔、小アジアの或る地方の習慣として、人が六十歳になると、人里はなれた洞穴に連れて行かれ、そこで野獣の餌食にされるならわしになつていた。そうすれば老人は社會の邪魔者にもならず、若い者たちの手足まといにもならないようになる譯である。

愈々ホラ穴に穩居せなければならぬ時が來たら、子供は必要な食料とチャルと呼ばれる山羊の毛を織つた毛布を用意するのが一般のしきたりになつていた。或る日、中年の男が彼の子供に、お爺さんをホラ穴に連れて行くときチャルをかついで一緒に來てくれと頼んだ。これまで老人がその穴に連れて行かれたら決して二度と村に歸つて來たためしがない。その恐ろしい穴に、お爺さんを連れて行くのである。

孫のこの子供は、平常自分をあんなに可愛がつてくれたお爺さんが、もう歸つて來ない所へ連れて行かれるのを大層悲しんだ。併しお父さんの言いつけ通りにチャルを背負うとした時、ふと思いついてそれを二つに切り、一つを家に殘して置き、半分だけ背負つて父の後について、お爺さんの死出のお伴をした。お爺さんをホラ穴の中に住めるようにうにしておいて、父と共に泣きながら歸つて來た。

男が家に歸つて第一に眼についたものは、家に殘してある半分のチャルであつた。そこで子供を呼びつけて叱りつけた。

『この、お前のしたことを見ろ。世間の人は、オレがしみつたれで、お爺さんに半分のチャルしかあげなかつたと言うではないか、馬鹿め！』

『お父さん、そうではありません』と、子供は泣きじやくりながら切れ切れに言つた。

『私はそんなしみつたれでしたのではありません。お爺さんに半分あげて、殘りの分は、やがてお父さんが六十になつて私がつれて行くまでしまつておくつもりだつたのです』

父はこれを聞いて、まつさをになり、自分もあの同じ運命になることを悲しみ泣き叫んで子供に言つた。

『さあ、お前も來い。すぐホラ穴に行つてお爺さんを連れて戻ろう』

それ以後は、小アジアのその地方の昔からの習慣が止んでしまつた、という物語りが殘つている。日本の姨捨山（おばすてやま）の古事や〝檜山節考〟などの傳說とよく似た話である。

昔も今も變りなく、生産力のなくなつた老人は社會の無用の邪魔者であり、子供達の手足まといになる存在には違いない。ただそれを、社會の邪魔な存在と見るか、それとも老人は、現在の文化社會を創造した功勞者と見るかによつて、ホラ穴にやるか、或は國家や社會が功勞者として老後の安定した生活を保證するかが決定されるのである。

○

カナダは新らしい國で、百年前には青年移民ばかりで、老人問題は全然なかつた。併し英本國にはエリザベス王朝にできた貧困法があつて、一名〝働らく家〟という救貧の施設があり、男女とも年齡に關せず貧者を救濟していた。カナダに殘つているのでは一八六三年にナイアガラ郡役所の記錄に、貧困者救濟のため三百弗を出したということがある。同じナイアガラ郡に一八八七年、カナダ最初の〝働らく家〟（石割り、薪切り、洗濯、何でも出來ることをさせた）が建てられた。しかしそれは貧困者すべてを收容したもので、老人だけには限られてはいなかつた。その他州内各郡にも數カ所これが建てられた。この〝働く家〟のない郡では貧困の故に浮浪罪に問われ監獄はいつぱいになつていた。何しろ家もなく生活の方法のない者は皆浮浪罪に問われたのである。四人たちの中には金がないだけで立派な暮しをしていた者も多數いた。これは國家的にも大きな不正義であり、オンタリオ州の恥である。州法で何とかせねば——との輿論が高まり、郡立老人ホームが多く建てられるようになつた。

除命短かい老人が、あじけない牢獄の中で暮さなければならない人々のために慈善家の同情が湧き起り、養老院建設の輿論となつて二、三の郡では老人保護の養老院（ブアー・ハウスと呼ばれた）を建て、監獄から老人を引きとつた。一九〇〇年には同じ様なホームが一八できた。次の十年間に二七になり、一九五〇年には三五になり、年々增して一九五八年には、州内に郡・市・個人經營の老人ホームが一〇五になつた。

昔の老人ホームは、あくまで救貧的なもので〝働らく家〟とか〝ブアー・ハウス〟と呼ばれ、扶養者のない老人や行き場のない最低孤獨の老人に對する政府の恩惠的政策であつた。從つてその施設や待遇も極めて貧弱で、食物もスープとブレッドだけであつた時代もあつたと言われる。こうした寮申込みは殺到し、定員の

コーヴの元日

苔のみどりに冬日しみ入る
さを鹿も樹々も鳴もこうべ
あげ
今粛々とコーヴ明けそむ
暮れいそぐ西空あせて山か
げの
深き谿間に澄める夕月
月まどか光きらめくさゞ波
の
遠が嶺さやに雲たなびけ
おのがじし花を唉かせて石
包む

御題〝土〟

桂子

あかつきの凍土ふんで初詣
また一とせの幸や祈らん
ひとにぎりの土に育ちし鉢
花に
なぐさめらるる事の大き
さ
連峰に紫雲たなびく春の日
に
たがやす土のほのかに匂
ふ
敗戰に焦土となりし故里も
いまは昔にまさるとの文
二倍の申込みがあるのが常である。

しかし日系人社會では、殘念ながら一世は勿論二世まで、三、四十年前の〝ブアー・ハウス〟時代のように、老人ホームに入ることを家族の恥のように考えている人が多いようである。ただその傳統的思想の故に長くもない老後を寂しさと不安定におびやつつも、現代の老人施設を利用しない人があるとすれば悲しいことである。

カナダも國がだんだん古くなるにつれ、老人の人口が增加した。今から八十年前には、オンタリオ總人口の四%弱が六五歳以上であつたが、一九四一年にはそれが八%即ち百人中八人に倍增している。この自然傾向に加えて、昔は白人の家庭でも二世三世が老人の世話をよくしていたが、だんだんとその良風がすたれた事などの理由も重なつて老人ホームの必要度が益々高まつてきた。

Buddhist Sunday School Visit

(Danny O'Neill, a member of the Hamilton Spectator staff takes a look at a typical Buddhist Sunday School day).

—HAMILTON, ONT.

Shining faces, neat in their Sunday best, the children in orderly rows with hardly a fidget as they listen to the minister.

One small boy breaks the spell. He balances a book on his head, stamps his feet, chants to himself.

Immediately a little girl turns, hisses a sharp "Michael . . . stop it," and the boy subsides bashfully, sliding deep into his chair.

School scene—but in this Sunday School on Strachan Street in Haimlton there's a difference.

The book balanced on the small boy's head is called "Buddhist Sunday School Gathas."

The little girl who shushed him has a face that would be at home in an old Japanese print. The minister in front of the class is a black-robed Buddhist priest.

And the children will sing hymns like:

"Thank you Buddha for my little toys

'Cause they're such fun for little girls and boys . . ."

These children are members of the Hamilton Young Buddhist Society. In the Sunday School they learn of the baby Buddha, instead of the boy Jesus. They hear tales of ancient India, not of Bethlehem and Palestine of old.

They adhere to a religion that was old when Christianity began but which is still a living force in Hamilton 2,600 years after its founder lived. Their temple is a piece of the Orient, picked up and placed in a modest house in this city.

In Hamilton, says Oscar Kawai, a former president of the Young Buddhist Society, there are about 100 members of the faith. All attend the local church where they are divided into three groups—the younger members form one section; there is the Sangha, for those between 35 and 45; and the Bukkyo-kai for the older folk.

Buddhists have lived in Hamilton since 1946 says Mr. Kawai and at first they held services in private homes.

"But in 1948 we were able to buy this house and now it is our church.

Inside the church is a small organ, a dozen rows of chairs, and a tall cedar cabinet with elaborately-carved brass clasps on the doors. The cabinet contains the shrine—a picture of the Buddha backed by long patterned panels with hanging brass lamps at each side. An odor of incense fills the church.

In the early days, the Buddhists here were occasionally visited by a priest from Toronto while Mr. Kawai usually took charge of the services.

But last year, the first full-time Buddhist priest the church has had arrived in Hamilton. The Rev. Tetsunen Yamada will stay in Canada for five years before returning to Japan. After that? "We hope to get another," says Mr. Kawai.

Most of Hamilton's Buddhists are of Japanese origin but one white Canadian family belongs to the church. They do not want their names revealed as they fear "ridicule" at the husband's place of employment.

"Sad to think," muses Mr. Kawai, "that this could happen."

During the services, the church members sing the ancient hymns and do hommage to Buddha. They recite the 12 adorations —"Kon iki shin nyo sen no" (His golden form shines forth pure like the King of Mounts).

Before the Hymn of the True Faith, they promise the Lord Buddha "we will endeavor to walk in His noble path every day of our lives."

Although the religion is an ancient and often regarded as mystical and remote from everyday life, says Mr. Kawai, "we're really very human. . . ."

Human enough, he adds with a smile, for some to forget to go to church, to break the rules now and *again and even*—serious for a true Buddhist—to go hunting just like any other Canadian outdoorsman.

The religion forbids the taking of any life—so what happens when a mosquito zooms in for a feed or a fly flits annoyingly through the house?

"We tell the children to simply brush it (the mosquito) away without destroying it. The fly we shoo out through the door."

There are no rules concerning food, Mr. Kawai says, "We eat anything—including meat." And the practise of the religion doesn't interfere with normal life.

Mr. Kawai, a jeweller, explains that Sunday is the Buddhist holy day so it fits in with the "day off" in a Christian country.

Since its beginning, the Buddhist congregatioon in Hamilton has steadily grown "and we haven't had anyone drifting away," notes Sam Suenaga, another official of the YBS.

But there are still many Hamilton Japanese who are nominally Japanese who do not attend the church.

"Like any other religion," says Mr. Suenaga, "But we try to get them to come. We took the minister around to a number of homes."

Last December, in these Buddhist homes, gaily-decorated Christmas trees filled corners and toys awaited for Buddhist children. For while the Christmas season itself has no religious significance for Buddhists, explains Mr. Kawai, "How can you do anything else when you have little children? They talk to their friends at school and get as excited over Christmas as anyone else."

In school incidentally, Mr. Kawai observes, the Buddhist children do not attend religious classes. "They may say the Lord's Prayer but they are not taught about Jeusu."

And the fact that most of their school friends are Christians doesn't affect them.

"Instead of talking about baby Jesus they are more interested in baby Buddha. . . ."

The "Baby Buddha" was born in 563 B.C. in the south of Nepal. As he grew, this Indian prince became deeply moved, the Buddhists say, by the sufferings and pain around him.

One night he left his wife and son to search for enlightenment and for six years he meditated and pratcised austerities under different sages.

But he could not find enlightenment, until there came a time when he sat beneath a Bodhi tree and then, after six years, finally achieved Buddahood. He was able to subdue all fear and lusts. He began his work, the preaching of the doctrine of Dhamma.

All the suffering and pain in the world is due to craving, the Buddha said, and to overcome this he preached the practice of the Noble Eightfold Path; right views, right thought, right speech, right means of livelihood, right endeavor, right mindfulness and right concentration which was to end in the state of sainthood and the attainment of a state of bliss free from rebirth.

And now, 2600 years later, the Noble Eightfold Path is still being followed now, in a home on Strachan Street instead of on the plains of India.

一万弗を募金し

ニッボニア・ホームを建て増す

一月二十七日開催されたニッボニア・ホーム總會は、現在すでに入寮者が滿員、さらに申込者が增加して擴張の必要に迫られている寢室建て增し案を可決して、これに要する資金を一般から募ることになつた。擴張案は、入寮者の寢室などにあてられている翼の兩側にシングル・ベッド室五つ、ダブル・ベッド室三つ及び係員の寢室等（いずれもフル・ベースメントつき）を建て增すもので

▲目下在寮者十六名と係員二名の十八ベッドが滿員となつているのに、この增築で二十九ベッドと係員室を備えれば、今後の入寮者の出入の早當をつけてちようど手頃なホームとなり、これが最後

市協の住矢ミッッ氏とトロント市協の高橋ジョージ氏が、それぞれの會で擴張案を支持する決議を通過していることを披露、討議の結果滿場一致で案を承認、資金募集方法について協議し團体と個人に援助方を訴える手紙を草案する委員をあげ、近く資金募集を開始することになつた。

既に四名が申込 まだふえる見込

總會は理事長の小宮山牧師が司會し、山家幹事が昨年の運營報告を次のごとく行なつた。

△ホームは滿三カ年の經營を無事に終わり、この間合計二十八名の人々を世話してきた。初年度末に八名二年目末に十名、三年目に十六名の入寮者（男十一、女五。最年長者九十才、八十台が四名、平均年令七十八才）と係員二名で滿員であるが、目下四名の入寮申込者があり、さらに增加する見込み。

△在寮者に對しては毎年のように胸のエックスレー檢査が行なわれているが全員異狀はない。

△昨年中も、三葉會やトロント佛教會の慰問、トロント市協のガス電氣電話、給料、保險等々で一〇、六二〇弗〇八仙で差し引き四〇七弗二六仙の殘金である。

△公認會計士が提出した會計報告によると、昨年度の經費は一〇六、四四弗一七仙、昨年度の收入一一、〇二七弗三四仙（在寮者の支拂い七、一六〇弗五〇仙、州政府よりの補助金三、七八七弗八八仙、維持費としての特別寄付等）に對し支出は食料、醫療費、保險等で一〇、六二〇弗〇八仙で差し引き四〇七弗二六仙の殘金である。

◇

なおオタワ政府や州政府の補助による老年恩給受領者に貸す低家賃のホームを建てる案（三軒分の敷地はすでに山家氏の寄付で購入ずみ）はひと通り說明されたが、更に研究をつづけることにして決定は保留。理事十名中任期滿了の五名には高橋ジョージ（ト市協）、信岡良太郎（ト合同教會）平松豊志（ト聖公會）、上

ホームの役員

ニッボニア・ホームでは總會後ひき續いて理事會を開き本年度の役員を次の如く選定した。

△理事長 小宮山牧師
△幹事會計 山家安太郎
△監督補佐 安仲平

ニューカナ

ク首相が 世界情勢

SENIOR CITIZENS HOUSING DEVELOPMENT

A Hamilton Service Club is considering building low cost housing accommodation in Hamilton downtown area for single and married persons over 60 years of age, with limited income. If interested, please complete coupon, which will be treated confidentially, and mail to Box 539, Hamilton Spectator.

Name .....

Address .....

Age ..... Married ..... Single .....

ST. CATHARINES (Special)

'Ridiculou Net Pair

Two Grimsby women

He reached in, grabbed the driver by the hair and hauled youth out from behind the wheel.

Then he put the baby down in the front seat and made the youth get back into the car. Driving back to the store, he picked up his neighbor and her children, drove them home, then drove the youth to the Mountain Police Station.

フォーラム ニッポニア・ホーム

タエ

今は私達の教會（トロント日系合同教會）の婦人團の豊の部となつている婦人交友會第一回例會に山家安太郎氏を迎えて老人ホームのお話を伺つたのは一九五七年七月十一日であつた。

あの時、先の短かい一世のために新らしい建物を建てすに、古い家を買つて直せばよい等と言つて居られた人もあつた。私は山家氏が、見捨てられた人々のことを案じ、一世の倖せを心から願つて居られることを知つて、その成功を願つてはいたが、一九五九年四月十八日のニッポニア・ホームの開館式に出席して、いたれりつくせりの立派なホームを見たときには、もつたいない思いで胸がいつぱいだつた。古い家を買つて直せばよいと言つて居られた人もニコニコして出席しておられた。

山家氏をはじめ多くの心ある人々に、こんなに思われているカナダの一世は倖せである。

あれから三年、老人ホームに對する一般の人々の理解も出來てきて、この度の増築となつたことは實によろこばしい。ニッポニア・ホームを中心に、カナダ系人の老と若きとが理解し愛し合つて、益々倖せに生きて行かれることを心から願つてやまないものである。

mi 819, M. Tanouye
ta 718, M. Nobuto
hiro 706.
Yanagizawa 830 399
677, G. Terikita
mitsu 647, R. Yano
saka 610, J. Abe
SHAR
942 Pa
Peter
St
R
CITY
EST RESULTS
ERTISE IN
INENTAL TIMES
The Judo Educational
BASIC AND ADVANCED
OF KODOKAN J
GLENN KAWANO, Kodo
131 Coxwell Ave.
DUNDAS UNION
YOUR SHOPPING

◇寄付感謝

—増築資金寄付御禮—

次ぎの諸氏から御寄付を頂きました事を深謝致します

ニッポニアホーム理事會

△二百弗　無名氏

△百弗　兵頭夫妻

△五十弗宛—佐野エスエッチ、里田初見、山田エス、水野譲治

△廿弗　永延エム

△廿五弗宛—清水夫人、河邊友喜、瀧本直吉、大堀テイビー、三井眞春美、中川義治、五郎丸エム、久藤初音、畑下實、梅月高市、西村正一、露木十代、宮本タエ、峰岡積雄、矢島エス、伊藤ダブリユエッチ

△廿弗宛—吉富芳忠、荻野丈治、平山ソデ、東俊一、白石吉太郎、前川ケイ、水谷エフジー、橋本吉次郎

△十五弗宛—常盤政治、山崎スノ、畑中アイ、宇都宮芳榮、三角エスオー、玉根ジエイエス

△十弗宛—吉田忠次郎、室田エスエム、高橋エス、福坂エス、野口ケイ、光端シイ、中川ケイ、西川エス、淺野健藏、村上エッチ、矢吹清二郎、賀川エス、佐藤秋三郎、久藤ローラン、山本兩平、田ノ上イー、大垣淺次、本田源一、伊藤トキオ、戸田武、須山邦夫、堀谷エフジー、橋本吉次郎

△五弗宛—畑中アイ、宇都宮芳榮、三角エス・オー、玉根ゼイエス

△十弗宛—吉田忠次郎、室田エス・エム、高橋エス、野口ケイ、光端

シー　中川ケイ　西川エス

淺野健藏　村上エイチ　矢吹清二郎　賀川エス　佐藤秋三郎　久藤ローラン　山本兩平　田ノ上イー　大垣淺次　本田源一　伊藤トキオ　戸田武　須山邦夫　堀內芳太郎　藤田又衛門　後藤照吉、山口照五郎、井上猿吉、吉富豊作、室田テイヨ、大澤エム、野間ワイ、高田ケイ、平井テイエフ、中ジイテイ、兵頭正夫、馬場イー、大友アイ、川口サ

◇寄付感謝

増築資金寄付御禮

引續き左記の方々から御寄付を頂きました、厚く御禮申上げます

ニッポニア・ホーム理事會

△百弗宛＝モ市山岡清六郎

ト市日系人合同敬會

△五十弗宛＝寄眞兄弟、大村兄弟、江淵榮

△廿五弗宛＝上出敏夫、比嘉盛善、森野喜久造、銀座カフエー、河部トム

△廿弗宛＝內田エイ、長瀧谷彦三郎、梶浦万龜次、佐野又三郎、吉富豊作、難波猛夫、久芳光進、中島卯三郎、清水小三郎、小山ソ

ng sing ラ 婁) or

NTO

佐々木茂

記者

楽しみであり又生き甲斐をさえ感じているようでもあつた。従つて用事を頼みに來る者は遠慮もいらぬわけで、毎日朝早くから夜はおそくまで客足の絶え間なく昨日は五人今日は六人という風に人の來ぬ日はそれこそ一年中に一日もないといつてよい位であつた。或る寒い冬の日のことであつたが、木という木はみな凍つて枝は全部頭を地につけ、電線はロープのように太くなつて今にも切れそうに見え、家の外の廣場はつるつるに凍つて鏡のように光つていた。

『今日ばかりは誰れも來れんだろう』

ケーと妻の春代は、そんなことを話しながら窓越しに外を眺めていると、少し坂になつた所からビーさんが四つんばいになつて近寄つて來るのでビックリした。

ーは呼び出されるのであつた。白人はひどく立腹した顔で、

『今年こそどうしても仙造の土地を取り上げる積りだ、毎年々々土地代が拂えぬようでは自分の方も困るから、今日限り土地を返してくれ』とどなつた。

仙造は英語は良くわからないが、白人の地主がどんなことを言つているか凡そ想像はついているから、唯おどおどとして隅の方でその結果を案じているのであつた。

ケーはいつものことで、仙造の窮状を訴え同情を求めることに苦心して半日以上も時間をつぶすこともあつた。然しその地主も、仙造に賣つた土地がどんな土地であるかは自分自身で既に經驗濟みであつたから、土地代をよこさぬと立腹し

の手入れもおくれ勝ちになり、夏と言えば日足は短かく、秋は霜が早くて作物は立派に出來ていても全部の收穫を終えるということは殆んどなかつた。或る年に秋苺の出盛りに大霜に見舞われて無殘にやられてしまつたという惠まれぬ土地であつたから、ケーはいつも其の土地は早く見切りをつけて他へ變るがよいと注意するのであつたが、御本人はやつぱり其の土地に愛着があるらしく、正直者の彼は冬季に入ると山働きに行つて自分の食料や夏の欠損の補いに努力していた。

相變らずケーの家には來ないが、時たまタウンの眞中で出逢つたりすると大變である。どもりども話すので時間がかかつて仕方がない。でもなつかしげに近寄つて來て丁寧に頭を下げ

然し彼は全く正直で善良で此の世の惡を知らぬ人間らしいが、心の美しい善根の人柄で、どうか幸福に暮して欲しいと思つた。

〔以下二三頁へ〕

家族一同
43 Pitcairn Cres.
Toronto 16, Ont.
露木千代
49 Manor Road, W.,
Toronto 7, Ont.
淺井實
貞子
デニス
ギャリー
5 Mile Street
Val-Albert, Ont.
家族一同
10 Norma Cres.,
Toronto 9, Ont.
酒井岩一
家族一同
114 Kingsview Blvd.,
Weston, Ont.
日本觀光協會
トロント事務所
所長　奥山皓太郎
他一同
48 Front Street West, Toronto, Ont.
Telephone EM. 6-7140
バンクーバー
トロント
ロンドン
熊野一家
酒井安雄
家族一同
戎中につき年末年始の暇を欠きます
85 Glenside Ave.,
Toronto 8, Ont.
62 Rosethorn Ave.,
Toronto 9, Ont.
Phone RO 6-5565
Before any detailed s begun considerable structural and documentary research will have to be undertaken.
SITE DIAGRAM
RUSHBURN PROPOSALS
MICKLEGATE

清水先生を惜む (上)

山家安太郎

清水先生が急逝されてすントから同行して、なにに

ダウン）というので、要点には英語を入れるので、ハミルトン市長が感動し、その說教と引證して奥さんに

清水先生を惜む (下)

山家安太郎

專者であつた。時代が英雄を作るか、英雄が時代を作るか、戰後人心混亂の時代

map be-



手向草

鷲村

ケーはその頃フレザー河畔に住んでいた。彼には少しばかり確実な収入の道はあつたが、數人の子女を養うには充分とは言えなかつた。然し彼はそんな事は一向平氣で、毎日々々家を外に、人からの頼まれ事や×會のために專念していた。それが彼にとつては無上のことがあつた。

◇

こんなに遠慮なく來られる家であつたのに、この村に永年住んでいる仙造というドモリで獨身の老人だけは一度も來たことがなかつた。しかし毎年秋になつて收穫が終る頃になると、きつと一人の白人からちやんと手紙が來て、その年の收穫の中から幾ばくかの金を送つてくるのであつた。

さて仙造の土地というのは、この地方では×村の北海道と悪口を言われていた程北方の山の麓で、春はいつまでも雪にとざされて畑にするのは不思議な位であつた。いつの頃か一度日本で結婚したけれど、女が他國の者だといつて肉親の者が家へ入れてくれなかつたので再び旅に出て暮したが、その女は心掛けがよく、先祖の石碑を切つてくれたり心を盡してくれたので、彼女がいつまでも結局利息だけ取つて又一年作らせてくれることになり、毎年ケーは仙造から感謝されていた。

『ミミ、ミステー・ケーさん、ご、ご恩は、い、い、一生忘れません』

と、どもりどもりお禮を言つていたが、それが何年か後に事實となつてケーは仙造から助けられることになつた。不思議なことである。

祝聖誕 賀新年
安齋蓮治

謹賀新年
客年中は皆様の絶大なる御引立と御支援を蒙りました。今年もよろしく御願申上ます

◇寄付感謝
—増築資金寄付御禮—
次ぎの諸氏から御寄付を頂きました事を深謝致しますニッポニアホーム理事會
△二百弗 無名氏
△百弗 兵頭夫妻
△五十弗宛—佐野エスエッ、谷エフジー、橋本吉次郎、山
△二十五弗宛—畑中アイ、宇都宮芳榮、三角エス・オー、玉根ゼイエス
△十弗宛—吉田忠次郎、室
シー、中川ケイ、西川エス
淺野健藏、村上エイチ矢
吹清二郎、賀川エス、佐藤
秋三郎、久藤ローラン、山
本兩平、田ノ上イー、大桓
麻次、本田源一、伊藤トキオ、戸田武、須山邦夫、堀
内芳太郎、藤田又エ門

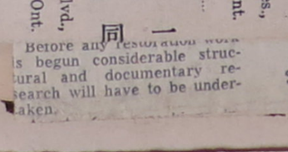
◇寄付感謝
增築資金寄付御禮
引續き左記の方々から御寄付を頂きました、厚く御禮申上げます
ニッポニア・ホーム理事會
△百弗宛＝モ市山岡清次郎ト市日系人合同敬會
△五十弗宛＝青、兄弟、大村兄弟、江、
△廿五弗宛＝上出敏夫、比嘉盛善、森野喜久造、銀座カフエー、河部トム、
△廿弗宛＝内田エイ、長瀬谷彦三郎、梶浦万龜次、佐野又三郎、吉富豊作、難波猛夫、久芳光道、中島卯三郎、
清水小三郎、小山

The Judo Educational
BASIC AND ADVANCED
OF KODOKAN
GLENN KAWANO, Kodo
131 Coxwell Ave.
DUNDAS UNION
YOUR SHOPPING

mi 819, M. Tanouye
a 718, M. Nobuto
hiro 706.
Yanagizawa 830 399
677, G. Terikita
mitsu 647, R. Yano
saka 610, J. Abe
ST RESULTS
ERTISE IN
INENTAL TIMES
SHAR
942 Pa
Peter
St
R
CITY

Season's Greetings
賀新年
ゴールデン・ドラ
(金龍酒樓)
GOLDEN DRAGON CHOP
131-A DUNDAS STREET WEST, TORONTO
PHONE EM. 8-2475

祝降誕 賀新年
田中時一 キズエ
田中光顯 綾子(シャリー) 平(ローデック) 光(ヴォーン) ヒバリ(アリソン)
64 Northumberland St., Toronto 4, Ont. Phone LE. 4-5250
春原順一 スノハラ美井 家族一同
159 Sunnyside Ave., Toronto 3, Ont.
新本佐一 久代 家族一同
41 Charleston Road Islington, Ont. Phone BE. 2-1807
佐々木茂 家族一同
92 Robina Ave., Toronto 10, Ont. Phone RU. 1-0046
高橋時右衛門 靜 家族一同
201 Sherbourne St., Toronto 2, Ont. Phone EM. 4-5672
85 Glenside Ave., Toronto 8, Ont.
戸栗時三 登美江
37 North Hills Terrace Don Mills, Ont. Phone HI. 4-0273
常盤政治 ヒロ 家族一同
3 Southview Ave, Toronto 4, Ont.
碪綿藤一郎 多希美
1292 Dundas St. East Toronto 8, Ont. Phone HO. 1-5126
寺川唯治 博 家族一同
43 Pitcairn Cres. Toronto 16, Ont.
露木千代
49 Manor Road, W., Toronto 7, Ont.
62 Rosethorn Ave., Toronto 9, Ont. Phone RO. 9-5565
原藤サダノ
108 Melville Ave., Toronto, Ont.
喪中につき年末年始の禮を欠きます
原藤哲夫 芙蓉 ランデル
108 Melville Ave., Toronto, Ont.
原藤玉枝 ブレンダ スーザン ゴードン
185 Linden Ave., Scarboro, Ont.
海浦實 貞子 デニス ギャリー
5 Mile Street Val-Albert, Ont.
酒井岩一 家族一同
114 Kingsview Blvd., Weston, Ont.
酒井安雄 家族一同
10 Norma Cres., Toronto 9, Ont.
喪中につき年末年始の禮を欠きます
バンクーバー トロント ロンドン 熊野一家
禮を欠きます



Before any restoration work is begun considerable structural and documentary research will have to be undertaken.

清水先生を惜む (上)

山家安太郎

清水先生が急逝されてすぐ(ント)から同行して、なにに

(ダウン)というので、要点には英語を入れるので、ハミルトン市長が感動し、その說教を引用して奥さんに

清水先生を惜む (下)

山家安太郎

導者であつた。時代が英雄を作るか、英雄が時代を作るか、戰後人心混亂の時代

手向草

〔二二頁よりの續き〕

その後戰爭のためにケーの一家も仙造もア州に移動したが、遂うこともなく一二年を過ごした。

仙造はア州に移ってからはもはや土地を取り上げられる心配もなく、夏はピーツ畑に冬はロッキーの山働きに行ってせっせと働くので小金がたまって、ピーシー州に居る時よりも樂であった。それに引きかえケーの一家は畑の仕事がうまくやって行けず收入は少く、可愛がっていた娘は大病になり醫者から見放されたりして悲しい日ばかり續いて不幸のどん底にあえいでいた。ケーが或るH病院へ娘を見舞に出かけて乘物を待つ間、公園のベンチにしょんぼり腰を下して同鄉のO氏と話している處へ仙造がやって來て、

『ミミ、ミスター・ケーさん、ちよっちよっちよ』

と言って公園の便所に引張って行くのでケーはびっくりして、

『どうしたんかあ』

と尋ねると、胴卷の中から札束を出して、

『ああ、あんたの所じゃいいい、今が一番氣の毒で、き、きのどくで、さき是れをつこうてつかあさい。直ぐもどさんでもええから』

と言うなりケーのポケットにつッ込んで、ケーが辭退するのも聞かず、どこかへ行ってしまった。

ケーはきまりも悪いが、それよりも家に持って歸ったら名譽心の強い我儘な妻の春代が文句を言うだろうと心配でならなかった。

案の定、春代はその話を聞いて、

『あんな土地代も拂えんで取られそうだった貧乏な人間から、お金を借りるとはとんでもない。早く返して來なさい』

と言ってふくれた。

『こつちから頼んだんぢやない。向うからわざわざやって來て公園の便所にまで引張って行って、あんたん所は大病人が出來て氣の毒ぢやと言うて無理矢理にポケットにつッ込んでからどこかへ行ってしもうた』

『ぐずぐずするからよ、直ぐ追つかければ良いのに』

『男が、返す返すと言うて後を追つかけられるか』

『勝手にするが良い、わたしはその金には手をつけんから』

一言々々、喧嘩腰になって春代は決して敗けなかった。然し二年餘りも重病人を抱えたケーの家庭では、春代は手をつけなかったがその金はいつの間にか消えて無くなつていた。或は冬のコール代に變つたかも知れない。

翌年の春、ケーの一家はア州の内ではあるが遠方の場合に一番大切な信仰も薄くて弱い一家は精神的にも物質的にも困憊の極に達し便利な所に住んでいる同鄉のO氏の所に一泊まさせて貰うことにした。そこで

Second Section
PAGES 25-46

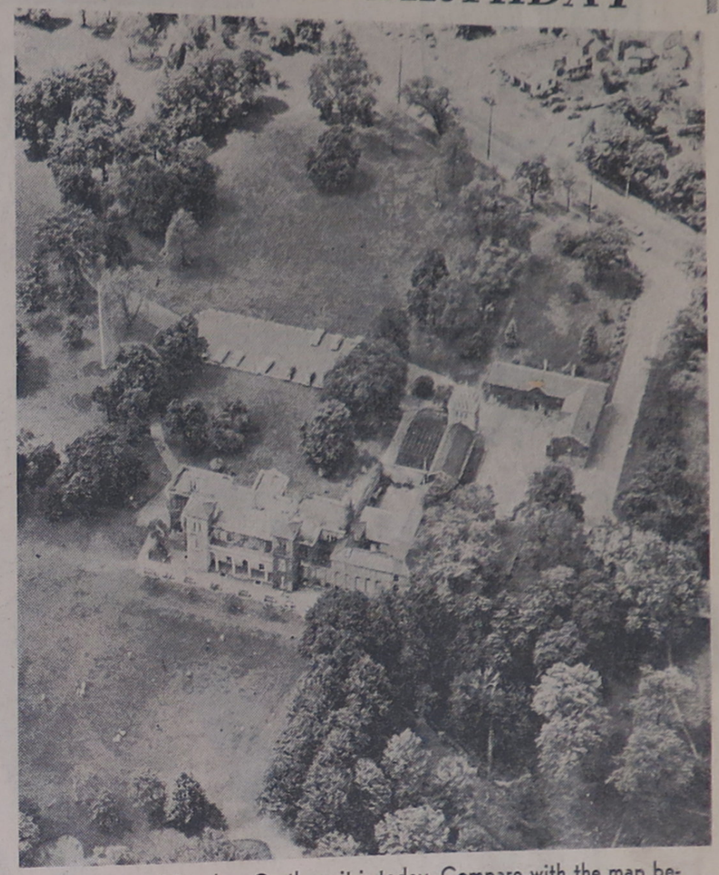
The Hamilton Spectator
HAMILTON CANADA TUESDAY FEBRUARY 20 1962

Women's Pages
Classified Advertising

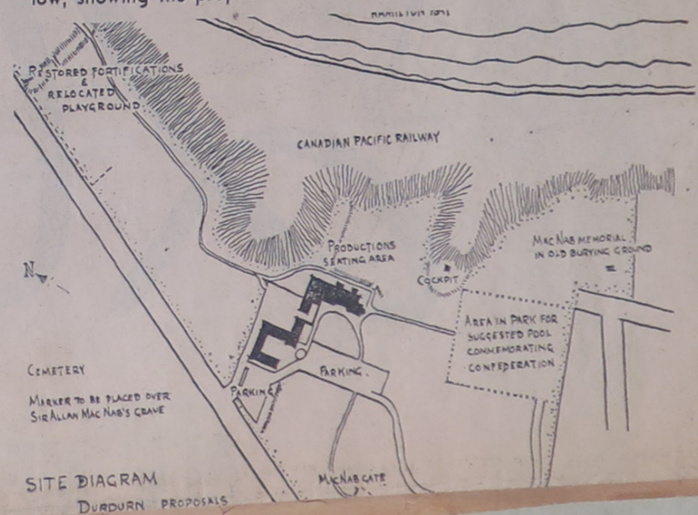
CITY GETS AMBITIOUS PLAN TO MARK CANADA'S 100TH BIRTHDAY



Dundurn Castle — "finest and largest old house left in Ontario from the days of Upper Canada . . ."



Aerial view of Dundurn Castle as it is today. Compare with the map below, showing the proposed centennial development of the site.



Will Dundurn 'Live' Again?

By FRED MARSHALL

Spectator Staff

DUNDURN Castle will be "brought to life" as it was in its heyday more than a century ago, if the historical, impressive Regency-style building is made the core of Hamilton's centennial projects.

This is the essence of a 37-page report on the restoration of the castle, prepared by Anthony Adamson, associate professor of town planning, University of Toronto.

The need to restore the home of Sir Allan MacNab, the sidewhiskered soldier lawyer - politician who injected ambition into Hamilton and became Prime Minister of the United Canadas, has been the plea of historians for many years.

A century ago this summer, the Laird of Dundurn, who stood down as party leader in favor of his friend, Sir John A. Macdonald, Canada's first Prime Minister under Confederation, died in his castle built on the strategic Burlington Heights.

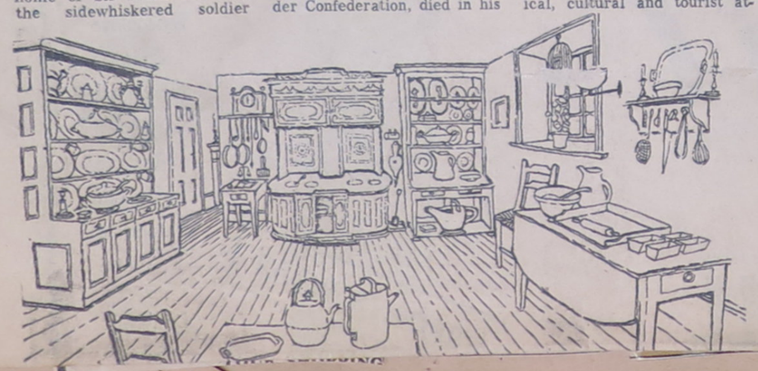
And in five years time Canada celebrates its 100th birthday since Confederation.

To mark the occasion the government will allocate grants towards permanent centennial projects.

Support for the renovation of Dundurn (Gaelic for "fort on the water,") as a historical, cultural and tourist attraction has become wide and influential since Prime Minister Diefenbaker announced that $100,000,000 woud be set aside for local centennial projects.

Mr. Adamson, who prepared a report on the subject in September, 1961, before the government offered grants, says in his new survey that Hamilton needs to encourage civic pride by restoring the house of one of its greatest citizens.

"No other city in Canada, and very few in the United States" could compete with such a restoration.



'Core' Project

This is the finest and largest house in Ontario left standing from the days of Upper Canada and Canada West, Mr. Adamson says. But its potential, he adds, is almost completely undeveloped.

He has no hesitation in recommending the restoration of Dundurn as the core of a centennial project and bases his recommendations on the following assumptions:

- The restoration will be accepted officially as a centennial project with a grant of one-third of the cost becoming available.
- As such, a budget in excess of $500,000 will be ately known of its history.

"Although its director (Mrs. Gwen Metcalfe) has with remarkable skill arranged the displays which are available to her, these are largely collections of disconnected curiosa shown with the minimum of expense, and are unworthy of the building, Sir Allan MacNab or the city," Mr. Adamson says.

In fact, the memory of Sir Allan's life is scarcely sensed in Dundurn.

Except for the aviaries in the west wing, the out-buildings and courtyards are used for storage and as maintenance shops for the board of parks management.

And the remarkable separate octagonal building in the park, which appears to have been built as a cockfighting pit, is unique in North America — "but is in bad repair and serves to store used lumber."

Research

Lacking a definition of purpose in the past, Dundurn has become a repository of donated historical, artistic and scientific objects.

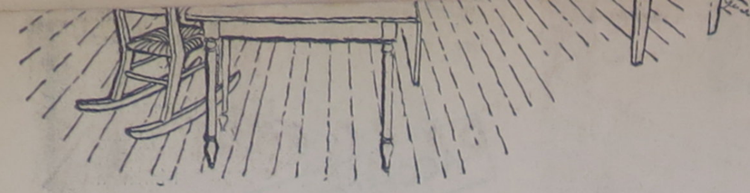
Before any restoration work is begun considerable structural and documentary research will have to be under-taken.

と言うなりケーのポケットにつッ込んで、ケーが辞退するのも聞かず、どこかに移轉していた。或るぼかぼかと暖かい日の午後のこと突然にまた仙造が訪ねて

先きに見當をつけて、途中便利な所に住んでいる同郷の○氏の所に一泊まさせて貰たよ。これ二十弗札ばかり

『おぢさん、お金を長い間有難う今全部を持つて來造の方からケーに受取つたとの通知もくれずそのまま何年か過ぎた或日

くて弱い一家は精神的にも物質的にも困憊の極に達した。それでも何んとかして



Sketch showing a suggested restoration of the kitchen.

Cost: $465,000

imated cost of restoring rn Castle is set at $465,- including $257,000 for act- nstruction and $107,300 coration and furnishings. his report, Anthony son — who was instru- in the restoration of Canada Village — sug- he work could be done 22 months.

HE PLAN is accepted, pected that about $155,- ld be forthcoming from eral government.

e of Ottawa's require- is that there be some ial participation, it is d that the city would eive aid from Queen's

hat portion of the re- $310,000 cost might cted from the provin- ernment is uncertain.

Architect Anthony Adamson was retained by the city last spring to recommend ways of developing the castle's historical value. His first report was presented last September.

THE CASTLE was built by Sir Allen MacNab in 1832-36 and became a social centre of the region where the Prince of Wales, later King Edward VII, was entertained in 1860.

The city purchased the magnificent, 72-room home and its grounds for $50,000 at the turn of the century.

There is an interesting reference to the cockpit building, which has an octagonal pit in a room poorly lit and not elegantly finished internally.

Along the walls appear to have been benches, and an early plan calls it a "poultry house."

Entertainment

A Methodist minister of the times was not allowed to visit it — "and the present extent of examination seems inescapably to indicate that it was built to house the Regency sport of cock-fighting."

In Mr. Adamson's list of restoration items appears $1,-000 — "to purchase two horses and six fighting cocks."

To dramatize the links with the past, Mr. Adamson throws out what amounts to a challenge — that Hamilton becomes the first North American city to present an historical pageant "in sound and light."

In Britain and Europe this technique has been used successfully as evening entertainment.

It involves recordings of many voices, music and sound played in accompaniment with an appropriate play of lighting upon and inside a great building and on the banks and, trees and nearby structures.

He recommends that a sound and light production be made of the history of the Dundurn site which would include:

The story of the glacial formation of the harbor, early settlement, the War of 1812, the building of Dundurn, the rebellion of 1837, the Union of Canada, the Prime Ministership of Sir Allan MacNab, the life of Dundurn Castle during his period, the coming of the railways and steamships, Confederation, the difficulties of the city's early growth, its industrialization and the two world wars.

Like Stratford

A long stage could be built near the cockpit out of proceeds earned by the production.

And, says Mr. Adamson, this stage could be developed as a children's theatre, with the cockpit building serving as a focal point for entrances and exits and as an "imaginary" house, castle, church or prison.

"There is nothing to prevent the cockpit becoming for children's theatre in North America what the octagonal building in Stratford has become for Shakespeare," he suggests.

Within Dundurn itself a complete roster of daily activities should be on view to visitors and the house used as much as possible, adds the report.

These activities could be incorporated into a program including cooking, weaving, quilting, soap-making and the use of all early equipment.

He envisages the great laundry hopper boiling clothes in the basement, fires burning in the grates, the dumb waiter in operation, the occasional sound of an early piano, a carriage coming to the front door. . . "placing Dundurn in the forefront of restorations and greatly increasing paid admissions."

Waxworks, Too?

It may be possible to have the "news" each day as it was printed in Hamilton a century or so ago, displayed behind glass. And the fighting cocks could strut about the cockpit with hens in the hen house, and poodle dogs on view.

Although purists might scorn the idea, Mr. Adamson feels waxworks of the MacNabs would be popular.

In short, the house must be brought to life.

He also suggests historical talks in the small lecture room, followed by a tour of the house, and musical evenings in gas and candlelight.

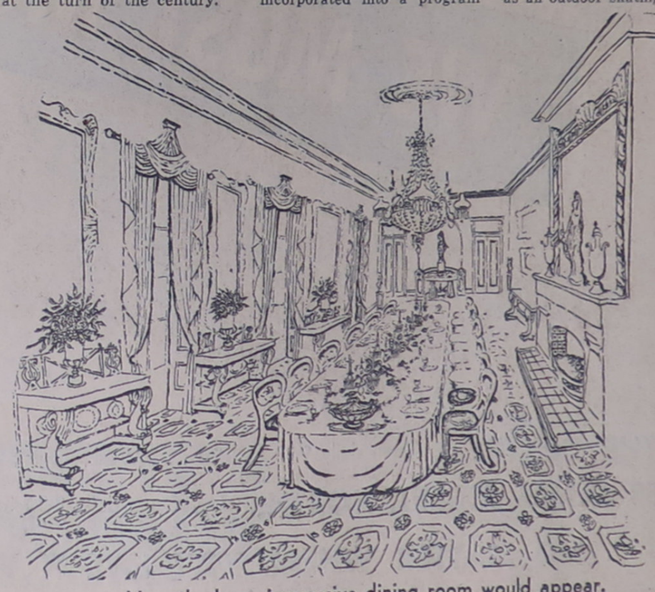
A restaurant in Dundurn would be essential, says the report.

100 Fountains

To complement the restoration part of the 1812 earthworks to the north of Dundurn, incorporating a children's playground, might be considered, along with a pool to commemorate Confederation on the site of the old "garden" of Dundurn.

This could be one foot deep containing 100 small fountains marking 100 years of confederation.

In winter it could be used as an outdoor skating rink.



How the long, impressive dining room would appear.

22 JOHN NORTHWAY
STORES TO SERVE YOU

240 Yonge Street
Sunnybrook
O'Connor
Lawrence
Cloverdale
Dixie
Thorncliffe
Eglinton
Northpark

40% OFF

FEB. 21st thru 24th
WEDNESDAY, THURSDAY, FRIDAY, SATURDAY

4 DAYS ONLY

REATEST BARGAIN EVENT OF A LIFETIME
MOUS CHAINS . . . JOHN NORTHWAY & LADY ELLIS

一九一八年のスパニッシュ・フルー流行の時、先生はまだ學生であつたが、赤川牧師夫妻がストラスコナ校で特設病院を開いた時、清水、引田の二青年が雜役夫として志願し命がけで働らいた。さしもに猛烈をきわめたこのフルーがようやく下火の諸氏から御寄付を頂き

◇寄付感謝

何等予告もなく、卒然と逝かれた事は、神の御攝理とはいえ惜慕に堪えない次第である。

先生はこの高遠な理想を實現するために必要な日・英語の表現は、筆に口に自由自在だつた。あれほどの學者になるまでには青年時代からの苦學と勉强はなみ大抵ではなかつたようだ。それは一身の出世や金儲け

す時が來た。即ち戰時中から戰後にかけての日系人の東部カナダへの再定住について先生が拂われた大きな努力こそは、まさに逐える民を導いたものであつたといえる。日系人再定住地の視察や慰問旅行に度々

清水先生を惜む (上)

山家安太郎

清水先生が急逝されてすでに二カ月余、むかしの人は『人の眞價は棺をおいて事定まる』といった。生きている間はアラばかり探して、とやかく批評されるが死んでしまえばアラがないから眞の人の價値が浮彫りになつて殘るのであろう。私は晩年になつてから先生とたびたび會う機會を與えられた。一九五八年トロントで開かれた日系合同教會牧師・信徒協議會から、教會史編纂のお手傳いをし、今年ウイニペッグで開かれた協議會にも、ずつとトロントから同行して、佐々木一周一君と三人で長旅の徒然を愉快に語り合つた。ウ市着後も同じ宿舍に泊り、協議會第一日の朝餉は、高島義親兄宅で佐々木君と先生と三人で、みそ汁の御馳走を賞味した。會場に入つては、先生の司式で聖餐式を行ない、午餐まで先生といつしよであつたので思い出はつきぬ。

先生から最後の說教を聽いたのは六月初めのハミルトン日系合同教會の獻堂式で、題は『逆さの世の中』だつた。幸い清水青年は助かつたが、引田賢高君はその算

(二二頁よりの續き)

んでいて、年に一、二回バンクーバーで開かれるAOTSクラブ（今の教會男子の會）の午餐會やビーテーエーの年會などで會つた。

その頃、日系人でこうした會合に出席する人はきわめて少なかつたので、自然近づきになつた。教會を持たれてからは、出晩毎に牧師館で御厄介になつていた。先生が牧者としての活動は神學生時代からオカナガンやオーシャン・フォールスの開拓傳道をはじめとして一九二六年からバンクーバー教會で二世のために英語禮拜をもたれ、一九三六年には七十一名の會員を以て二世教會を創始され、二世の指導に特殊の努力を拂わんでいた。

一九一八年のスパニッシュ・フルー流行の時、先生はまだ學生であつたが、赤川牧師夫妻がストラスコナ校で特設病院を開いた時、清水、引田の二青年が雜役夫として志願し命がけで働らいた。さしもに猛烈をきわめたフルーがようやく下火になつた時、氣がゆるんだせいか、清水、引田兩人に傳染し枕を並べてたおれた。幸い清水青年は助かつたが、引田賢高君はその算

清水先生を惜む (下)

山家安太郎

第二次世界大戰——日系人にまで、いつまでも祝カナダ人の總移動・再定住を通して、先生の實力を試す時が來た。即ち戰時中から終戰直後にかけての日系人の東部カナダへの再定住について先生が拂われた大きな努力こそは、まさに迷える民を導いたものであつたといえる。日系人再定住地の視察や慰問旅行に度々出られた時の先生の報告書こそ、日系民族百年の計を樹て、カナダの國策に添つたものであつた。ビーシー大學はこの報告書に感激して、先生に神學博士號を贈つたものであるといわれる。

その旅行を終つた時、先生が各地への禮狀の一節に『七千數百哩の旅行をし、四十六カ所を訪問し、四十二回の講演をさせて頂き千三百余の日系人と一千名の白人とにお目にかかり、カナダ日系人の現狀に關して種々見聞させて頂いた』『私の至上の喜びは至る所日系人の皆樣が、戰時戰後の苦難に打ち克たれて、再定住に向つて驚くべき發展をして居られるのを見せて頂いた事でした。在留同胞に對する私の祈りは、彼等の發展が眞實なる精神的基礎の上に築かれる事によつて恒久的なものであり、且つ全カナダ人に、全世界の

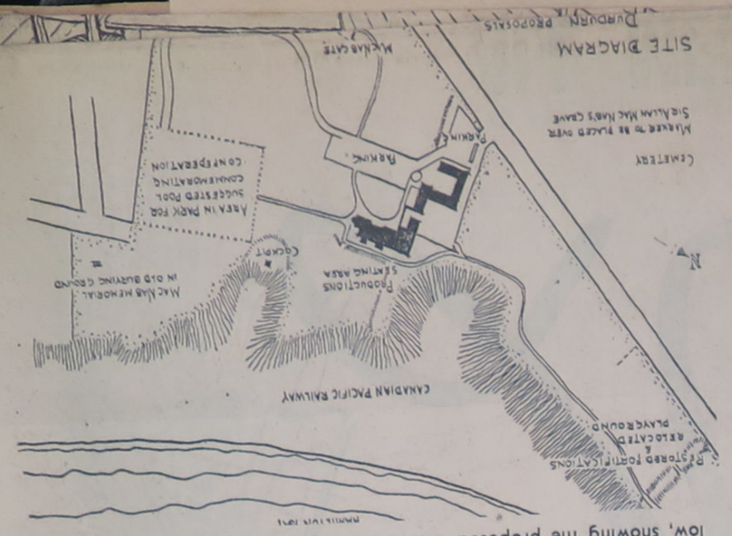
（一面よりの續き）

ことにした。そこで代は借金の一件は恥じさなかつた。

◇寄付感謝

次の諸氏から御寄付を頂きました事を深謝致しますニッポニア・ホーム理事會

△七十五弗 トロント市二世ウイメンズ・クラブ
△五十弗宛 森 助五郎 福島ハリー
△廿五弗宛 エリオット英子
△廿弗宛 小田英夫、安松小作、谷口六三郎、延藤一太、モ市日系合同教會
△拾五弗宛 的場仁市、西田中フジ子、村ジョージ
△拾弗宛 上杉和夫、前田束、西本英夫、神田良雄、樽山純、庄岡基、門田勘太郎、西村シゲ、篠崎虎之助、佐藤信次、岡宗三郎、宮崎エイ・エス、江口安雄、仁科庄三
△五弗宛 泉ハピー、中島小龍、佐藤テイ、枝村勘太郎、加治エム、小林知明、友次勇、吉用隼之亟、友次夫人
△二弗



Aerial view of Dundurn Castle as it is today. Compare with the map below, showing the proposed centennial development of the site.





ARK CANADA'S 100TH BIRTHDAY

n Spectator

AY FEBRUARY 20 1962

Women's Pages
Classified Advertising

Vol. XXVI.—No. 70 Sept 12/62



—photo by JACK HEMMY

ISSEI TURNS FIRST SOD FOR CENTRE

TORONTO.—Turning the first sod for the Japanese Canadian Centre of Toronto is Mr. Masanobu Washimoto, 84-year-old Issei pioneer who has been in Canada for 62 years. Assisting Mr. Washimoto are: (l-r) Harold Yoneyama, Chairman, Board of Directors of the Centre, Bob Kadoguchi, past-chairman and Master of Ceremonies Mr. Washimoto, Consul Kazuhide Komuro and His Worship Mayor Nathan Philips of Toronto.

21/7/62

コックとナース入用

成後、九月初めから入寮者が増すので、もう一人コックさん雇いたし、普通家庭料理が出来ればよし、また産婆か看護婦の経験ある人雇いたし、希望者は至急お知らせ下さい。給料や詳細は面談 理事会

In the past 100 years the original translations have been completely revised, one of the chief translators being Archdeacon J. A. MacKay. Education among the Indians is in English but there continues to be a demand for the Scriptures in the native language. In 1961 the Plains Cree Bible was reprinted by The British and Foreign Bible Society and 1,200 New Testaments and 800 Bibles were supplied to the Canadian Bible Society. The annual distribution in all Cree dialects is about 500. A Cree Bible is sold by the Canadian Bible Society for $2.50 which is $1.25 below cost.



Archdeacon J. A. MacKay
Setting Type of the Cree Bible for the Bible Society

Vol. 14, No. 1495 Nov 30/62 Vol. 14, No. 1494

（一）

日本の移民歴史は、この百年の世相の裏街道である明治元年、日本の移民第一號がハワイの土を踏んで以来九十四年、その間、戦争あり、不況あり、時代は目まぐるしく變轉した。〝移民基地〟神戸港から船出する移民達の姿は、その儘わが日本の近代裏面史の縮圖と言つてよい、然し海外に散らばつた移民は、既に二世から三世の時代に入りつつある、荒地、風土病と戦い、現地人の虐待に耐えながら、蒔いた種が漸く花を開き、實を結びつつあるとでもつた

先人の捨石いま結實

苦しかつた日本移民の足跡

我國の最初の移民は、アメリカ人移民業者の手で、集められたハワイ移民だつた、明治元年五月十七日、初のハワイ移民百五十三人が渡世艘人丸で、三年契約の出稼ぎだつた

當時、政府の体制は十分でない、移民保護の方法もなかつた、移民の半分以上が渡世艘人丸で、月四弗、三年契約の出稼ぎだつた

神戸を船出した、日本とプラジルが移民で結ばれた歴史的な日だつた

然し、現地で待受けて居たのは彼らが夢見た新天地ではなかつた、數年來のコーヒーの不作、コーヒー栽採取して毋錢ナリの請負勞働、雪ふらない半年位なら移民達は、

四人の所持金を弗と交換する爲かき集めた所、僅か九百圓しかなかつたと云う貧しい人々の群であつた

日露戦争が終わり、日本は戦勝氣分の明治三十七年（一九〇四）六千（表）

（二）

やがて明治十七年、ハワイ政府と日本政府との間に「移民條約」が締結され、翌年第一回「官約移民」九百四十四人がホノルルに向つた、然し當時の日本は不況のドン底にあるため移民の募集にも「應募者はそれに幾倍もし「移民ばかりでなく、貧困の落ちこぼれ者あり、兵士崩れの落ちこぼれ者あり、刺青する者あり、ろう、斬髪、四肢五體揃つた者、と云う「もの」移民九百四十四人を乗せた東洋丸が、横浜港を出港したのは、明治十八年（一八八五）六月九日（表）

「ナイオト號は奴隷船だ」「天竺に連れて行つて生血を吸う」などの噂が、宣傳不足もあつたものである

神戸移住斡旋所の配慮によると、當時、ハワイ移民は變わらず「と政府に流付して居る、また明治四年、神戸に入港した英國船の報告には、第一回ハワイ移民は、同じ頃、同島に出稼ぎ移民した四十二人の中、半數が貧乏死したと云う「外人監督の酷使と飢渇の物語」も殘つて居る

は異國を散り散りになつて放浪した、是より先、イタリア政府はいち早くブラジル移民を中止して居たが、事情にうとい日本からこの時第一回移民が繰込んだわけで、移民の苦闘は當然だつた

「日雇い土方で一日一圓入十錢、一月五十圓稼げば苦闘だけで、築き上げたのだ」と、その頃の移民の實情を、現日伯協會事務長

旋會社）渡航費三百圓と、支度金五十圓の證文を入れ入植後十年かかつて元金、利子を返濟した、ゆえに一百五十圓で身賣りしたのと同然だ、明治、大正移民に政府は何の保護をしてくれなかつたろう、海外同胞の今日の姿は、凡て移民の自力で

◇寄付感謝
次の諸氏から御寄付をいただきました事をお知らせ致します。ありがとうございました。
△二百壹拾五弗 伊藤一雄
△壹百弗 矢野テイジ
△五十弗 沖敏トシ
△三十弗 小川市太郎
△二十弗 高山市三郎
△十弗 佐藤雅幸 野奈雅幸 仙川幸治 大岡三郎 藤ジョージ 兒玉夫人 松井アヤ 尾崎ヨシ 伊藤ヨシ 原ヨシ 登山ヨシ 藤ヨシ 山ヨシ 若宮ヨシ 木村ヨシ 田

Authorized as Second Class Mail, Post Office Department, Ottawa.

Tuesday, January, 1, 1963

Vol. No. 15, No. 1501



大陸時報

THE CONTINENTAL TIMES

417 Dundas St. West
TORONTO, ONTARIO
Phone EM. 6-1888
Published Twice Weekly
TUESDAY and FRIDAY
Publisher and Editor
Y. IWASAKI
Rates:
$7.00 A YEAR IN ADVANCE

新年号

第五

カナダ文學に思う

東京本社支局長　東　良三

私が百科辭典刊行會からもとめられた「カナダの文化」は教育、文學、音樂、美術、演藝、スポーツといつたカナダのカルチュアを表徴する總括的なものであつて、それを書き上げるために、隨分多くの資料をあさねばならなかつたが、有名大學の文科にはロシア、フランス、イギリス、アメリカ、ドイツ、ギリシャと言つた「文學講座」を設けて研究を重ねているけれども、カナダ文學となると、全く問題にされていない、恥ずかしきに至つては「一体カナダに文學と言う程のものがあるんですか」と、私の自身が、これだけ啓發された位に質問する知識人さえある位の程度であるから、從つて私が書いたものは、大体次のような事由によるものである事を知る事が出來た

（一）カナダはソ連に次ぐ世界第二の大國であるにもかかわらず、人間の數になると僅かに千八百萬餘、わが東京都の人口の二倍にも足らないので文學的出版物の消化數量は限定されて、多くを期待する事が出來ない

（二）だから、一般大衆の讀者を目標とする文藝作品は、フランス系の人が書いたものは、大体がパリの出版社から、英語で書いたものは、ロンドン、ニューヨーク、ボストンの著名書店から刊行されている

（三）この様に國外から出版されるために、それがカナダ作家によつて書かれたものである事を、明確に紹介されていない限り、作品の内容がカナダを舞台としているものと判つていても、さたべスト・セラー級の好評を博しているものでもつても、國外の讀者から「カナダ文學」として認められないと言うハンディキャップがあるからではないかと思われる

（四）尤もカナダには、「總督文學賞」とか「カナダ著作家協會賞」と言つた文學による文化奬勵策が講ぜられているようであるし、トロント、モントリオールの出版社、乃至著名大學の出版局から、可なり多くの優秀作品が刊行されているが、それが世界讀書界に廣く紹介されている例は、きわめて稀である様に感じられる

それはともかくとして、私の知る限りでは、カナダ文學で一番廣く日本に知られているのは、カナダ十州のうちで、最も小さなプリンス・エドワード島が生んだ近世カナダの代表的女流作家モンゴメリー女史の不朽の名作「アン・オブ・グリーン・ゲーブルス」を「赤毛のアン」という題目で紹介されている一連の少女小說位のものではなかろうかこの作者は純情可憐な孤兒の生涯をテーマにした七部作のシリーズをはじめ、エミリー物語その他多くの著作を殘して「カナダ文學」の聲價を國際的なものとしたと言つても、決して過言ではない。

この様な實情である爲、僅か四百字詰二十枚足らずの原稿であつても、この様な專門的なテーマを一定期間で書き上げるという事はすべての素人の私にとつては大きな煩痛の種で、資料文獻をあさるだけでも、一週間以上も東奔西走せねばならなかつた、結局、なせカナダ文學なるものが一般に知られていないかと言う理由は

FOLDER NO.
8-14

Vol. No. 15, No. 1501

Jan 8/63

「カナダ文學」を思う

東京本社支局長　東　良三

カナダの新聞社から、ときどき、「カナダ文學」という雑誌が送られてくる。

ページ数は、百ページ前後、表紙は、カナダの風景写真、中味は、詩、小説、評論、エッセイ、ルポルタージュ、書評、といった具合に、ごく普通の文芸雑誌である。

カナダ人の作家、詩人、評論家が、カナダの文学について、真剣に論じ合っている

FOLDER NO. 8-14

Vol. 15, No. 3.

「カナダ文學」を思う

東京本社支局長　東　良三

「荒野の呼び聲」や「白い牙」を書いたジャック・ロンドンの家は、カリフォルニア州のオークランドにあるが、現存の家は、ロンドンが建てたものではない。

ロンドンは、一九〇二年に、この家を買い入れたが、一九一六年に、四十歳の若さで死ぬまで、ここに住んでいた。

ロンドンは、この家を買い入れた翌年に、「荒野の呼び聲」を書い

糖尿病と木ぐつ

上出梅吉

トロント

「カナダ文學」を思う

東京本社支局員　東良三

Authorized as Second Class Mail, Post Office Department, Ottawa.

Tuesday, January, 1, 1963

大陸時報

THE CONTINENTAL TIMES

417 Dundas St. West
TORONTO, ONTARIO
Phone EM. 6-1888
Published Twice Weekly
TUESDAY and FRIDAY
Publisher and Editor
Y. IWASAKI
Rates:
$7.00 A YEAR IN ADVANCE

新年号

第五



カナダ文學に思う

東京本社支局長

東良三

日本とカナダとの關係は年と共に密接の度を加えてゐる今日、日本の人々、少くとも有識者達は、もうすこしカナダの實情に通じていなくてはならぬ筈であるが、實際はまだまだそこ迄進んでいない、つい最近雜誌がなくなった一例をあげてみるも、小學館という有力な出版社が「日本百科辭典」を刊行中で、その「カナダ篇」には歷史、地理、人種、產業などもたかわからない、そして私つたものを書く人があつかが、隨分方々の外國事情研究家や、外國通のジャーナリスト、文化人、各大學の文科教授と言った方面にあ

FOLDER NO. 41-8

日系	日系	日系
永井商会	永井三郎	永井明
P.O. Box 586 Phone 752-2061 Raymond, Alta.	P.O. Box 425, Phone 752-3243 Raymond, Alta.	P.O. Box 2066 Taber, Alta.
日系	日系	日系
永井洋行	永井商店	永井農場
P.O. Box 96, Phone 752-3450 Raymond, Alta.	P.O. Box 155 Phone 752-3456 Raymond, Alta.	P.O. Box 250, Phone 223-8311 Taber, Alta.
日系	日系	日系
永井農場	永井農場	永井農場
P.O. Box 47, Phone 752-3441 Raymond, Alta.	P.O. Box 558 Phone 752-3296 Raymond, Alta.	Box 314, Phone 223-2632 Taber, Alta.
日系	日系	日系
永井農場	永井農場	永井農場
P.O. Box 116 Phone 752-3425 Raymond, Alta.	P.O. Box 49, Phone 382 Magrath, Alta.	Magrath, Alta.
日系	日系	日系
永井農場	永井農場	永井農場
		1018 - 12th St. S., Lethbridge

永井農場回顧

山家生

ビーシー州日系苺農永井明治四十年（一九〇七）に苺農を創めてから、第二次世界大戦を經て第二次の變遷の跡を辿る。過去五十年の總産額百數十萬弗に達する發達の過程には、一年の所有反別八千八百六十一戸に對し五百六十五戸の苺農家が五百六十一ヶ所の地に發展する間には、筆舌に盡し難い辛酸があつた。

苺作つて會社經營

永井農場が苺作りに從事するに至つたのは、父太根作りに從事するに至つたのは、父太根作りに從事するに至つたのは、父太根

カナダの佛教徒

一九六一年で總數一一、六一一名

一九六一年度のカナダ国勢調査によると宗教別統計に示された"佛教信者"は次の通り。

△一九〇一年　一〇、五三一
△一九一一年　一〇、〇七二
△一九二一年　一一、三一六
△一九三一年　一五、九二一
△一九四一年　一五、六七六
△一九五一年　八、一八四
△一九六一年　一一、六一一

となつており、第二大戦がはじまつた一九四一年の調査では一五、六七六名の佛教信者が、その後十年間にほとんど半減して八、一八四名となつたが、それから十年の一九六一年には一一六一一名とふえている。

△カナダ国内の佛教信者の數を全国的の宗教信者に比較すると、一九六一年度で〇・一%にしかすぎない。ちなみにパーセンテーのいちばん多いのはローマン・カトリック教信者で四五・七%、次が合同教會信者の二〇・一%、聖公會が一三二%となつており、アドベンチストやヅガボーは佛教信者と同様各〇・一%である。

△佛教徒のうち男は六、二五九名、女は五、三五二名で、佛教信徒のいちばん多い州はビーシー州で二、二八八名、次いでオンタリオ州が一、五一七名、アルバタ州九五三名、マニトバ州三一二名、クベック州二二九名となつている。

（追記、日系人總數の州別分布に關する記事で、オ州在住二万人との見出しは約一万二千の誤り）

各州別の日系分布數

オ州に殆んど二万人

一九六一年に行われたカナダ国勢調査結果による日系カナダの人口動態は次の通り。

△一九四一年（戰争開發の年）における在加日系カナダ人總人口は二三、一四九。一九五一年から十年間にぐんと増加し、一九六一年度の国勢調査では二九、一五七となつている。

△日系總人口の男女比率はほとんど半々近くで、男一五、〇五九、女一四、〇九八となつているが、各州別の日系人數は次の通りである。

○ノヴアスコシア	二八
○ニューブランズイク	一八
○クベック	一、四五九
○オンタリオ	一一、八七〇
○マニトバ	一、二九六
○サスカチワン	二八〇
○アルバータ	三、七二一
○ビーシー	一〇、四二四
○ユーコン	三二
○北西テリトリー	二六
○ニューフアンランド	三

FOLDER NO. 8-14

海外移住（一）

有賀　千代吉

先日、早稲田大學の學生から電話があつて『私達の學校で有志が南米移住計畫しているので、これにサンダース・ホームの子供を參加させて貰えないだろうか』というのであつた。その電話の主、福島君の話によると、大學卒業後百名、二百名と集團になつて南米移住を實施するらしい。この頃は各大學に、移住連盟というグループがあつて熱心に研究しているようである。そして更に福島君の說明によると、單なる農業を經營するというのではなく日本文化の紹介というような仕事も加え、立体的にやつていきたいというのであつた。私も、すでに實施を前にしているサンダース・ホームの計畫について說明したのであるが、彼はまつたく同じような構想ですねといつて、びつくりしていた。

私達がこの南米行きを考えたのは、一般日本人のものとは異なつていて、混血児なるが故にということが主なる理由である。サンダース・ホームに收容された混血児は、七、八百名に達するであろう。しかし、澤田園長が國際人として廣く海外にその名を知られているということと、實に絕えない努力とによつて、すでに五百五十名が養子として歐米の良家に入つている。そして現在は三ヵ月を最年少者として、百五十名が大磯のホームに收容されているのである。最年長者は十六才の高校一年生である。

養子に迎えられた五百五十名の大部分は白人系であつて、黑人系となると割合に少ない。それは黑人系を迎えるのは、黑人系の米人その他であるという關係から、彼等の生活が低く、養子を迎えるだけの財力を持つていない、ということのためであるといい得ると思う。

日本內地に於ては、中學を卒業すると就職するものがかなりあり、求職者よりも求人者の方が遙かに多いにもかかわらず、混血児、特に黑人系になると、ほとんど就職は不可能といつてよいほどである。ことに女児は殆んど就職できないといつてよいであろう。こうした子供をどうするか、これが南米移住にふみきらせた大きな原因なのである。彼等もやがて結婚の年令に達するであろう。ある人々は、ホームの子供同志結婚させたらよいではないか、という。つまり、黑人系の子供は黑人系同志で、というのである。それは必ずしも不可能ではない。しかし彼らは生きなくてはならない。が、仕事はない。仕事があつたにしても、生まれてくる子供をどうするか。彼等の將來を考えていくと彼らには光は決してさしてこない。南米には人種の差別はない。黑くても白くても、自由の天地に自由に生きることができるはずである。彼らの幸福はそこ以外に得られない、という結論は澤田夫人の數度に及ぶ視察によつて得られたのである。三〇〇アルケール、つまり二百十七万坪の土地をアマゾンのトメアスに求めたのは、そのためである。

私共のこの計畫が發表されると、第一に參加を申込んできたのが、大學に在學中の學生數名であつた。彼等は實に熱心で、親の反對を說得するのに懸命であつた。私共は候補の中から六名を選び、工場、農場等に送つて訓練したのであるがその中でも一番力をいれたのはキリスト敎の信仰生活ということであつた。アメリカへ最初に渡つて來たピルグリムス・ファーザーズのように、移民地における單調な生活の中で、なんといつても堅い信仰を持つた生活をする、ということが大切である。日本などで想像することさえできない、廣大な土地である。四方地平線にかこまれているアマゾンのジャングルには、自分たち六名以外には誰もいない、という條件の中で、人間の力は余り頼りになるものではない。どうしても信仰が一致と信頼と忍耐の爲に必要なのである。幸いにして彼ら六名は、困難を乘りこえて信仰を持つことができた。そして機械の知識も充分與えられたのであつた。五月二日彼らはトメアス向けて出發する事であろうと思う。

私達は、今までの移民が歩いてきた、ただ金のために働くという生活をさけるために、種々のことを考えた。第一はニュースをきくことである。幸いにして世界各國は、無電信號によつて自國のニュースを送つている。これをとることに私共は手をつけた。モールス信號の訓練である。日本からできるだけ澤山な本を持つて行くことが、第二である。そして第三は、ハク製のつくり方、第四は豊富な木材を利用して何か家庭用具を造る、ということについての操業であつた。ポルトガル語はもちろんであるそのすべてが、滿足のいくまでに知識となつて彼等のカバンの中に入れられた。さらにもう一つ、日本の各界に活躍している人たちから贈られた三、四百枚の色紙によつて、慰めを得るようにと考えたのであつた。

去る三月十日、彼等の爲壯行會が開かれ、その席上三菱からは自動車、農器具ブルドーザー、その他十數種の機械、ラジオなど、セロカ病院からはあらゆる藥品、ホンダ・モータースからは三台のオートバイ、藤倉ゴムから合羽、靴、マットレスその他が贈られ、山のような贈物の前で、彼ら六名は聲も出ない感激を味わつたものであつた。

サンダース・ホームの進出。それはブラジルの大統領の胸を打つて、近く代理の領事が訪れることになつている。私はここで、サンダース・ホームの移住計畫を說明しようというのではない。この人口に惱まされている日本から、もつと明かるい將來をつくる海外移住の計畫を、信仰においてもしんけんに考えるべきではないか、ということをいいたかつたのである。日本人にはまだ、海外というものは、遠い他國になつている。どんなに生活は苦しくても日本の上に住みたいと願つている人が多いようである。三十年を海外で生活してきた私にとつて、日本は生活するところではなく生存している所である、ということを切實に感ずる。もつと目を廣く海外に向け

FOLDER NO. 8-14

YAMAGA YASUTARO PAPERS

海外移住

て、腕に力を持つている者は、どしどし出て行くべきではないだろうか。そしてそこに祖国をつくることである。七十歳を迎えようとしている私も、二年後に出發する第二陣と共に、もう一度太平洋を渡つて、思う存分バナナ、ナンカ、ドリアンに舌皷をうちたいと願つている。ジャングルといえば大蛇を思い、ワニの危險をおそれている。そんな事は昔の物語である。ブラジリアンに通ずる道の近くに聖ステバノ・コロニアンが生まれ、新らしい日本民族の發展のオノがふるわれるのを目の前にして、私という老人の血も、いささかおどるのを感ずる次第である。若い人々の間から海外移住の計畫がどしどしと進められている事は、なんとしても樂しいことである。

（おわり）

Latest Dominion Bureau Census Shows. . . . Aug 28/63

29,157 Japanese Canuck Population In Our Country

OTTAWA, Ont.—"How many Japanese Canadians are there in this country?"—is probably one of the most popular question posed to the Nisei by their hakujin friends.

The Dominion Bureau of Statistics this week released their latest census bulletin (1961 vintage) of the population of ethnic groups by age divisions. And they say there are 29,157 Canadians of Japanese ancestry in this country.

The following is the 29,157 broken down into age groups:

0 to 4 years old	3,313
5 to 9 years old	2,732
10 to 14 years old	2,387
15 to 19 years old	2,174
20 to 24 years old	2,042
25 to 29 years old	2,450
30 to 34 years old	3,002
35 to 39 years old	2,639
40 to 44 years old	2,123
45 to 49 years old	1,449
50 to 54 years old	989
55 to 59 years old	825
60 to 64 years old	935
65 to 69 years old	771
70 to 74 years old	671
75 to 79 years old	433
80 to 84 years old	156
85 to 89 years old	50
90 to 94 years old	14
95 and up	2

Of the 29,157 total, 15,059 are males and 14,098 are females.

It is interesting to note that although the 0 to 4 age bracket is largest with 3,313, the second largest group is the 30 to 34 age group.

Also interesting to note, in comparison with other ethnic groups such as for example the Finish people, the Japanese population shows remarkable longlivity.

The Finish group with a population of 59,436, over double that of the Japanese at 29,157, shows 18 over the 90 age group. While Japanese show a strong 16 over that age.

海外移住（一）

有賀千代吉

先日、早稲田大學の學生から電話があつて「私達の經營するというのではなく日本文化の紹介というよう

した子供をどうするか、これが南米移住にふみきらせた大きな原因なのである。彼等もやがて結婚の年令に達するであろう。ある人々は、ホームの子供同志結婚

私共のこの計畫が發表されると、第一に參加を申込んできたのが、大學に在學中の學生數名であつた。彼等は實に熱心で、親の反對

私達は、今までの移民が歩いてきた、ただ金のためにに働くという生活をさけるために、種々のことを考えた。第一はニュースをきくことである。幸いにして世

去る三月十日、彼等の爲壯行會が開かれ、その席上三菱からは自動車、農器具ブルドーザー、その他十數種の機械、ラヂオなど、セロカ病院からはあらゆる藥

FOLDER NO. 8-14

An Independent Org

Vol. XXVII, No. 63 Aug 17/63

Treatment Of The J.C.'s During World War Two

The New Canadian this week proudly brings the first instalment of an essay entitled, "Treatment Of The Japanese In Canada During The Second World War" by Vancouver writer, Mr. Blake E. Frisby. The amount of research and work, writer Fishby has put into this essay is both commendable and staggering. His grasp of the detail of the whole sorry tale of the Japanese in B.C. is told with clarity and precision.

Appreciation is offered to Dr. Harold Saito for bringing this work and writer to our attention.

By BLAKE E. FRISBY

The Japanese have a term, "sho ga nakatta"—it couldn't be helped, which expresses their attitude towards the Exodus from the British Columbia Coast at the beginning of the Second World War. However, recollection of the hardships and privations which followed, resulting from indefinite Government policy, engenders bitterness to this day. The Government intended to move only enemy aliens who comprised about one-fifth of the total Japanese population. But it was forced by radical racial outbursts from the public on the West Coast to institute a policy of complete evacuation. Not only was public opinion arroused, but various groups were "out to get the Japanese," and subsequently brought pressure to bear on the government. A complete investigation of the treatment of the Japanese involves consideration of political, economic, social and psycological problems and their effect, not only upon the Japanese, but upon the other Canadian elements involved. In this paper I have endeavoured to report events objectively, in their historical context, in order to give as complete a picture of the problem as possible.

The Japanese began to come to Canada around 1896, encouraged by industrialists and others who desired them as a source of cheap labour. The original anti-Japanese feeling was roused by the mass migration which occured at this time, bringing 12,000 Japanese to Canada from 1896 to 1900. The influx continued and protests against it resulted in the imposition of a limit of 500 a year in 1908. Then, in 1928 the Canadian Government made the "Gentlemen's Agreement" with the Japanese Government which limited Japanese immigration to one hundred and fifty per annum. This arrangement continued until the beginning of the Second World War, with fewer than one hundred Japanese entering Canada annually during the 1930's. Consequently, the Japanese who entered Canada from Japan entered the country legally. In 1938 the Keenleyside Committee appointed by the Federal Government to investigate charges of illegal entry, declared such charges to be false.

Public speculation about illegal entries was only one manifestation of the domestic problem which existed in the western province. The problem became increasingly acute during the 1930's, causing great political controversy but little constructive action. Racial antagonism, increased by Japan's activities in East Asia, was based on economic frustration and flourished in British Columbia because of the concentration of Japanese. Though people of Japanese racial origin composed less than one percent of the Canadian population, they made up three percent of the British Columbia population. That is, prior to Japan's entry into the war, nearly all of Canada's 23,000 Japanese were concentrated in British Columbia. Further complications arose from the fact that this group was made up of persons born in the Dominion, naturalized citizens and Japanese nationals.

The basis of the economic hostility against the Japanese lies in the unskilled nature of the early immigrants. With the termination of railroad and highway construction Japanese drifted into and became firmly established, in the basic industries of fishing, mining, and lumbering. Occidentals feared the hold which they believed the Japanese had in these coastal industries. This fear was intensified during the economic unrest of the 1930's when unemployment was blamed on the Japanese, who it was claimed were no respectors of minimum wage laws and therefore beat the white man in active competition. Restrictive immigration did not correct the situation. Therefore, restrictive legislation was passed to preclude further inroads. The Department of Fisheries adopted a policy of gradually decreasing the number of Japanese fishing licenses. By 1939, this policy was so effective that the Japanese held only 2,000 of 14,000 licenses issued. In addition legislation was passed in British Columbia prohibiting Japanese from leasing Crown Lands for lumbering or mining purposes.

Furthermore, citizenship was withheld to keep the Japanese from many occupations, but withholding citizenship drove them into occupations where restrictive legislation was more difficult. Thus, due to the economic hostility of the whites, many Japanese were forced out of the primary industries into commercial and agricultural endeavours.

In addition to direct restriction on occupation, the Japanese were restricted in their desire to raise their standard of living by exclusion from the voters list. They were relegated to the level of second class citizens by automatic exclusion from occupations which used the voters list as the basis of qualification. The first protest against exclusion from the franchise was made by the Canadian Japanese in 1936 when a delegation appeared before the Special Committee on Elections and Franchise Acts of the House of Commons to plead for the franchise. However, the right to vote in provincial elections is determined by provincial legislation, and no change in the franchise came from this attempt. Denial of the vote barred the Japanese from: election to the Provincial Legislature; nomination to municipal office; nomination for school trustee; jury service. The same limitations disqualified them from law; pharmacy; hand-logging; contracting public works.

In addition to attacks arising from the fear of economic competition, the Japanese were also reacted against as a social threat. It was claimed they were satisfied with a low standard of living; but restrictive legislation and residential restrictions based on racial discrimination made it difficult for them to improve their standard of living. The Japanese were also accused of inassimilability. This theme was a favourite one for anti-Japanese speeches. It was supported with attacks on self sufficient communitees, Japanese language schools, Buddhist Temples, and dual nationality. However, as is the case with all immigrant groups, assimilation cannot really begin until the second generation. Finally, the term "peaceful penetration" was used to indicate "fifth column" activities carried on by the Japanese. On January 14, 1941, the **Vancouver Province** reported that, in a City Council meeting, Alderman H. D. Wilson, "Hits 'Peaceful Penetration of Orientals in the Province." At the meeting Wilson asked Ottawa to abrogate the agreement which allowed a maximum of 150 Japanese to enter annually and to investigate Japanese schools. Although the Council did not formally endorse the proposals, a special committee was appointed to prepare a resolution on the Council's views.

Thus, labelled as "peaceful penetration", Japanese fishing, lumbering and farming took on other than economic significance. They were considered by the anti-Japanese as attempts to establish strategic locations for eventual military operations. Fishing operations became the focal point for concern. Though the Japanese held only 12 per cent of the licenses in British Columbia, they were concentrated in the Fraser River area and therefore Vancouver became the centre of agitation and rumours. Public suspicion of Japanese fishermen was based on claims that they possessed charts with soundings more accurate than those possessed by the Canadian Navy. It was also claimed many Japanese fishermen were ex-Japanese naval officers. Thus, it was assumed that all Japanese fishermen were dangerous to the security of Canada. An editorial in the **New Canadian**, May 14, 1941, presents the major issues as seen by the Japanese fishing community shortly before the war broke out in December.

—Cont. next week

This is the second installment of Vancouver writer, Blake E. Frisby's essay, "Treatment Of The Japanese In Canada During The Second World War." The amount of research and work he has put into this essay is both commendable and staggering. Copies of the first installment are still available at The New Canadian.

aug 24/63 * *

By BLAKE E. FRISBY

Public reaction to the Japanese was whipped up in Vancouver throughout 1940. On August 7, the City Council was reported by the **Vancouver Daily Province**, as asking for aid from Ottawa with respect to the Japanese question. During November and December, legislation was considered for the control of Japanese language schools in British Columbia. The problem of the franchise for people of Oriental descent was also discussed. Early in 1941, Alderman Wilson, of the Vancouver City Council proposed that the Japanese be segregated into a ghetto for they were filtering into the best residential areas of the city. There was a suggestion of European fascism at this time in the widespread, hysterical animosity shown towards people of Japanese racial origin.

For a generation, British Columbian politicians had been attempting to awaken the Federal Government to recognition of the problems involving the Japanese, which had their genesis in Canadian laws and policies relative to immigration and naturalization, and in other circumstances beyond British Columbia control. There was a feeling in British Columbia that Federal officials were indifferent to, and unaware of the British Columbia problem.

The effect of public opinion and political pressure led the Cabinet War Committee to appoint a Special Committee on Orientals in British Columbia. The Committee, under the chairmanship of Lt. Col. Sparling, was appointed in 1940 to investigate the loyalty of Japanese in British Columbia.

Early in 1941 the committee tabled its report in the House of Commons indicating that there was no evidence of disloyalty amongst the Japanese population in British Columbia. It was emphasized that the situation was aggravated by the attitude of the white population towards the Japanese. For this reason, the Committee recommended that Canadian born Japanese be not permitted to enlist in the Canadian armed forces. The Committee also recommended that the Japanese be reregistered. It was conceived as a voluntary registration and authorized by Order-in- Council P.C. 117 on January 17, 1941. Under this order, registration and thumb-printing was undertaken by the R.C.M.P. Finally, the Committee recommended that the Standing Committee on Orientals be appointed. These appointments were made in P.C. 117 of January 7, 1941.

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

OKIN
okinole
g Peop

ion on occupation, the Japanese raise their standard of living by ey were relegated to the level of exclusion from occupations which f qualification. The first protest nise was made by the Canadian ion appeared before the Special hise Acts of the House of Com- wever, the right to vote in provin- ncial legislation, and no change in pt. Denial of the vote barred the ovincial Legislature; nomination school trustee; jury service. The from law; pharmacy; hand-log-

from the fear of economic com- acted against as a social threat, with a low standard of living; but ial restrictions based on racial

them to improve their standard accused of inassimilability. This -Japanese speeches. It was sup- ent communitees, Japanese lan- d dual nationality. However, as oups, assimilation cannot really inally, the term "peaceful pene- column" activities carried on by he **Vancouver Province** reported g, Alderman H. D. Wilson, rientals in the Province." At abrogate the agreement which e to enter annually and to in- h the Council did not formally mmittee was appointed to pre- ews.

tration", Japanese fishing, lum- an economic significance. They e as attempts to establish stra- operations. Fishing operations Though the Japanese held only h Columbia, they were concen- d therefore Vancouver became . Public suspicion of Japanese at they possessed charts with ossessed by the Canadian Navy. ishermen were ex-Japanese na- at all Japanese fishermen were An editorial in the **New Cana-** or issues as seen by the Japa- e the war broke out in Decem-

—Cont. next week

of Vancouver writer, Blake E. Japanese In Canada During The f research and work he has put e and staggering. Copies of the at The New Canadian.

•

. FRISBY

e was whipped up in Vancouver City Council was reported by the g for aid from Ottawa with re- uring November and December, control of Japanese language oblem of the franchise for people ussed. Early in 1941, Alderman ncil proposed that the Japanese ey were filtering into the best was a suggestion of European read, hysterical animosity shown origin.

umbian politicians had been at- overnment to recognition of the hich had their genesis in Cana- immigration and naturalization, British Columbia control. There that Federal officials were indi- tish Columbia problem.

d political pressure led the Cabi- pecial Committee on Orientals in under the chairmanship of Lt. 940 to investigate the loyalty of

abled its report in the House of was no evidence of disloyalty in British Columbia. It was em- gravated by the attitude of the nese. For this reason, the Com- born Japanese be not permitted rces. The Committee also recom- gistered. It was conceived as a ed by Order-in- Council P.C. 117 order, registration and thumb- .C.M.P. Finally, the Committee mmittee on Orientals be appoint- in P.C. 117 of January 7, 1941.

The Standing Committee on Orientals failed to reduce tensions in British Columbia and with the advent of Pearl Harbour proved utterly inadequate to deal with the complex problems which arose. For the first few days following December 7, 1941 the newspapers of British Columbia carried articles assuring the white populace of the loyalty of the Japanese. However, the attacks and successes of the Japanese military forces reinforced the already existing prejudice against the Japanese in Canada. These were further magnified by political, industrial and labour groups for propaganda purposes. Members of Parliament were demanding action and it became clear that the politicians of British Columbia, at all levels of government would be leaders in formulating and presenting demands to Ottawa for action against the Japanese.

The Standing Committee on Orientals continued in an advisory capacity to the Cabinet until February 7, 1942. The first actions of the Government were taken on the advice of this Committee, some of whose members were anti-Japanese. At the outbreak of war precautionary measures were taken. Japanese in British Columbia were deprived of the right to fish and their boats were impounded; those considered dangerous to the state were interned; and Japanese language schools and vernacular newspapers were closed down. The Japanese fishermen were the hardest hit by these original measures. Under Defense Regulations the Federal Government impounded eleven hundred boats. This was not only an economic blow to the Japanese, but effected the whole population as there were not enough fishermen to harvest the requirements of the industry. Nevertheless, the United Fisherman's Federal Union continued their opposition to renewal of Japanese licenses.

On December 16, 1941, P.C. 9760 was issued, which made mandatory the registration of all Japanese in Canada regardless of citizenship. For Japanese nationals in Canada and Japanese who had been naturalized since 1922, this was the third registration in eighteen months. In addition to registration, all Japanese were finger-printed. This was the first act in a series which placed all

(Continued on page 8)

Japanese Treatment. . . . (Continued from Page One)

Japanese in the legal category of enemy alien.

By the end of December 1941, Members of Parliament from British Columbia, and local political associations were making demands for movement of the Japanese "east of the Rockies." Extensive propaganda was carried on against the Japanese by H. Wilson of the Vancouver City Council. Howard Green and Thomas Reid were among the most rabid anti-Japanese Members of Parliament. Groups making demands for more stringent treatment included political organization veterans associations, community service groups and labour unions. The agitation maintained by these groups tended to develop and guide general public opinion.

Having impounded all Japanese fishing boats shortly after Pearl Harbour, the government now took action regarding ownership of vessels by the Japanese. A special committee known as the Japanese Fishing Vessels Disposal Committee was appointed under the Department of Fisheries and made effective by P.C. 288 on January 13, 1942. This was followed on January 14, 1942 with an official statement announcing partial evacuation from the coastal area. Notices were posted ordering Japanese aliens to get out of the Coastal Area before April 1, 1942 and to surrender all cameras, radios, fire arms and other banned articles.

From January 14, 1942 until February 24, 1942, the date complete evacuation was announced, public opinion increased because of anxiety at apparent inaction of government officials in implementing the program and the idea that partial evacuation should give place to complete evacuation. These demands were satisfied by Order-in-Council P.C. 365 of January 16, 1942 which provided that the Minister of National Defense could make any area in Canada a "protected area." The first of the protected areas was the Coast Defense Area in British Columbia, bounded by the Yukon in the north, the United States in the south, and extending from the Pacific to the Cascade Mountains. This was put into effect on January 21, 1942. On February 27, 1942, the day after the announcement of complete evacuation, a second protected area was created around Trail, B.C.

The Prime Minister and most of the Cabinet were against complete evacuation, but continued pressure was applied from British Columbia. By February 9, 1942, the Standing Committee on Orientals had served its purpose and was dissolved by P.C. 999, with subsequent loss of control by British Columbia politicians. The government assumed complete control and the Prime Minister reaffirmed in the House of Commons his moderate policy of January 14, 1942.

During the period from February 9 to February 24, the federal government had to face the consequences of its moderate program. It had failed to apply compulsion to the evacuation of Japanese nationals and hence the first group, which was expected to depart on February 18, 1942 was not rounded up until February 24, 1942. The government had also failed to provide for family care and adequate housing. In addition, a report in the **Vancouver Province** on February 0, 1942, under the headline "Municipalities of Okanagon Protest apanese Infiltration" indicated that the Government had failed to vercome objections to having Japanese moved into the interior. e increasing political pressure, related to demands of public opin, finally forced Ottawa to adopt an extreme policy.

(Continued Next Week)

This is the third installment of writer, Blake E. Frisby's special essay for The New Canadian entitled, "Treatment of the Japanese In Canada During the Second World War."

In answer to many inquiries for extra copies, there are still some copies available of the 1st and 2nd installments.

* * *

by BLAKE E. FRISBY

Complete evacuation was announced on February 24, 1942, P.C. 1486 was passed as an ammendment to the Defence of Canada Regulations; by it the Minister of Justice was authorized to control individuals of Japanese origin with respect to protected areas. On this basis they could be moved, prohibited from "entering, leaving, or returning," restricted in their employment and prohibited from having their possession certain specified articles. This was the final act in the reduction of all classes of Japanese residents in British Columbia to the class of enemy alien.

Following the announcement of complete evacuation, on February 26, 1942, a notice issued by the Minister of Justice placed the Japanese under a dusk to dawn curfew and banned them from possession of motor vehicles, radios, cameras, firearms or amunition. Accordingly these items were handed over to the R.C.M.P., who later turned them over to the Custodian of Alien Property.

The Custodian of Alien Property came into operation under Order-in-Council P.C. 1665 on March 14, 1942. On that date it assumed complete responsibility for all Japanese matters in connection with real estate, personal effects, business and farms.

In order to carry out the announced plan of complete evacuation, the British Columbia Security Commission was also created on March 4, by P.C. 1665, with full powers to undertake the evacuation from the protected area of all persons of Japanese origin. (This Commission is hereafter referred to as the B.C.S.C.) It was dissolved on February 5, 1943 and at that time all powers were transferred to the Department of Labour. The Commission included: Austin C. Taylor, prominent Vancouver business man, chairman; F. J. Mead, assistant commissioner of the R.C.M.P.; John Shirras, assistant commissioner of the B.C. Provincial Police.

As the Commission proceeded with its work, it found that P.C. 1665 did not grant adequate authority. Consequently, on March 27, 1942, further protective control was granted over the movement of Japanese. Later the Commission's control was extended over all Japanese, regardless of residence and this was authorized by P.C. 8173, issued on September 11, 1942. On April 21, 1942 the Commission was empowered to enter into agreements with various provinces for placement of Japanese.

All Orders-in-Council were issued as relating to "members of the Japanese race." No provision was made for differential treatment of Canadian citizens. All rights of citizenship were abrogated and the Commission was given complete control to regulate the life of all Japanese.

One of the Commission's first acts is reported in the **Vancouver Province**, March 6, 1942, under the headline "Commission Clamps Down on Haphazard Jap Exodus." This "clamping down," refers to an order establishing control over movement of all Japanese. No one was permittted to move from point to point within the protected area except under conditions prescribed by the Commission and with special permits. Many Japanese anticipating evacuation had migrated from the protected area to localities such as the Okanagan Valley, causing public indignation wherever they settled. Now all movement was brought under control of the Commission.

The next step was an arrangement to secure a central assembly area in which to house the Japanese until a permanent location could be found for them. Accordingly, the Vancouver Exhibition was expropriated by the Department of National Defense and turned over to the B.C.S.C. Practically all the buildings and the entire park area were utilized for the purposes of the clearing station at which all Japanese evacuated from different areas were received, registered, and medically examined. The first evacuation order cleared the west coast of Vancouver Island and the mainland between Vancouver and the Skeena River. These first evacuees, especially those living in remote areas of the coast, received as little as twenty-four hours notice to leave their homes. Consequently they departed with only the barest necessities and made no arrangements for care of property. Immediately this area had been cleared, officials turned their attention on Steveston, the focal point of the fishing industry. A great many of the men of this community, being Japanese nationals, had already been removed to road camps.

Upon completion of the evacuation to Hastings Park from all Coastal points and Steveston, the movement to planned projects began, providing space for new evacuees coming in from the Fraser Valley and Vancouver proper. Many family groups from the Valley left directly for final destinations in Alberta and Manitoba. Vancouver was the last area to be evacuated and proved to be the most difficult however, evacuation was completed by September 30, 1942.

Resistance to evacuation was overcome by interning the leaders of the resistance. Initially these people were detained temporarily in the Vancouver immigration shed, transferred to an eastern camp and then settled in regular employment. The number of Japanese interned totalled 758 by fall of 1942. By May 1944 the number had been reduced to 425.

Continue

FOLDER NO. 8-14

An effort was made by the Commission to secure the cooperation of the Japanese in their evacuation. A Japanese Liason Committee was appointed and provided with facilities to act in conjunction with the commission on behalf of their own people. This gave rise to conflict between the older generation Japanese and the Canadian born Nisei. On several occasions the Nisei rebelled against the obedience traditionally demanded by their elders. To some extent this conflict was overcome by authorizing a large and representative group of the second generation, whose members were given free access to the Clearing Station and every facility for negotiation and adjustment of differences.

At the Clearing Station there was a full administrative staff of doctors, nurses, dentists and welfare workers, including a corps of Japanese doctors, nurses and dentists. To the greatest possible extent the Japanese were employed for the work of policing, stenography, cooking, etc. They worked under white supervision and received wages.

At the time that the B.C.S.C. was organized, Japanese nationals were being removed from the protected area. After the Commission was in operation, and the decision was made to treat all Japanese alike, it was generally expected that all men would be sent inland to road projects and the women to the ghost towns as soon as they had been rehabilitated. This scheme did not work. The restlessness of the men over low wages, fear for their property and objection to separation from their families was evident in strikes and petitions to the Government. These petitions showed willingness of the Japanese to cooperate with the general government policy, but also their refusal to have their families broken up. Finally, the Commission held a meeting on July 1, 1942 and decided it would revise its policy and make plans for all men to rejoin their families.

Shortly after its organization, the Commission began surveying several areas of Canada in which they could relocate the evacuees in family units. It was authorized to work on three highway projects in British Columbia and plans were considered for relocation in the sugar beet areas of Alberta, Manitoba and Ontario. In addition the Commission selected a number of "ghost towns" in the British Columbia interior as suitable for relocation.

The Sugar Beet Grower's Association of southern Alberta had expressed a need for workers. But the people of Alberta were not eager to have the Japanese brought in, and therefore the B.C.S.C. entered into negotiations with the Provincial government and the Beet Growers Association. On April 11, 1942, the first movement of Japanese to Alberta was made. Families were selected by the B.C.S.C. and a representative of the Growers Association. On May 6, 1942, the Security Commission and the Province of Alberta entered a formal contract to control Japanese in Alberta. The Commission agreed to look after relief, medical and educational services, to remove the Japanese after the war and to regulate their movements within the province. This project finally resulted in the evacuation of 2,585 Japanese to Southern Alberta. Subsequently the beet growers of Manitoba absorbed 1,053 labourers too.

The major problems faced in resettling the Japanese in the sugar beet projects were those of welfare, housing, education and adjustment of family acreage. However, the Commission attempted to offer material and financial subsidies to aid in the initial adjustment.

The B.C.S.C. provided a medical program for the Japanese which was better than that provided for any other segment of the Canadian population. It appropriated several existing hospitals and erected new ones including a one hundred bed tuberculosis sanitorium at New Denver. These hospitals were staffed with Japanese doctors and nurses whenever possible. Japanese who settled outside of British Columbia lived under an arrangement which prevented them from becoming public charges of the provinces for either medical or relief expenses.

The provisions of education for evacuated Japanese children became a political problem. The provincial Department of Education refused to be liable for the cost of educating the children. Therefore the B.C.S.C. assumed the responsibility on November 19, 1942, for providing schooling for the interior settlements and the self-supporting groups throughout the province. It provided correspondence courses together with text books for the elementary grades. A staff of Japanese teachers was organized under the supervision of the Commission.

In Alberta the Commission agreed to share the cost of education with the Provincial Government. In Manitoba and Ontario, no problems developed as the children entered local schools without any discrimination. Additional expenses in Manitoba were met by the Federal Government. High school and University students were forced to pursue their studies independently and received no financial assistance from the Commission.

The evacuees experienced considerable discomfort during their first winter in the interior settlements. Despite subdivision and new buildings they were in many cases congested. Furthermore many of the houses were poorly insulated and therefore unsatisfactory under conditions of cold. The Japanese submitted complaints about these and other conditions which led to the appointment of a Royal Commission. The Commission did make a number of worthwhile recommendations, but its report on January 14, 1944 generally confirmed the policies and program of the B.C.S.C.

The term "eastern resettlement" carried with it the idea of permanent resettlement and movement towards a final solution of the Japanese problem. It evolved out of the relocation program. A report of the Department of Labour of May 27, 1943, showed a total of 1,761 Japanese relocated in Ontario. They had been to the relocation centres and had decided to go "east of the Rockies" under the jurisdiction of the Department of Labour which assumed responsibility for the Japanese in March 1943.

In order to control public reaction to relocation the government passed an Order-in-Council stipulating that the Japanese should not become a charge upon any province, and that they should be restricted from purchase of land or growing of commercial crops.

The lack of a clearly defined Government policy regarding the future of Japanese Canadians was a drawback to voluntary relocation for the Japanese. They had no guarantee of permanent settlement. When, in August 1944, Mr. King announced a policy of dispersal, the government did little to make it desirable to the Japanese.

At the outset, conditions in the East were unfavourable to relocation. Reports had filtered back of discrimination in employment and housing. Furthermore, some evacuees had never considered leaving British Columbia, for they hoped to return to the coast after the war. In addition there were economic factors in favour of not moving. In contrast to those who insisted on expulsion, many economic interests wanted evacuee labor in the British Columbia interior, so there were jobs for any who wanted them. These factors combined to create a mental turmoil in the evacuees in British Columbia. In despair they clung to the protection and security of the interior relocation centres.

(Continued on page 8)

The chief work of interested Occidentals in resettling the Japanese was in the field of education and in problems of citizenship. The most effective contribution of church groups was in exertion of political pressure against the Federal Government. Though restrictions could not be erased, the church groups did establish themselves as representing a liberal section of public opinion. This liberal opinion was displayed in the episode which surrounded the Liberal Government's attempt to railroad Bill 135 through the Commons. It was suggested in the **Vancouver Daily Province** on July 8, 1944, that "Sparks will fly in the Commons when the bill ammending the Dominion Election Act and providing regulations for soldiers voting comes back with the ammendments made by the Senate. As the Bill left the Commons it provided that no persons whose racial origin is a country with which we are at war could vote if such persons were denied the vote in any one province of Canada. The clause was obviously aimed at the Japanese who are not allowed to vote in British Columbia."

The Senate limited this to classes already disenfranchised by a province. This limited disenfranchisement was passed in the Senate after a good deal of protests.

The original Bill was pushed through the Commons before anyone was aware of what was going on, since it was in main a Bill setting up machinery for polling the troops in the 1945 general election. Nobody knew the Japanese disenfranchisement was included in it until it had been actually passed by the Lower House. Debate in the Commons was inadequate because the contentious item was one short paragraph in a Bill 27 pages long. No paper mentioned the issue while it was before the Commons but just before it came before the Senate the Toronto Star and other papers printed editorials and letters of protest.

This is the 4th installment of Vancouver writer, Blake E. Frisby's essay, "Treatment Of The Japanese In Canada During The Second World War".

* * *

By BLAKE E. FRISBY

Independent schemes provided a second method of relocation. Japanese who possessed the financial resources to reestablish themselves on a self supporting basis could relocate themselves independently. Locations were found for 1,200 such Japanese in the towns of Minto, Bridge River, McGillivray Falls, Christina Lake and Lillooet, B.C.

In addition, individuals who were guaranteed permanent employment were allowed Special Permits to resettle outside the Defense Zone in areas such as Grand Forks, Kamloops and Vernon.

The largest relocation scheme and that involving the greatest problems was undertaken in the "ghost towns" of southeastern British Columbia in the Kootenay Lake Area and Slocan Valley. Of the 21,439 evacuees, 11,964 were given accomodation in these renovated towns or in the newly constructed camp at Tashme.

The Japanese were welcomed by the residents of these towns as they provided an economic stimulus to the whole area. Industrial, business and professional people hired Japanese employees in the towns of Slocan, New Denver, Lemon Creek, Roseberry, Kaslo, Greenwood and Sandon.

The management of each of these interior settlements followed similar lines. A Supervisor and Assistant Supervisor were responsible for each unit and reported to the head office of the B.C.S.C.

A Welfare department was established within the Commission with the responsibility of providing maintenance for the Japanese within the policies already in effect in British Columbia. Allowances were given for food and sundries, while housing, lighting, clothing, primary education and medical care were provided free. The Government guaranteed a minimum income and certain living standards to each person. In order to encourage men to be self-supporting the commission devised a plan in 1943 whereby ⅓ of the earned income was not counted in calculating family income. On January 1, 1943, there were 15 percent or 1,878 persons out of 12,114 in the centres on full maintenance, while 11 percent or 1,309 supported partially by the government. By July 1944, those percentages had risen to 20 percent in each group.

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

This is the 5th installment of Vancouver writer Blake E. Frisby's essay, "Treatment Of The Japanese In Canada During The Second World War." Copies of the other 4 installments are still available at the offices of this newspaper.

* * *

By BLAKE E. FRISBY

One of the strongest protests was made by the Japanese Committee for Democracy. Its strongest argument was that the measure was unconstitutional. It argued that if one province disenfranchised an enemy race it would be disqualified in Dominion elections in the rest of Canada. Conversely, if in the case of persons of Japanese race, British Columbia were to remove the restrictions against persons of Japanese race, the whole effect of the provision would be nullified. This would mean an abdication of the sovereign powers of the Dominion Parliament, since it would leave the decision to who could vote in a Dominion election all over Canada to a single province and was therefore contrary to the provisions of the B.N.A. Act.

Further strong petitions were submitted by Church groups; clergymen; the Y.M.C.A.; United Church Young Peoples Council and others, demanding that the Japanese be allowed to exercise the franchise.

Because of the unexpected outburst of public sentiment, the Senate sent the Bill back to the House, where it was ammended to allow anyone who had voted in the previous election to vote in the coming one; even this amendment disenfranchised the majority of Japanese Canadians because at the time of the last election they were living in British Columbia where they could not vote. Thus British Columbia's racial discrimination was perpetuated across Canada. However, the disenfranchisement was intended to last only until six months after the end of the war.

The major objections to Bill 135 were that it was not necessary for the security of Canada, it gave evidence of racial hatred and that it failed to maintain the principles of democracy. On the other hand, the Bill was supported with the stereotyped arguments which anti-Japanese politicians from British Columbia had been maintaining for four decades.

* * *

The problem of Japanese property caused great loss of faith in the Canadian Government on the part of the Japanese. After evacuation all Japanese property was sold, most of it at prices far below its actual value, although this property had been entrusted to the Custodian on the conditions that he was to excercise protective control only.

The Japanese fishing boats were disposed of first. Between February and July 1942, the Committee established on January 14, sold or leased most of the Japanese-owned boats on the Pacific Coast. The report of the disposal committee is summarized in the **Vancouver Daily Province**, February 17, 1943. Of more than 1,100 boats dealt with, 887 were sold by the committee. The vessels were sold, first through voluntary negotiations between the owners and the purchaser's with the committee as final arbiter, secondly through compulsion. Some owners refused to sell and their boats were turned over in July 1942 to the Custodian of Alien Property. The Japanese were extremely hostile even though the boats were disposed of by a committee on which there were Japanese representatives; evidence indicates that prices were equitable; the federal government provided a fund to absorb the cost of repairs.

When the Japanese were evacuated from the coast their property, other than fishboats, was vested in the Custodian of Alien Property. The Department of Labour states that, "Japanese farm properties, mostly in the Fraser Valley and comprising approximately 1,000 farms, were in June, 1942, placed under the control of the Director of Soldier Settlement of Canada for purposes of administration, and subsequently, the greater number of them were expropriated at an impartial valuation for the purpose of postwar veteran settlement. However, some of the evacuees from whom the Director of Soldiers Settlement took over land, were Canadian veterans of World War I who had purchased, and were still purchasing their lands from the Director. On January 23, 1943, the **Vancouver Sun** reported the passing of an Order-in-Council giving the Custodian the power to "liquidate, sell or otherwise dispose of the properties of evacuated persons." All such property was disposed of without the consent of the owners. It was sold in a **seller's market** and in most cases the sums received for both real or personal property were below market value; there were hundreds of such cases for which the Japanese demanded some compensation.

The decision to liquidate Japanese property was forced by pressures within the government. There had been continuous political pressure, supported prior to June 1945, by 15 of the 16 Members of Parliament for British Columbia on behalf of total deportation of Japanese.

Canadian born and naturalized Japanese looked to the Canadian system for protection. Three suits were brought against the government to block the sale of Japanese property, one for a Japanese national, one for a naturalized citizen, and one for a native citizen. These were heard in the Exchequer Court of Canada on June 29 and 30, 1944. No decision was made public until September 1944 when the case was dismissed.

Following the dismissal of the test cases the Co-operative Committee of Japanese Canadians pressured the Government for months for a commission to investigate and make restitution for the losses incurred due to forced evacuation in 1942. On July 18, 1947, Parliament provided for the establishment of the Japanese Property Claims Commission with Mr. Justice Henry Bird as Chairman.

A large percentage of the claims investigated came from people whose farms were sold to the Soldiers Settlement Board by the Secretary of State, acting for the Custodian of Enemy Property. The land comprised 13,000 acres or 769 farms, mainly in the Fraser Valley. The total municipal assessment, usually considered less than the real value, came to $1,250,940. The Soldiers Settlement Board valued the land at $847,848.00. The Secretary of State then allowed the Board to buy the land under its own valuation, and ⅓ less than the assessment.

The Claims Commission was empowered to deal with only about 74 per cent of the Japanese who incurred losses. Those whose property was left behind or taken over before the Custodian's office was set up in March 1942, did not receive a hearing.

An editorial in the **Toronto Globe and Mail** on January 20, 1948 refered to the government's handling of the Japanese-Canadian properties in British Columbia as "most shameful". "The public has been shocked by the difference between the assessed and appraised values of the Fraser Valley Land . . . and still more shocked by the vastly increased amounts obtained by . . . administration . . . resold land to veterans—. . . disgraceful failure to maintain the Custodian's trust . . . books of the Custodian of Enemy Property in Vancouver had not been audited since October 20, 1943."

The investigation of the Commission took two years and four months. On June 13, 1950, Justice Minister Garson tabled in the Commons the report of Mr. Justice H. I. Bird and announced that the Government would pay $1,222,829.00 to some 1,300 Canadians of Japanese origin. This was a result of the commission study of claims that their British Columbia property, seized in wartime was sold too cheaply.

The Commissioner dealt with 1,434 claims involving homes, farms, businesses, cars, trucks, etc. The Commission found that the government should have paid eighty percent more than it did for the over 700 parcels of land bought by the Veterans Land Act in the Fraser Valley.

This is the sixth installment of Vancouver writer, Blake E. Frisby's special essay for The New Canadian, "Treatment Of The Japanese In Canada During The Second World War." Copies of past installments are still available at The New Canadian.

* * *

By BLAKE E. FRISBY

The main points of evacuation were established in 1942. A few lesser points followed in 1943, but no action was taken with a definite goal in mind until the segregation program was announced in 1944. Until this time, government policy was determined by political, economic and social pressures.

On August 5, 1944, Prime Minister King outlined the policy of his Government towards those of Japanese racial origin living in Canada. In brief, he indicated that no further immigration of Japanese would be permitted, that those found disloyal to Canada would be deported, and that the remainder of those in Canada would be dispersed across the country. He stated that "a quasi-judical commission" would be established "to examine the background, loyalties and attitudes of all persons of the Japanese race in Canada and to ascertain those who are not fit persons to remain here." To prevent those found to be loyal concentrating once more in British Columbia he suggested that they would be "given encouragement to move and remain elsewhere" and that a maximum would be set on the number allowed to return to British Columbia. Though Mr. King announced this plan in August 1944, nothing was done to implement it until February 1945.

In February 1945, the Government began to carry out its segregation plans by introducing a "voluntary repatriation" plan for all persons of Japanese ancestry in Canada. Members of the R.C.M.P. visited every relocation centre giving the "opportunity" of application for repatriation. (The word was a misnomer, since most Japanese Canadians had never been in Japan and hence could not be sent back). If any refused to sign the petition they were informed they must either re-establish east of the Rockies or place themselves in a position where the Government could accuse them of lack of co-operation in carrying out its policy of dispersal. In effect, the Japanese were given the alternatives of deportation to a land many of them had never seen, or settlement in a strange and hostile neighbourhood, which settlement they had no guarantee would be permanent.

The survey was completed in May 1945 and 10,632, almost one-half the Japanese in Canada, were involved. It is difficult to believe this result was entirely voluntary. Though the Minister of Labour emphasized the fact that there was no pressure, coercion or force used in taking applications, it seems that fear of loss of livelihood; separation from families; suspicion of being disloyal: represent a more awful form of intimidation than physical violence. In fact, the signing of application forms was no basis for judging loyalty but indicated the difficulty and insecurity involved for the Japanese in moving to Eastern Canada under the uncertain and restrictive conditions which existed. This fact is born out in statements and petitions by various Japanese Groups.

Furthermore, many did not regard signing as a final binding decision because they had been led to believe that at a later date they would be permitted to cancel their applications if they desired. A petition on behalf of all the Lemon Creek Japanese who requested repatriation bore this out.

FOLDER NO. 8-14

In July 1945, three test cases were launched by the Japanese seeking a judicial order first to prevent the government from repatriating any Japanese and second to render illegal steps previously taken. In other words, the Japanese, realizing the applications they had been induced to sign were being held irrevocable, were attempting to establish that these could be retracted.

Such was the situation on October 5, 1945 when Bill 15 of the National Emergency Powers Act was introduced into the House of Commons. Clause G of this Bill was aimed at controlling "entry into Canada, exclusion and deportation, and revocation of nationality." This clause provided the legal foundation for completion of the segretation program. In effect, if Clause G had been passed, it would have given the government the right, by Order in-Council, to cancel Canadian citizenship. Because of the pressure of public opinion, which took a dramatic about face at the end of the war, and the opposition of provincial premiers, clause G was not included when Bill 15 was passed on December 7, 1945.

However, on November 21, 1945 the Minister of Labour, Mr. Humphrey Mitchell announced that the Government would not permit revocation of applications by Japanese nationals, would permit revocation by naturalized Canadians if made prior to September 2, 1945, and would review Canadian born cases. The government supported this action with the statement that failure to revoke until Japan was defeated was proof of disloyalty and grounds for the Minister to deprive them of their citizenship and expell them from Canada.

On December 17, 1945 Mr. Mackenzie-King tabled Orders-in-Council to implement Mr. Mitchell's statement. The Orders, passed on the basis of the War Measures Act, were to continue in force during 1946, giving the Government the right to enforce deportation and revoke nationality.

These Orders-in-Council were refered to the Supreme Court January 9, 1946 by the Federal Cabinet after the Co-operative Committee on Japanese Canadians requested action. The Court met on January 25, 1946 to decide if the three Orders-in-Council were valid either in whole or in part.

The three Orders were linked together in a complete scheme to define; classes of people deportable and conditions of "deportation" removal of Canadian status after deportation; appointment of a lo-

(Continued on page 8)

Japanese Treatment. . . .

(Continued from page one)

yalty commission.

The questions raised by the Order-in-Council involved several important constitutional problems; the right of sovereign authority to expell and deprive of citizenship, without trial and against his will without charge of misconduct, a citizen by rights of naturalization or birth. The questions at issue in the Court Reference fell under two headings: the right of deportation and the right of denaturalization. The persons affected by the deportation order fell into four classes: born Canadian nationals; naturalized Canadians; Japanese nationals; wives and children of the above. All these were declared by the Orders to be deportable.

The Justices ruled that the government had the authority to deport Japanese nationals, British subjects of Japanese origin and Canadian born Japanese who requested to be sent to Japan, but did not have the power to deport wives and children of men in these three classes. Under this ruling then, it became possible for Canadian born Japanese to revoke their requests for repatriation.

But, the Co-operative Committee on Japanese Canadians was not satisfied and spurred on by growing public opinion it announced its intent to appeal to the Privy Council. On March 13, 1946, Prime Minister King announced the deportation action was obtained. However, any Japanese wishing to go to Japan would be provided with whatever financial and governmental assistance possible.

A contingent of 1,300 Japanese repartriates left Vancouver for Japan on August 2, 1946. This was the third contingent of repatriates to leave on a voluntary basis. Other contingents left on May 31 and June 16, 1946. This was the last group to be willingly repatriated. Further deportation had to wait until the Privy Council decision was made. On August 5, 1946, Labour Minister Mitchell announced that "3,156 Japanese have been repatriated from Canada to Japan to date."

(To Be Concluded Next Week)

FOLDER NO. 8-14